

校友會雜誌

第拾五號

大正六年三月發行

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立萩中學校校友會

表面題字は松陰先生手
寫稿本中より選びて撮
影引延したるものなり

新山口縣立
校友會雜誌第拾五號目次

會友武田弦介

○察生活の思出

五一頁

文苑

會友武田弦介

○卒業後を想ふ

第五學年

白井正夫

○我國民の性格

第五學年

木村清一

○學生の行に於ける感

第四學年

村上壯一

○飛行機觀覽記

第三學年

櫻井義彥

○我鄉の產業

第三學年

百濟義雄

○玉江浦の水産業

第三學年

玉一市五郎

○忍耐

第二學年

増野節兼

○松陰神社

第一學年

天野敏介

○春の風

第四學年

瀧口純

○A Comparison

T. A. 生

○The Way to Escue Death

M. Nagamine

○The Present War

Y Kodama

○The Moon

S Kaneko

○Oyoshida Shoin

K Iwashaki

雜錄

.....

四頁

江木議員
久能中將
安藤教諭

七頁

- 就任の辭
- 展覽會出品優等書畫(口繪)
- 第十六回卒業生記念撮影(口繪)

會長 岩田博藏
同 岩田校長

七頁

- 立太子禮要旨
- 聖德及國體

講演

七頁

- 松陰先生と乃木大將
- 航空機及歐洲戰爭
- 座右銘講義

特別會員 安藤紀一
會友 中子 德一

德一

○The Excursion

Y Kora

○From Hagi to Seoul in Chosen M. Inoue

會誌

七〇頁

- 部長改選○漕艇部記事○縣下各中學校聯合武道大會記事○野球部記事○第十七回陸上大運動會記事○書道部展覽會記事○畫道部展覽會記事
- 地歷部展覽會記事○十年勤績教員表彰式○劍道部記事○柔道部記事○部長更迭○辯論部記事
- 山口縣體育會記事○會友訃音○大正四年度會費收支決算○同上會基本金收支決算○同上短艇新造費積金決算○同上大典記念事業費收支決算

校誌

一九頁

- 長距離競走○野外演習記事○卒業式○賞品賞狀の授與○黑金本縣知事來校○修學旅行○學友長の改選○一日旅行記○桑原本縣學務課長來校
- 海軍記念日講話○乘杉文部省督學官來校○大賀本縣內務部長來校○江木貴族院議員來校○江木氏主催觀月茶話會○久能中將來校○長岡中將

附錄

六

- 山口縣立萩中學校沿革略○職員表○學級數及生徒數表○武學貸費生表○卒業生一覽
- 古谷少將來校○花田中佐來校○毛利公爵來校○立太子禮奉祝式○學友區長更迭○聖駕遙拜式○松陰先生追慕會○高橋文部省視學委員來校○古谷少將孫原海軍大佐來校○安村海軍大佐來校○送迎彙報○寄宿舍農園記事



形態記念生卒回六十第

○The Excursion
○From Hsi to Shih in Chuen M. June

會 誌

○海天徵選○清樂部記事○縣下各中學社聯會式

選大會記事○野球部記事○第十七回陸上大運動

會記事○書道部展覽會記事○畫道部展覽會記事

○地質部展覽會記事○十年勤耕教員表彰式○耕

農部記事○委道局記事○部長更迭○耕讀部記事

○山口縣教育會記事○會友訃音○大正四年度會

費收支決算○同上會基本金收支決算○同上會

新嘉坡馬來西亞○同上會基本金收支決算

校 誌

○長廷理賈史○新嘉坡習記事○卒業式○晉品實

狀的授與○羅克本縣知事來校○修學旅行○學友

長の改選○一書班行記○臺灣本縣學務課長來校

○海軍記念日講話○柔移文節省督學官來校○大

賀本縣內務部長來校○江木貴族院議員來校○江

木民主催觀月茶話會○久能中將來校○長岡中將

附 彙

○山口縣立新中學校沿革略○職員表○學級數及
生徒數表○武學貸資生表○卒業生一覽

立太子國舉儀式○學友關切更迭○聖誕禮拜式○
松陰先生追慕會○高橋文滿者祝壽○掛車板○古
谷少將孫原海軍大佐來校○安村海軍大佐不校○
送迎電報○寄宿舍機關記事



影 基 志 生 業 半 回 六 十 第



就任の辭

予は、茲に、三度、當校に勤務することとなりたり。萩地最高學府に、重
大なる責任を負ひ、有爲の青年を輩出して、萩地の光輝ある歴史に恥ぢざ
るものあらしめんと思へば、衷心實に安んずる能はざるなり。然れども、
萩地方青年には、必ずや、一種言ふべからざる貴き血液の流るるものあら
ん。予は、其の之れあるを信じて疑はず。是に於て、萩中學校は、鞏固な
る一團となりて、自疆不息、恪守淬礪、以て、質實義勇の人士を得んこ
す。庶幾くは、校友の努力ご、先輩の同情ごを得て、此の目的を貫徹せん
ことを

大正五年十月

山口縣立萩中學校校友會長 岩田博藏

天地大德。君父至恩。報德以心。

志復恩以身。此日難再。此生難復。

此事不終。此身不息。

松陰

山口縣立
該中學校

校友會雜誌第拾五號

訓話

立太子禮要旨

(十一月三日立太子禮奉祝式に於ける岩田校長の訓話)

本日を以て、立太子禮の盛儀を行はせらる。臣民たるもの、善く其の意義を了解し、赤誠以て之を奉祝すべきものであります。

皇太子殿下

御名は裕仁と申し奉り、今上天皇陛下第一の皇子にまします。明治三十四年四月二十九日御誕生あらせられ、御年十六にまします。御資性極めて聰明、御身體も亦甚だ強健に渡らせられ、大正元年九月九日、大勳位に叙し、菊花大綬章を授けられ、陸軍歩兵大尉としては、近衛歩兵第一聯隊附、海軍大尉としては、第一艦隊附にあらせらる。御學事は、大正三年三月、學習院にて、初等學科を御卒業し給ひ、其後引き續き、東宮御學問所にて、御修學せさせ給ふ。東宮御學問所とは、皇太

子殿下の御教育を司る所であります。謹みて按するに、殿下は、將來、皇位を繼承し給ひ、我が帝國を統治し給ふ御方たることは、申すまでもありませぬ。これ抑、皇祖天照大神が、天孫瓊々杵尊に、神勅を下し給ひ、この瑞穂國は、天孫相嗣ぎ、連綿として、皇位に就かせ給ふことを定められたるに、その源はあるのであります。故に、

帝國憲法 皇位ハ、皇室典範ノ定ムル所ニヨリ、皇男子之ヲ繼承ス。

皇室典範 大日本國皇位ハ、祖宗ノ皇統ニシテ、男系ノ男子之ヲ繼承ス。皇位ハ、皇長子ニ傳フ、

儲嗣タル皇子ヲ、皇太子トス。

と規定せられたのであります。即ち大正元年七月三十日、今上天皇陛下皇位に就かせ給ひしと同時に、殿下は、皇太子となられしものにて、只本日は、その壯嚴なる儀禮を行はせられて、既定の事實を、天下一般に宣示せらるゝのであります。

儀 禮

此の儀禮は、かくの如くにして、國家大典の一なれば、其の御儀式も、亦簡単といふべからず。今其の要をいはば、立太子の御儀は、賢所の大前にて、行はせられ、立太子の詔書を公布せらる。これは明治天皇が、祖先崇拜の大徳により、國體の本義に基きて、特に創めて定め給ひし御事と拜察します。いふまでもなく、賢所とは、八咫鏡を奉安せる神殿であります。此の御儀式に於て、特に注意すべきことは、皇太子殿下が、兩陛下の御前に進ませられ、勅語と壺切の御剣とを受けさせ給ふことであります。此御剣は、第六十代醍醐天皇が、皇太子たられし時、御父君宇多天皇の授け給

奉祝心得

立太子の大禮は、申すまでもなく、皇運隆昌の表現であります。今や所謂文明を誇りとせる歐洲は、殺伐の戰雲に掩はれ、父を失ひ、子を棄て、兄弟相分れ、悲慘言語に絶す。此の時に當りて、我が帝國は、御稟威尊く、この日出たき盛儀を、津津浦浦舉つて、七千万の國民は、滿腔の赤誠を披瀝して、奉祝し得るのは、例ふるものもなき幸福此の上なきことであります。此に於て、吾等青年は、善く皇祖の神勅を畏み、立國の大本を辨へ、我が國體の世界無比なる所以の自覺を、層一層深くし、益々感激奮励、愈々智能を啓發し、德器を成就し、以て忠良の臣民たる資質を作り、必ず天壌無窮の皇運を扶翼し奉らんことを、期すべきものであります。

聖德及び國體

(十一月十六日 聖駕遙拜式日に於ける岩田校長の訓話)

先般來、九州筑肥の野に於て催されたる、陸軍大演習に、大元帥陛下は、親臨、畏れ多くも、風雨を冒し、軍營生活の辛酸を嘗め、以て之を統監し給へり。其還幸の途次、本日本縣防府町にある、舊藩主毛利公爵邸に、御滞在の旨、仰出されたることは、本縣民的一大光榮として、感激に堪へざる所なりとす。此の如く、現在格別に、吾等の腦裡に一種いふべからざるものを感じる際、茲に諸子を集めて、國民精神の根基につき、告ぐる所あらんとす。

由來、我國は神國なりといふ。其意味は、或は神の肇めさせ給ひし國、或は神の護らせ給ふ國等、唱ふることを得れども、亦神と國は、同一物、即ち神なる國、國なる神といふことを得べし。然らば神とは如何。神は善のみを爲し、人以上の力あるものなり。善事、即ち國民の幸福安寧を進むべきことにして、到底、人民の力によりてなし能はざることは、國家の力にて之を行ふにあらずや。交通、殖産、工業等、あらゆる方面の事業を見ば、自ら瞭かなることあり。然らば國を神なりといふも、亦當らざるにはあらざるべし。

吾人は、近來人格なる辭を用ふ。心理學と倫理學とにては、自然其内容異なれども、茲には、統一せる精神作用ある人たることの意味とす。之に對して、國格、神格といふ辭をも、設くることを得べし。以下、天皇と此の三者との關係を考究すべし。

天皇は人なり。勿論人格を有せらる。而も我國の天皇は、生あらん限り、天下を統治し給ふものにして、決して、退隱以て餘生を送るなどのことあし。即ち天皇といふ公生涯のみにして、毫も私生活あるなし。生あらん限り、日夜、月に花に雨に雪に、國民蒼生の狀態に、轉念遊ばさる。誠に尊崇すべき、純潔無二、毛頭、私心の存在せざる人格を有し給ふものなり。即ち天皇にして、初めて私心と公心との一致を見る。心の欲する所は即ち國民の幸福安寧の外なきものなり。

明治天皇御製

ことなくて、おさまるよにも、たみのため、ふもふこころは、やすむときなし。

今上陛下御製

としあしに、わかひのもの、さかゆくは、いそしむたみの、あれはなりけり。此の如き御製を、拜誦するまでもなく、天皇は私心なき公心のみの御方なることは、明瞭なる事實なり。總て人格の尊きなきふ根本は、身を棄てゝ仁をなす博愛犠牲の精神にあり。忠臣傑士は皆是なり。私心の少なければ少なきほど、尊きことの多きものにして、洵に天皇は、比較し得らるゝ物なき、尊き人格の御方なり。殊に遺傳が、生物界の大真理とせば、此の純潔無私、全力を盡して國民を愛撫し給ふ、皇系連綿として、今日迄皇位を繼承し給ふ天皇は、難が上にも、其尊崇は加はらざるべからず。國家は、人民を包容して其福利を期す。此國家其者を、一の能動者とせば、何人がよく之を代表して、其所期をなすものか。換言すれば、國家の表現人は、誰を最も適當なりとすべきか。言ふ迄もなく、最も私心の少なきもの、即ち全く私心なきものあらば、是れ實に、遺憾な

き完全なる國家の代表者なり。抑も、或國の元首の如き、或は投票の數によりて定まり、或は一定の任期に制せらる。此關係此時間に於てのみ、公人格あるもの、此以外にては、私人格のなき者は、全然其内容の異なること、當然なりといふべきなり。

神格は如何。古來我國は、皆元旦に當り注連縄を軒頭に張り、自ら年首に在つては、總て俗想を洗ひ、邪念を去り、神たらんことを期するにあらずや。吾人は神の子孫なり。誠の道にかなひなば、何人も亦神たり得るなり。神は遠くに在ます、修養努力をなさば、各己少なくとも小なる神にはなり得るなり。豈神として、人の形體を備ふべからざるの理あらんや。既に前述の如く、天皇は一切私心なく、私即ち公、自己即ち國家、邪念もなく、俗想もなく、念ふ所、期する所、悉く國家蒼生の事ならざるなきは、我國の天皇なり。我國の天皇は慈悲博愛の權化と申し奉らざるべからず。前來考へ來りたる所によれば、

無私人格＝國家表現＝神＝天皇

ならざるべからず。即ち我國の天皇にして、初めて、人、國、神は歸一し、尊むべく、據るべく、信すべく、拜すべきものと論斷すべきものにして、畏多くも、本日吾々が御迎へ奉る、大元帥陛下は、眞に現日本に於ける、此の三者の歸一せる、唯一無二の、完全なる表現第一人者と申し奉るべき御方なり。諸子と共に、此の意義をよく了解し、赤誠を盡して、今日と明日とに於て、奉迎送を致さんとするものなり。

講演

松陰先生と乃木大將（江木貴族院議員講演要旨）

長嶺元二
桑原芳樹
秋山宗一
筆記

今朝、既にれ話して置いた通り、私は松陰神社のはとりに、宿泊することになつた。今日は、恰も松陰神社信徒の先達たる、乃木大將の命日である。私も乃木大將と共に、松陰神社の一信徒である。先年東京にて營んだ松陰先生の五十年祭は、乃木將軍野村子爵及び私の三人で舉行したのである。その乃木將軍の命日に、松陰神社の側に宿泊するのは、千萬無量の感がある。それで今夜は、諸子と共に、乃木將軍記念會を開いて、先生と乃木大將との關係に就いて、私が知つてゐるだけ話さうと思ふので、私は乃木大將の全體に就いて話をするつもりではあい。先年松陰先生の五十年祭を行つた其の以前より、どうか五十年祭を盛大にしたいと思つたが併し其の盛大といふは、賑やかにする云ふ意ではない。偉人の祭をして世の氣風を一變する様な事がしたい。だんく一般の德義が乱れるやうであるから、此の時五十年祭をやつて一般の風教を補ひたいと云ふつもりであつた。それで私は野村子爵や乃木大將と會合して、如何に祭をしたらよいかを議した。それには先生の傳を作つて、其れを全國に知らせ、ろれから遺稿を總て出版して全國に普及させ、殊に防長の各

小學校へそれを配布したいと云ふ考であつた。其れが爲には費用がかゝる。併し祭典の費用は大き
くはならぬが、遺稿を出版して配布するには多くの金がかゝる。それに就ては豫算を立てゝ入用の
金高は定まつたか、さて其の金の出所は如何にしたらよいか。高潔なる偉人の祭をするのに、近頃
は寄附金を募集することが流行するが、自分等は成金の輩から金を出させて祭をするなきは本意で
はなかつた。何となれば彼等の中には心の卑しいものが多いからである。それで此の輩には断じて
申込まぬことにした。そんなら如何にするかと云ふに、これはどうしても毛利家に縁深いことであ
るから、御本家及び御末家方の出金を願ふことにした。先生の傳を新に作ると云ふことは容易でな
いから、徳富猪一郎の著の先生の傳を修正して之を出版したのである。松陰先生の傳を作るのはよ
ほど困難で、昔先生の門人等が先生の傳記を書うとしたが高杉晋作がためた位である。そこで野村
子爵乃木大將自分で三人で色々書きこみ、これを徳富猪一郎に送つて修正させたのが即ちこの傳記
である。此の本は上等で四、五圓、普通のは二圓、學生用は九十五錢である。此の傳記を出版する
にも、部數は多し中々費用がかゝる。又遺稿の方は大部のもので、それを出版して祭を行ふには四
千圓計りかゝるので、これを毛利家に出してもらはうと思ひ、乃木大將にこの事につき相談した。
(其時大將よりの返事手紙朗讀)時は切迫してゐるので、豫算を早く決したいとて、乃木將軍の手に
依つて寄附金配當の考案が出來た。昔の石高により一万石につき五十圓と定め、毛利御本家が二千
圓、長府が三百五十圓、徳山が三百圓、岩國が三百圓としたのである。今日なれば所得稅に準じる
とかするのだが、一万石五十圓とせられたのは大將のやり方が面白い。此の日大將と二人で高輪邸

に伺つて、御寄附を願つた所が、何分大金なので、毛利家だけに出すのは面倒なれど、何とかせん、
しかし四千圓とは余りひどい。もし減することは出来ないかと申されて、其の後しばらく返事が
なかつた。其内に時機は愈切迫して來た。それで又三人會合して、これはどうしても今日手を着け
なければ間にあはん。毛利家の出金を待つてゐられながら、第二の方法を考へようといふ事にし
た。其の爲に又々會合した。いつも野村子爵が十時に御用がすむ故、其れから三人で相談するとい
ふ様のことであつたから、今度は早く開きたいといふのである。(其時乃木大將からの手紙朗讀)時
に私に一つの考が出た。其れは其の頃野村子爵が氷川町の屋敷を賣られた。それで子爵には大分金
が入つた。私は之を知つてゐるから、子爵に二千圓を出させ、大將は一年困ればよいからといつて
千五百圓、自分のは恩給から五百圓と定め、此の夜會合の場所と定めた麻布御殿へ出る途中大將の
邸を訪ひ、玄關にて、今晚は金の相談であるが、自分は此の様に定めたがと云つたら、大將は自分
のはそれで宜いが、君に恩給から出さるのは氣の毒である。しかし其の案は賛成すると、直に承
諾せられた。其の晩麻布御殿の會合で話は一決した。それで翌日から着手した所が、毛利家から御
出金といふことになつた。今の世は人心日々輕薄になりゆく時であるから、此の際毛利家の名を出
すのは必要であるからとて、出金しやうとのことであつた。それから更に委員を選んで、五十年の大
祭を行ふことが出来た。世田ヶ谷の神社に招待した來賓の中には、遠い者は東京市から三里もや
つて來るのであるから、相當の御馳走を出さねばなるまいと云ふ議が起つた。すると大將は握り飯
に若布を着けたのでよいと云つて、いつかな聞き入れない。防長の人士たちならそれでも宜いけれ

も、國務大臣などを集めては、防長流義でござるといつて、すますわけにもゆくまいと云ふ反對論が起つて、とう／＼折衷して、粗末な折詰にした。他縣知名の人士もこられ、我先輩の伊藤井上山縣などの諸公も皆揃つて來られ、立派に祭が行はれた。そして豫期の如く、傳記も遺稿も出版し、全國に普及せしめたのである。是の如き日本の偉人、否世界の偉人の五十年祭に當り、國民的の記念會を催さぬと云ふ筈はないと思ふ時、文科大學の井上哲次郎氏が主催となつて國民的に行つた。帝國教育會が、東京の諸種の學會を纏めて盛に行つた。自分も會員に加はつて相當に助力したのである。東京の高等商業學校の大講堂にて舉行した。一體大將は、平素公開の席で演説することは非常に嫌いであつたのが、先生の五十年祭の國民的大會には演説をやられた。『只今丁度八時を打つたので思ひ出したことを一寸申すが、明治四十五年九月十三日午後八時は、先帝の御大葬の時刻で、輜重發引の儀を行はれ、大砲一發の相圖に、明治天皇の輜重は宮城を御出發になつたのである。此の時の號砲は全都に響き亘り、國民皆涙に咽んだのである。此時大將は刀をとつて先帝に殉せられた。今晚は此の時刻に於て、桃山なる乃木神社の移靈式が行はれるのである。誠に其の時刻に此の所で諸子に講話するのは、因縁の深いことであると、そぞろに一種の感にうたれる。』話は前へおどるが、公會の席上で演説することの大嫌な大將が、國民的記念大會に出席して一場の演説を試みられたのを以つて見ても、大將が如何に松陰先生を信仰崇敬せられたかを知ることが出来る。其の時の詳細なる事は、松陰先生五十年祭記念大會記事に載せられてある。大將は、『自分は松陰先生を信仰する一人である。先生の眞筆にかかる士規七則を玉木翁から貰つたが、常に御守の様にし

てゐて、軍人勅諭の出ない以前は、其れを肌から離さなかつた。明治十年の役に敗軍して逃げる途中河へ飛びこんだ時、士規七則を守りの短刀をそそてた。其の後色々探したが、遂に二つながら見當らなかつた。』と云ふ様なことを演説せられて、聽衆を感動させられた。先生の事となれば、自分の大嫌な演説もやられた。かくして五十年の大祭もすみ、其の結果は、我國の教育上に好影響を及ぼしたことは大であると信する。其れから五十年祭の時に、先生に關するよい唱歌を見つけて、之を歌はせたいと思つて居たが見あたらない。それで音樂學校へ行つて、先生を歌つた歌でもあれば見せてくれと頼んだら、『未だ先生に關する歌はない。先年一つあつたが其れは廢案にした。』と云つた。自分は、『其れを得ることは出來ないか』といつたら、古い記録を探して出してくれた。持ち歸りて讀んで見ると、誠によく出來てゐる。これは東京第一高等學校教授土井某と云ふ者が作ったのである。それで『何處が悪いか。悪い所があれば知らせてくれ。之を修正して用ゐたいから』と音樂學校へ頼んで置いたが、更に返事がない。そのうち先生の五十年祭のことが新聞にも出る様になつた。それで其の後如何になつたかと學校へ問ひ合すと、あれは、國民唱歌の中に編入して出版したと云つた。先生は、昔の頑固な攘夷家として、現今のハイカラの目には、あまり止まつて居らなかつたのであらう。それが今度の五十年祭に就いて調べて見ると、偉人であるといふ考が、にわかに起つたのではないかと思はれる。先生は頑固所ではない。今日吾々の行つてゐる事は、先生の意の半分が出來て居るか居ないかである。貿易は坐して向から來るのを待つてゐる様ではならん。出交易をやらなければならん。又此の本土だけではだめである。滿洲、蒙古、暹羅、安南等を

も日本のものにして、帝國を大いに廣げねばならんと申されて居られる。汚らはしい外人を攘へと云はれるのではない。日本は一億五千万の人口がなくては、國が立つて行くことは出來んと世の人が云つてゐるが、先生は其の昔から知つて居られた。此の偉人のことが知られずして、御祭までは國民唱歌にも上らなかつたのが、次第に世人に知られて、今日では小學校の修身などにも、士規七則の一箇條を入れて、全國八百万の兒童に學ばせるやうになつた。世が進み學問の開けるに従つて、先生の意見が次第に現はれるのである。諸子が小學校に在學中、義を解せし者があつたが、義を知らずしては國民たる値はない。軍人精神の中にもなんとあるか。「義は泰山より重し」とあるではないか。我國民は、普通教育を受けても、義を云ふ者を知らぬ不具者であつたが、近頃は義といふことが教科書に載せられたのである。即ち彼の第三則にある、「義は勇に因りて行はれ、勇は義に因りて長す。」といふ一箇條である。今は「先生は昔の頑固な攘夷家である」など云ふ學者が居る時は時勢が違ふ。これも五十年祭を行ひ、國民大會を催したことによつて、先生を解して、學問が進んだ證である。先生の墓は世田ヶ谷にある。先生のが一番中央にあつて、其の左右に小林民部大輔頬三樹三郎等の勤王志士の墓がある。初先生が小塙ヶ原にて刑場の露と消えられた時木戸、伊藤の諸公が、獄吏に金を遣つて、屍を貰ひ受け、棺の蓋をとつて見られると、髪は乱れてゐたが、顔色は生きてゐられるが如くであつた。それで水で顔を洗ひ、首を繼ぎ、羽織を脱いで着せ、而して其の所へ葬られた。これが未の年であつたが、たしか五年の後亥の年に朝廷より幕府に國事犯を特赦せよと云ふ沙汰があり、罪名を解くと云ふことになつて、高杉、伊藤、品川の諸公が小塙原に埋め

てある先生の遺骨を、若林なる毛利家の地面へ改葬せられた。これが松陰神社の本である。其の時同時に殺された小林民部大輔頬三樹三郎なども、一所に葬つたので、それで其の左右に勤王家の墓があるのである。松陰先生の五十年祭を行つたときに、野村子爵と乃木將軍と私どもが墓參をした。その時野村子爵が云はれたことに「自分が先年病氣であつた時の遺言書に、若し死んだら先生の御墓の側へ埋めよ。」と書いて置いたが、幸に其時の病氣は全快して、其の事は止めになつたが、此の後無くなつたら、此の邊に埋めてくれよと洋枕で地をつゝかれた。其時は來原良藏の夫人の墓のへりであつたが、其の翌春は死なれて今日は其の所に墓がある。先生の墓よりは小さくしてある。其の翌年の祭に先生の墓に參つたら、大將は早くから行て心配して居られた。それから二人で墓を拜み、自分等が死んだら何邊に埋めてもらつたらよからうかいといふと、大將は、自分は門下生ではない信徒であるから、此の墓地に入る資格はないと言つて、大いに反対せられた。みんなに謙遜な人であつた。大將が死なれた時に、葬儀に就て相談があつたから、其の談だけは云つて置いたので、先生の墓地には埋めなかつた。乃木大將の如き偉人が、かやうに松陰神社を信仰せられたので、先生の墓地には埋めなかつた。乃木大將の如き偉人が、かやうに松陰神社を信仰せられたので、先生を聞いて、松陰神社の側に居る諸子は、如何なる感を惹き起すか。今少し近い例をひくが、本縣の人で東京の帝國大學の文科を修め、立派な教育學者となつた人が、私を訪ねて来て、「私は松陰神社信徒の一人であります。先生を學ぶと吾の如きものは飯が食はれない様になりはしないかと思ふが如何でありますかと云ふた。」普通の青年なら説明もしてやらうが文科大學の卒業者であるから、詳しく述べる必要はあるまいと思つて、只「食はれる迄やつて、食はれぬ様になつた

ら死ねれば宜いではないか。』と云つたら、直ちに分りましたと云つて歸つた。一寸弱音を吐いた
様に見えるが、眞に信仰するからう云ふやうなことを云つたのである。もう一人、これも本縣出身の文學士で、教育學を修めた立派な人が居る。此の人を私が知る様になつたのはかうである。嘗て私は東京で山口縣出身の學生會に出て、別に談すこともないで、『どうも此節學士とか學生とかいふものには、優れた人は居らぬ。丁度河蒸氣船の様な人が多くちよこくしたことはやるが、大海に出ることの出来る者はない。』と云ふ話をし且松陰先生の話の一、二をした。其の後其の内の一人が手紙を出して、『先日は松陰先生の話を聞いて感服致しました。それで一日御邪魔に参る』といふのである。それから他日會つて見ると、其の人が云ふには、『私は萩より大分遠い所の者であるが、中學校在學中から色々先生に關する話を聞いて居たが、萩に出て松陰神社に參り、松下村塾を見て非常に感じた。かゝるさゝやかなる塾から俊才を輩出したといふものは、實に教育の力である。教育の力の偉大なることは、今更ながら感心の外はない。それでどうしても自分は教育家とならんと思ひ、大學に入つて教育學を修めた。』と云つた、其れに自分は感服した。其後交際するに、至誠を以て立つてゐる人を見ゆる。それは毎年歸省して兩親を慰めるのであるが、今度の休には兩親を如何して慰めようかと、東京に在る間から考へて、夏になると歸り、六十日も居る間に三十日だけは計畫通りにやるが、其の後はやることが出來なかつたと歎息する様な人であつたから、眞面目な人であると思つた。或年彼が大病に罹つて大學病院の分院に入つた。私は惜しいことだと思つて青山博士

に、『この人を殺して呉れるな。あれは日本に取つて大切な人間である。』と、毎日院長にせまつた。危篤の際に遺言はないかと聞くと、それは親友に云つてあると云つたが、親友は之を秘密にして人に知らさぬから、どう云ふ事が有るか分からぬけれども、思ふに中々確乎たる意見を陳べてあると云ふことは、信じて疑はない所である。實に用意周到の人であつた。此の人は明治四十五年に帝國大學を卒業したので、その卒業式への御臨幸は、先帝陛下の最後の御臨幸であつた。此の時は先帝陛下は既に御病氣に罹つてゐらせられたが、それを推して行幸遊ばしたのである。所が此の人は卒業式場では、天顏を拜することがよく出来ぬので、どうかして天顏をよく拜したいと云ふ考から、此の日は卒業式に列せず、二重橋外にて先帝陛下の御出御を待ち受け、之を拜したのである。所が此の人は卒業式場では、天顏を拜することがよく出来ぬので、どうかして天顏をよく拜したが、遂に御崩御遊ばしたといふを悲んで居た。松陰神社に參拜して、奮勵して教育家になるといふことは、近傍の者にはないが、却て遠方の者にこの通り居るのである。諸子はよく省みて、至誠と云ふことを思つて、わづかな利益に目をつける様なことをしてはならぬ。山口縣人は、海軍は不利益など、云つて居てはならぬ。可成多く志願者を出すやうにせねばならぬ。我等の様な老人が、いくら逆立して氣をもんでもしかたがない。これは誰の責任か。皆諸子の責任である。諸子の血液は立派な血液であるが、今は之れが腐敗しつゝあるのであるまいかと思ふ。乃木將軍の話にもどるが、先帝陛下が御病氣中は、自分も常に夜の十二時頃迄宮城内に居て、翌朝は早々參内するのであつたが、乃木將軍はいつといふことはなしに御伺をせられる。陛下が御崩御の夜は、特に將軍顔色土の如しであつ

た。やがて崩御になつたので、我々は詰めてゐた東溜間より西溜間に移つた。まもなく新帝践祚の儀が行はれたのである。御通夜は皆毎週二三度したが、乃木將軍だけはやはりいつでも來られる。朝飯後にはろつと出ては、殯宮の側に坐せられ、又夜中に不意に來たりせられた。それから私は今に大變遺憾に思つてゐることがある。それは自分等が休憩して居る室にやつて來られたとき、私が、「明治神宮は建てなくてはいかぬ。」として神宮には、仁德天皇の陵が水に流れて土地を灌漑し、其によつて天皇の惠を臣民にしのばせたと云ふ様に、先帝陛下の御遺物を集めて、博物館の様なものを設けたらどうであらうか」と云ふと、乃木將軍は「それはいかん。君がそんなことを云ふからどうもならぬ。全く伊勢神宮の風にやらねばならぬ。」と云はれた。次の日も將軍は通夜に出る。控所へやつて來て、又「君の意見はいかん。あんなことを君の様な教育に關係のあるものが云つては困るではないか。」と云はれた。九月九日に又控所で會つたので、自分は「博物館と云ふ語が悪るかつた。日清戰役の記念品が陳列してある振天府のごとく、其の御遺物などを陳列して置いて、臣民に拜観させると云ふのである。」と將軍にことはつたら少しは了解せられた様であつたが、まだ満足はせられなかつた。それから九月十三日までには會ふ機會がなかつたが、遂に薨去せられたので、實に遺憾此の上ないのである。十三日は私は足が悪いので、葬場殿の方へ先着して居つた。乃木將軍は八時になくなつて居らるゝのが、陛下の御耳にははいつて居つたらしい。私は御附のものから耳にしたが、甚だ疑惑した。夜中の二時に、先帝の輦車は青山の臨時停車場から、京都へ向けて汽車で御出發になつた。それを御送り申して、歸路に就いた。乃木將軍の邸の方角を取つて歸る

に、しさりに號外々々と云ふので、買つて見ると、果して『乃木將軍夫妻の自殺』と云ふことが載つて居る。けれども詳しいことは一向分らぬ翌朝に至つて將軍薨去の有様が分つた。其の筋から取つた寫し繪によつて見ると、將軍は軍服を著け、割腹して居られた。落着いたものである誠に立派に死んで居られた。午後八時の輦車發引の儀の號砲によつて、全部の人間が皆等しく涙に咽んだときに、乃木將軍は自殺されたのである。自殺は道に合はぬことであると云ふが、將軍の殉死だけは内外ともに賞讃せぬものはなかつた。乃木將軍の志は即ち松陰先生の志で、松陰先生の志は即ち山鹿素行先生の志を受けたものである。共に道德上の偉人である。自分は本月二十三日に歸るが、二十六日は素行先生の命日であつて、自分は素行會の幹事であるので、歸るや否や山鹿先生の御祭をし、同時に乃木將軍の記念會を開く考である。此度松陰先生の誕生地に來て、先生と乃木將軍との關係を陳べ、又歸ると直様素行會に列すると云ふことは、實に奇遇で、私は之を思ふと一種の感に打たれるのである、今迄陳べて來た要点は、くれぐれも諸子の記憶に存せられんことを希望します。

航空機及歐洲戰爭（久能中將講演要旨）

重村幸一筆記

私は、校長さんから申された通り、久能中將であります。本日は、當地出身の、長岡中將閣下が、

親しく御來校になつて、御話の筈で御座いますが、咽喉を御痛めになつて今日は御出でになりません。そこで私が参りました。唯今から御話することは、初は目下歐洲及び我國に於ける航空機が、どういふ風に進歩發達して居るかに關して述べます。但し、米國は省いて置きますが、米國は歐洲と同様に心得て宜しい。

人間が鳥の如く空中を飛んで見たいといふ者は、餘程古い時代から頭に浮び出た。それは、西洋の宗教などに、天女とか、羽のついた子供の繪があるのを見ても解る。殊に、我國では、たしか岡山附近と思ひますが、幸吉といふ男が居りました。羽をつけて、鳥の様に飛んで見たいと工夫して、其の羽を身につけて、高い所から下へ飛び下りた。丁度、それが花見の時で、人を驚かしたので、役人は、之れを罪して、追放しました。先づ徳川時代に、こういふ人がありました、我國で、始めて氣球を、空中に揚げたのは、明治十年、陸軍士官學校教授の上原六四郎君が、命を受けて、上野で、内國博覽會の時に揚げて、明治天皇の觀覽を忝ふしました。其の時は、輕氣球で、風船でありまして、浮揚力に依つて、下の笊を持ち揚げる所以である。次に明治十一年、士官學校の新築落成式の時、校庭で、再び氣球を揚げて見せました。其の時の寫真は今もあります、日本に於ては、そういふ時代に、かゝる事を行はれましたが、外國では、以前より研究して居りました。最初は、鳥と同じ形の物で、飛んで見ようと工夫しました、所が飛べない。それで、或る生理學者の説に依り、人間は鳥よりも重いから、羽をつけても飛ばれぬと知つたから、一時研究を中止しました。十八世紀の末、再び研究を始めました。就中、英國のマキシムド、佛のペノード、米のラングリオ、獨の

ルリエンタル、が最も力を盡しました。其後研究の結果、實際に近い飛行をしたのは、一八一九年で、ルリエンタルが高所より下に飛び降りる研究をしたのである。始めは三呎位の所から飛び、後には、五十呎の所から飛び、千度以上も練習し、二百米三百米を滑走することが出来る様になりました。しかしそれは發動機に依つてではない。此のルリエンタルは、年齢十五歳から、飛行機に興味を持ち、研究中遂に悲惨の最後を遂げました。其後、米國のオハイオのライトが、ラングリオの研究を土臺として飛行機の工夫をしました。彼は自轉車商賣であつたから、飛行機に多少の關係を持つて居りました。そこで、數年間研究の結果、稍々原始的の發動機を用ひ、原動力にて飛行しました。それから、今から十四年前米國の片田舎で、飛行しまして飛べたのは僅かの距離ではあります。だが、先づ成功しました。しかし之れまでになるまでの彼の苦心は非常なもので、三四時間は親戚父兄から、狂人扱にされました。千九百三十年に飛んだ時も人にかくれて、飛びました。そして、確かに飛べるといふことが解つたので、早速米國政府へ、請願書を出して、特許を願ひました。それが政府は許さない。今から二十五年前にもそういうふ事を申し出た者があつたが結局それは不可能であつた。前が飛べたといふのも、多分それは、前年の夢であらうと頗る冷淡でありました。そこで、ライトは其の飛行機を携へ英國に渡りましたが、相手にされないので、また佛蘭西へ行つた。其處で今より十年前、佛國のマンス平原で飛びまして、成功しました。それから二年後、佛國大統領の前で飛んで見せ、見事に成功しました。是に於て、人々は、其の眞實に飛べる者であるといふ事を知り、研究者が續々として出まして、今日に至りました。其間數多の失敗者犠牲者少からず、

或は親譲りの財産を蕩盡し、或は大切な命を失ひ、其の結果として、今日の完全なる發達をなしたのであります。であるから、吾人は、この失敗者の犠牲的努力には、満腔の敬意同情を拂はねばならぬ。何事でも、一朝一夕で成る物はない。飛行機に於てもろうであります。之れで由來は終ります。

次に、飛行機は、如何いふ具合に進歩して來たか、之れを數字で御話しよう。明治三十九年は、距離に於て二町餘、四十年には、七町餘、四十一年には三十一里、四十二年には更に五十八里、四十三年には百四十七里餘、大正二年には、三百里、此くの如く、年々歲々進歩して、大正三年には、四百二十五里を飛ぶに至りました。要するに、二町位から、數年にして、東京から上海まで、一氣に飛行する様になつたのである。今日はもつと進歩して居る。高さは、大正三年に、八千五百米、凡る富士山の二倍位、機體の重量は、一噸三分で、乗組員十六人、速さは五十一里弱、これが、歐洲戦が始まつた大正三年八月までの、歐羅巴飛行機のレコードであります。次に、飛行船の方は、早くから發達し、佛のルナー、獨のツエツベリンなどは、最も之れに力を盡しました。飛行船の研究が、早く進歩したといふことは、記憶して貰ひたい。

大正三年八月頃迄の、獨逸と日本との、航空機に於ける發達の状態を比較するど、次の通りであります。此の年獨逸の航空機に對する海軍のみの豫算は、二千五百万圓である。所が日本では、三十万圓であります。彼には、飛行船中隊十六箇、飛行機中隊十三箇あるに對し、我には唯、氣球隊一、飛行船が一つといふ有様だ。しかも彼の一中隊は、飛行機の數少きも二十隻、多きは、六十隻

を有し、總體で二千二百五十隻、日本は陸海軍を通じて、僅かに三十隻、又研究團體は、彼には四十六箇所、ベルリンのみにても三箇所あるのに、日本には、僅か一つといふ有様であります。獨には飛行協會員五万三千人、飛行學校は二つありましたが、日本はない。彼には、民間研究所二ヶ所、民間飛行場二十あるが我には無い、又飛行機といふ物は、山でも、田へでも降りるといふわけにはいかない。機體を破損する恐れがあるので、平地にしか降りられない。そこで着陸場の必要があります。此の着陸場が、獨逸には、四十二箇所あつて、其内、二十一箇所は夜間着陸場で、強力なる電氣燈の設備があります。それに、日本には一つもない。又彼には飛行機工場が十箇所あるが、我にはこれも一もありません。彼方では、皇帝を始めとし、聯邦の君主、富豪等が、發動機發明者等の爲に出す金額は非常なもので、全國四十六箇所の飛行協會に對し、民間の義捐金は、大約七百万圓なるに、我に於ては僅か四万圓に過ぎない。實に驚くべき懸隔ではあります。是れは皆、當事者の冷淡と、國民の無頓着なりし應報と曰はざるを得ないのであります。

獨逸と日本とは、研究の第一歩を、同じ年に起しました。我國では明治四十二年、臨時軍用氣球研究會が起され、會長は長岡中將で、豫算は六十萬圓でありました。獨逸では、益々飛行機研究の歩を進めて、物になり、軍事上に應用の計畫がありました。殆んど同時に研究を始めたのに、五年間に斯くも、設備に差が出來たのは、多分金に原因して居るのであります。即ち、大正三年度の獨逸陸軍の航空費は、五千万圓、即ち、二千五百万圓であるに對し、我に於ては、歷代の陸軍大臣が、漸次削減して、三十万圓に値切つて仕舞ひました。折から歐洲大戰亂が勃發して、實戦に航空機を應

用するに至り。各國競ひて、進歩發達を謀りました。今日は戰事狀態であるから、祕密にして居るから解らないが、必らずや、目覺しき發達をして居るでせう。總べての調査報告を綜合するに、目下獨逸には、飛行機の數ばかりでも、三千隻、ワ式飛行船が百數十隻、之れ等を操縦する飛行家は、約七千人あります。聯合軍は六七千の飛行機を有し、敵味方合せて一万餘の飛行機と飛行船が、歐洲の天地に活動して居ます。然るに、顧るに、目下の日本はどうでありますか。飛行家は總て、七十人、其内所澤の航空隊を卒業した者が三十六人、民間飛行家三十四人、しかも餘り上手ではない。歐洲の各國は、實際の必要上、盛んに新式飛行機を造ります。例へば、獨逸は今、大型の飛行機を建造中であります。それは從來のにくらべて、六倍の大さがあり、一時間の速力七十五哩、距離六百哩を續けて行くことが出来ます。八名の乗組員を乗せ其の上に、三千封度の重量を載せることが出来る、其の荷物の代りに乗組員を増せば、三十人乗ることが出来、砲や機關銃も乗つて居ります。馬力數は、發動機が七個あつて、其内百馬力が六個、四十馬力が一個あります。發動機の中には、タンクがあつて、之れに火を點けると、プロペラが廻り出し、其力で飛行機が進みます。飛行機は、空氣の抵抗と、プロペラーとで浮揚する。獨逸の飛行機は前述の如く、六百四十馬力あります。佛國では大型の飛行機が昨年十一月、試運轉を行はれましたが、之れは、翼の上の長さ七十五米三葉であります。額號は十五米であります。此の新式飛行機は、速力一時間八十哩、航續時間は八時間であります。速射砲二門、機關銃二門、爆弾二百五十、其他を乗せることが出来ます。も一つ大型の飛行機がロシヤにあります。之れは軍用ではありませんが、食堂、電話室もあります。

り、乗組人員二十五人、速力は遅く、軍用には不適でありましたが、ロシヤの陸軍省では、其後之れに改良を加へ、今日では立派な軍用飛行機にしました。航續時間は五十時間發動機は、三百馬力が合計四個、一千二百馬力あります。速射砲二門、機關銃四門、乗組人員十二名、世界一の軍用飛行機であります。一時間の速力は、百六哩であります。其他獨逸には、も一つ小さくて敏活なホツケル式飛行機があります。馬力數は百五十乃至百六十馬力で、インケルマン氏、フロツキー氏が之を操縦してゐます。此の飛行機は、昇騰力が強く、千米を七八分で昇ります。普通のは以前は、千米を二十分乃至三十分で昇りましたが、目下は二千米を二三十分で昇騰します。ホツケルは之を七八分にて上り、急角度で昇騰し、上空に在つて、逆さになつて上から機關銃を浴せかけます、されば操縦者を撃つといふ利があります。其の有様は、丁度鳶が魚を見つけて舞ひ下りる様だといふことです。操縦者は皆有名な飛行家で、聯合軍の飛行機も、之れに出會つては敵ひません。又獨逸には、數十隻の飛行船があります。運動は快活にはいかんが、人員、材料を多く乗せることが出来ます。最新式のは、三十人乗せて、一時間に四十三哩飛び、航續時間は四十八時間で、二百五十貫の爆弾を乗せることが出来ます。見らるゝ通り、目下盛んにロンドンを始め、英國の海岸を脅して居ります。此の如く今日では、日進月歩、新飛行機を造り空中戦に應用します。所が我國の飛行機はどうでありますか航續時間は三時間で、一時間の速力は六十哩、砲及び電信はありません。前記の諸國に比して、勢力其の半分にも足らない。又其の數も百に満たないのであります。其他民間飛行家は皆で僅に三十六人と所ふ様な有様です。實になさけないではありませんか。兎に角、今述

べた如く、今日日本と歐洲諸國とは如此相違があります。戦争に於ける飛行機の役目は、爆弾投下、即ち破裂弾を積んで天空から降らす。今歐洲の軍用飛行機は防禦装甲が施してあり、速射砲を若干宛載せて居り、無線電信をも備へつけて居ります。爆弾の搭載量は二百五十貫で、餘り澤山載せることが出来ないから多い時は六十隻、少ない時でも二十隻位の飛行機が、一團をなして、丁度聯隊大隊の如く働きます。三十隻の飛行機は爆弾を百發載せて、四十里先の目標に行き、其處から歸つて來ることが出来る、飛行船は、一隻に就き、爆弾二百五十貫を載せ、三百哩隔つた目標まで行き、爆弾を落して歸る。即ち京城から東京に來て、又引返すことが出来るのであります。此等の爆弾を

軍の首腦部とか、兵器廠製鉄所、其他軍事上に關係ある倉庫、軍隊輸送列車を目掛けて落下させるのである。ろして之れが一度命中すれば、非常なる損害を被らせることが出来ます。其他フランスでは、飛行機から矢を降らせる。此の矢は、長さが四寸餘で、之れを彼の飛行機の集團が、天空から數百本數千本降らせるのであります。獨逸兵が此の矢を受けた寫真を見ましたが、矢が、胃を通り、腹を通り、其の馬を通つて居る。實に雨の降る様に矢が降るので、避け様がありません。次に、飛行機の任務は、敵状偵察である。敵が進行して居る時分なら、遙かに敵の頭上に飛んで行き、敵が何程来るといふことを、天空から見て、無線電信にて知らせ、敵に對する手配をさせ、敵が陣地に居る時は、上から其の陣地の寫真を撮ります。此の寫真は、二千米以上の天空から撮ることが出来ます。速遠寫真機といふのであります。それは、上から寫真に撮り、自動車の内で現像し、歸つてそれを地圖に貼り付けるのであります。斯うしますと、敵の狀況は、一目瞭然として分ります。

次には飛行機は、彈着の觀測をします。それは、天空に在つて、味方の發した砲弾の着如何を、早速、無線電信で知らせるのであります。又、敵の飛行機を驅逐します。敵の飛行機が、味方の陣地に入らうとする、入れまいとする。此處に空中戦が始まつて、劣勢な方が負ける。されば、優勢な飛行機を造らんとして、頻に新工夫を凝らして居る。ヴエルダンの要塞戦では、日に三十三回も空中戦をやつた相であります。飛行機を擊つ爲には、下から、飛行機射撃砲を發しますが、これはあまり中りません。飛行船は形が大きな爲、敵の領土に向つて、爆弾を落しますが、この襲撃は、下から撃ち落される懼があるから、夜間に限つて居ります。獨逸のツエッペリン式飛行船の發明者である、ツエッペリン氏は、陸軍中將であります。數年間研究の結果完成したもので、此の飛行船は獨逸の強味であります。昨年戦が始まるや否や、ツエッペリン飛行船は、倫敦を襲撃し、倫敦市民は、寢耳に水の有様でした。昨年九月三日、十月八日に、飛行船は又倫敦を襲ひました。で此感想を書かした。其一に曰く「私の母さんの寝室に掛つて居た額が、赤坊の頭に落ちて、赤坊は氣絶しました。母さんは赤坊を抱き起しました」二に曰く「人々は狂人の如くなつて飛び廻り、硝子窓は、微塵に碎けてゐた」之れは十歳の男であります。次は十一歳の男の子が書いたのである。「妹が、あの空の星を見て、飛行船だといふから、あれは、飛行船ではないと教へてやつた」次のは、「始めて戦争といふものを知つた。が罪の無い人の頭の上に、爆弾を落すのは、本當の戦争でない」次のは、多分惡戯小僧で、始終家にゐても父さんに叱られて居さうな小供と見え、斯う

いふ事を書いて居ります。一、お父さんは、飛行船が来ると、すぐ、向ひの麥酒屋に駆けこんで、勘定臺の下へ隠れました。斯ういふ具合であります。こんな事が三ヶ年に亘つてあつては、實に仕末に終へません。同じく一十三日に見舞ひ、九月は五回も來た。キソミス博士は、この飛行船の襲撃を知つて居つた者が、九千四百人の九割方であると言つて居ります。これを知らなかつたのは、餘程の寢坊助であつたと見られます。之れは一に、英國が、獨逸を侮つた爲で、平素、準備と用意とを怠つてゐたからであります。英國の議員は、此事に就いて、大いに激論した者もありました。海相は、今最善の力を盡して、飛行機考究に勤めて居る。我國は獨逸は不覺を取つたと申して居ります。で、獨逸は、始めの期待の如く、効果は無かつた様であります。これを知らなかつた事は確かであります。或時は、飛行船が、十二隻も揃つて、英國の工場を壊し、數千万圓の損害を被らしたといふ事であります。兎に角、十二隻の飛行船を已が領土の上へ來させたのは、不名譽ではあります。所で、獨逸の飛行船は、巴里へは頻繁にやつて行かない。それは、戦争前佛國は、獨逸よりも、飛行船に於て、兄貴株であつたからである。佛國は、航空事業に於て餘程進歩して居ります。したから、獨逸もそれに負けず、劣らず務めたので、今では、全く、兄たり難く弟たり難しといふ有様であります。あるから、佛國では、獨逸は自由行動を、執ることが出来ないのあります。ところで、一方英國や佛國の飛行機が、獨逸へ飛んで行かないのは何故であるか、ベルリン迄は遠いとしても、獨逸の境界位へは、行つても宜かりさうなものではあります。此事は、多分自分の力が不足だからではありますまい。今度の戦争は、如何に獨逸が優勢であつても、空中戦は、空

中の武器を以つてせざるべからず、といふ事を教へて居るものであります。日本が今、獨逸の飛行船に襲はれたとして、最も不幸なことには、日本の家屋は、大抵木造であるといふことです。今航空機から、燃焼弾でも、落して御覽あさい。それころ大變です。燃焼弾は、軽いものであるから、多数持つて來ることが出来ます。それをせんく上から落された日には、日本は、數日にして、全く燃焼されるであります。これは、決して、白日夢ならざることを信するものであります。が或は斯ういふ人があるかも知れません。それは、英國と獨逸との如く、近い國の間のこと、日本と獨逸との様に遠い國には、左様な事があるものかと、しかし今も言つた通り、航空機は、四十五時間経てば、桑港から、日本に飛んで來ることが出来る。米國と交戦するとしたら、日本は、二晝夜を出でずして、焼き盡くされるであります。更に若し、母艦を、近く對馬邊りへ、持つて來られたら如何であります。我飛行機の貧弱は、如何にして此等を防ぐことが出来るであらうか、いくら大和魂を舞り振はしても、これだけは駄目であります。况んや、今年は、日本は獨逸と交戦状態にあるではないか、獨逸に餘裕があつたら、今でも飛んで來るかも知れない、實に寒心の至りであります。これを如何したらよいであらうか、嘗思つたばかりでは済みませぬから、たゞへ遲滞を乍らも、此時有事の日に對する方法を、官民一致して講せねばなりませぬ、焦眉の急として、航空機を搭へ、飛行學校工場等を建設し、飛行家を養成して置かねば、萬々一の場合に、如何にするか、今の大正の御代に至つて、二千年來、金甌無缺の國家を、一朝にして汚すやうなことがあつたら、祖先に對して、會はす顔がない、安閑たることは出來ないではありませんか、然るに、我政府人民、

共に此の事に關して、對岸の火災觀して居るのは、何事でありませうか。我國は、豫算をも増さないで、却つて之れを減じて、大正三年度には、三十万圓にしたりして、安閑として長夜の夢を貰つて居るが、一朝戰が始まり、敵の爆弾にて、目を覺ましても、遅いのである。

然るに我國には、飛行機がどういふものであるか、どういふ利害があるかといふことに關する知識がない、又飛行機を研究し改良する人がない、そこで國民の全般に亘つて飛行機の智識趣味を與へんとするのであります。又國民には、飛行機の如何なる物なるかを知らなものが多い、そこで現物の飛行機を持て来て目に見せ、かういふ話をして國民に飛行機の智識趣味を與へ、尙進んでは飛行家を養成し、有事の際に提供する者であります。今回の飛行大會は、國民に飛行機の智識を與へると同時に、地方の人々の貢助を得たい爲であります。飛行協會員たるんとするものは、一人に就き會費一年に三圓であります。又本會からは毎月國民飛行の雑誌を出します、一冊の價十八銭位と思ひますが、之には世界に於ける飛行界の現狀が悉く書いてあるから、飛行界の現狀がよく分ります、貴君方も父兄から買つて貰つて見られたらいでせう、會員は老若男女を問ひません。飛行協會の主意については既に言つたから言ひません、次に飛行機について智識を持つて居らんと馬鹿を見るといふことについて、一つ面白いお伽話の様な御話を致します、がこれは事實あつたことであります、先般獨逸の飛行將校中尉二人、ロシヤのガリシャ地方の偵察に來て見た所が、敵の方は飛行機が居らない、そこで思ふ存分爆弾を落したが、ふと氣がついて見るとプロベラの音がどうも變だ、揮發油が少くなつて居る、二人は非常に困り、窮狹のあげく露軍の居る田舎に降りどう

かしようど、飛行機を先づ陸に着け、泰然として機から降りる。其時は揮發油は殆んどない。村の者は珍らしいから集て來るが、彼等は教育がないから、此の將校は我國の人ではないようだが、さて英人やら佛人やら分らぬ。飛行機が獨逸のやら何處のやらそれも分らない。すると其中の一人が突然之は英國の飛行機だといふ。二人の飛行將校は之を奇貨とし、どうか揮發油を持つて來て呉れぬかと頼んだ。上し來た、とばかり其中の若者二三人が村の方から揮發油の罐をかたいで來た。二人の將校は喜んでタンクに入れ、やがて飛揚して三百米の所から見ると、無邪氣な村民は手を振り手巾を振り飛行振がよい等と褒めて居たといふ話がある。若し此の中に一人でも獨逸の飛行機だと知つて居たら二人の將校は譯なく捕へられたのであります。是は馬鹿な話であります、飛行機の事を知らぬと斯ういふ馬鹿な目に遭ふといふお伽話の様な一例であります。飛行機の話は是で止めまして、五分ばかり休んでそれから目下歐洲戰爭の現状を話さうと思ふ。

明後日飛行する飛行機はモーリスファーマン式軍用飛行機で、大體に於ては我が軍用飛行機と同じであります。馬力は七十馬力で航續時間が四時間、速力一時間二十二里であります。此の飛行機の飛ぶのを見ても、あれより大きな奴が頭上から槍を降らせてはたまりません。然し舉國一致して航空機に力を盡し敵機を擊退せば、如何なる敵でも怖るゝに足りません。

さて是より歐洲戰のこと話をしますが、詳しいことは話すことは出來ませんから其の概略を話すことになります。今度の大戰争は此の如く大規模のものであるといふことを考へて貰ひたい。先づ第一に兵力と戰場の關係について述べます。日露の役奉天の大會戰は兩軍合せて約百万人で、其内

日軍が四十万露軍は六十万、戰線の長さは二十里に亘り、國民は古今未嘗有の大戰として驚きの目を張りました。然し日本人の驚いた奉天戰も數十年の今日に於ては一の小戰に過ぎません。歐洲戰場は新聞紙上にある様に東方戰場と西方戰場とに分れて居て、東方戰場は露西亞に、一方西方戰場は英佛聯合軍に向つて居ります。西方の戰場の方は英佛聯合軍が三百六十万、獨軍が二百二十万で合計約六百万の兵數であります。戰線の長さは北は北海から南はスuisに至るまで百七十里で、日本の鐵道線路で計ると、東京から姫路附近までの間で、年間にすつと兵が列んで居る譯である。兵の配賦は一間の間に聯合軍は十五人、獨逸の方は十六人の割合で、獨逸は相對する力が半分であります。そんなら東方戰場はどうであるかと言ふと、露軍の兵數は二百八十万獨塊軍は二百十万で合計四百九十万の兵が居りまして、東京から小倉の少し南までの距離と等しく、其間に兵隊が列んで居ります。兵の配賦は一間につき露軍は四人強、獨軍は三人弱位であります。所が諸君も新聞で御承知の如く、今度ルーマニヤが聯合國側になりました。ルーマニヤの兵數は四十万であります。之が爲東方戰場は長さが長くなり、東京から博多の少し向ふの鳥栖邊までの距離と同じ位になります。然もそれが主力なる東方戰場と西方戰場とのみである。此の他伊太利戰場には百万の伊太利軍と四十万の塊軍が居り、更にトルコ、サロニカ方面を加へると未だ長くなります。日露戰爭の時は日本の一師團が散開した廣さが一里であります。今日では六間の間に一箇師團の兵が並ぶ。實に大變な兵數であります。今いふが如く東方西方兩戰場を合せ戰鬪員は一千五百万で、是は第一線

に立つて居る人のみで從軍兵數は尙多いのであります。之を總計しますれば五千万人にも達するであります。其れ程大なる人數が鎧を削て居ります。徵兵の年齢は塊を除けば何處も同じく満二十歳から四十歳の間であります。此頃の戰争では佛蘭西は十七歳から四十三歳、英吉利は十七歳から四十五歳、露西亞は十七歳から四十一歳、塊太利は十八歳から四十五歳、伊太利は十七歳から五十歳までの間の時から兵を徵集して居ります。其れだけの壯丁から召集する兵の割合は佛が 85% 、獨が 72% 、露が 50% 、英が 63% 、塊が 81% 、伊が 52% の割合になつて居る。大變の兵數が戰場に立つて居ります。今度の戰争につき聯合國と同盟國とを比較するに、同盟側は人員を始め總べての力が半分であります。先づ人口の方から言ふと、同盟は本國領土の總人口七億四千万人、協商國側は十億六千万で、此の内協商國側の本國の人口三億同盟國側は一億四千万、富は協商側が四千億圓で同盟側が二千億、既に消費せる軍備は協商側が二百七十億圓同盟側が百二十億圓。又彈丸を消費する量が實に大したもので、ヴエルダン要塞戰に於て百日間に獨軍の消費した彈丸が千四百万發、佛軍は千百万發である。日露戰爭の時旅順で費した彈丸數は三十三方發で、奉天戰に消費した彈丸數を合してやうべルダン戰一日の彈丸消費額に當るといふ様な有様であります。次に鐵條網は兩軍合して九億六千万米に及び、この長さにて地球を十四卷巻く事が出來、其の價格は二億八千万圓に上ります。又大きな大砲を作り、獨逸では四十二吋砲といふ様な有様であります。大砲の重量十七噸即ち二万二千五百貫、砲彈の一發の重さ八百貫、價格一發五千五百圓といひます。三十八吋のカノン砲を作りましたが此の射程距離は余程長くあります。本年一月一日午前九時、三

万四千米の距離からナンシーを砲撃し、二百二十貫の砲弾を年頭の御祝儀として贈りました。此のカノンは最大射程が九里であります。二百五十貫の砲丸が九里も遠方まで飛んで行く等とは夢の様な話ですが、今實際に打つて居るので仕方がありません。それから自動車について話しますと、英佛露合せて三十万輜以上の自動車を有し、此等が戰場で盛に活動して居ます。此の自動車でやりさへすれば一軍團の兵を一二日で移動させる事が出來ます。これは法螺でもなんでもありません。然るに日本はさうかといふと全國合せて自動車數が一千五百臺、軍用自動車數が二十臺しかないといふ有様であります。昨年末の英國の自動車數二十二万、自動自轉車數が二十二万三千であります。次に獨逸國民が如何に全力を盡して居るかは次の事で判斷することが出来るだらうと思ひます。獨逸軍で從軍して第一線に立つて居るものが三百四十万人、後方勤務に從事する者が百十萬人、教育中の補充兵が百三十万人、死傷者及捕虜となりし者三百二十万人即ち獨軍の總數は九百万に上つて居ります。開戦當時の獨逸の人口は六千八百万人で、其の四半分即ち三千四百万人を男子であるとすると其の $\frac{27}{4}$ 即ち四分の一強は從軍して居ります。獨逸は十七歳以上四十七歳の壯丁で軍務に耐へ得る者は悉く召集してゐますから、國內に殘れる者は十七歳未満の者、四十八歳以上の老人及び不具者のみであります。昨年開戦と同時に競ひて兵役を志願し、政府は志願休止を命じましたが其後間も無く其の希望を許しまして、開戦後一年にして二百万の志願者がありました。其の志願者は中等學校上級生の大部分、師範學校豫科生の八割、大學高等學校生徒の大部分であります。其の比例を取ると大學生の出征者の割合が 65% であります。中學校以上の男子の數が七十万九千人で、其の

内五万九百人が兵役に服してゐます。昨年九月までに戦死した法律家が千九百六十五人で、又小學校教員十五万人中出征した者が五万五千人で、其内今年二月までに死傷した者が八千五百六十九人あります。中學生徒の三分の一、大學生の二分の一は從軍してゐます。獨逸國民の愛國心の一端は農業の上にも現れて居ます。苟くも耕作する事の出來る地は庭でも何でも皆耕作し、他國から取寄せる事の出來ない作物を植付ける。又扉の把手額様の金具を取り外して陸軍省に寄附したり、或は腕の飾指輪等に至るまで政府に寄附して戰争に盡して居ります。澳大利の坊さんは鐘を非常に大切にするが、是を兵器の材料として提供した。獨逸の今日までの戰利品は小銃百四十万挺速射砲九千七百門、機關銃三十挺に上り、此の戰利品だけで立派に百師團出來ます。獨の占領した土地は五十四万平方里で、我國本土と朝鮮を合せた程の廣さで、其の人口は四千六百万である。英佛露は捕虜小銃等は取つたが地面は一つも取つては居りません。先程言つた通り獨逸は英佛露に比べて力が半分しかない。ろれに之れだけの獲物をして居る此の原因はよく考へて見なければなりません。今度の戰争で彼は物質上の事では負けて居るが或る他の力で勝つて居る。それは平素の軍事教育が國民全般に普及され、一旦思ひ立つた事は、萬難を排しても之をなし遂げる忍耐力克己心が有つて、困苦缺乏に耐へる様な精神が出來て居るから、兵力は半分しかないが、優勢な地位を保て居るのであります。最後の事は分らんが、戰争開始以來足掛三年たつたが、獨逸は決して負けまいと思ひます。此の節英軍が攻勢を取つて、一ヶ月半掛つて大阪市より少し大きい位の地面を得た。是では全部取返すことは一通りの事ではありますまい。然も今や二人は一生懸命取組んだ儘だ。祖先は七年掛つ

て勝敗を決したが此度は未だ二年二ヶ月しかたつて居ない。今からが本氣だ、今から追々やると英吉利は言つて居ますが、それだけ戦が續くかどうかは解らんが、獨逸が力が足らんのにかゝる優勢な地位を占めたといふことを考へて貰はなければなりません。長州は維新の際、數多の傑物が出て、國家の爲に盡して居られるのは、誰も承知して居る所であります。私は昨日始めて松陰神社に行き、松下村塾遺物等を實際現物に就いて拜観しますと、言ふに言はれぬ感じを催しました。それで器具材料が澤山なければ戦争が出来んと云ふことはない。松下村塾の如きは、僅かに八疊の狭い家であります。然るにそれから伊藤野村久坂といふ様な人が出て居ます。して見れば、建物はどんなものでも、先生に其の人を得、其の心根を持つて勉強すれば、立派な人が出るであります。明倫の講堂は實に立派であります。此の中から出て來た諸君から立派な人が出ないといふことでは、先輩に對して濟まんではありますか。況んや目前に松陰先生の實物教訓を受け、他地方では、見る事の出來ない、精神修養上、絶好の位置に居られる諸君の内に於てをやであります。以前では軍隊と國民が別々であつたが、今日ではそれが一つであります。戦が起ると、十七歳から四十五歳までの者は、足腰の立たない者の外は、皆出なければあらぬ。其の時は國民と軍隊との區別はないのであります。一朝事ある際には皆戰線に立たねばならぬと覺悟して居らねばなりません。ロシヤでは婦人小兒までも從軍して居る。十二三歳十四五歳位の少年が隊中に居り伍長になつて居る者、或はケオルギー勳章を下げて居る者を多く見かける相だ。將來戦争が起つた場合には、日露戦争位では済まん。猶多くの人員を要し死傷者も多く、從つて壯士が澤山要る。であるから今日では

一身上の利害を考へて居る場合ではない。いづれ此事については、長岡中將から御話があらうと思ひますから是だけにします。

次にも一つ人間は鍛錬によつてどうでもなるといふことを話します。今度の歐洲戦争について獨逸のハンブルクにある三井家の支店長で品川源三郎といふ日本人で一番長く獨逸に止つて居つた人の話に依ると、獨逸では戦争が始まつてから、すぐ、カイゼルを始め馬鈴薯で作ったパンを食ふ様になつた。品川氏は獨逸の國境に居たが、半年ばかりして品川氏に使はれて居た一人の獨逸人が尋ねて來た。食料缺乏の今日彼もさぞ不自由を見て居るであらう、且個人としては主従の關係もあるので、彼に問ふて何でも御馳走してやらうと言つた所が、彼は御馳走は何にもいらぬパンを呉れと言ふ。そこで三ツ四ツ與へたが皆食べて見ると未だ食事をせぬといふ。そこで色々の御馳走を出してやつた所後一時であつたがよく問ふて見ると未だ食事をせぬといふ。何にもいらぬパンを呉れましたが、スーパーは吸ふたがビフテキは半分ばかり食ふて後の者は餘り食はぬ。何故かと問ふと、政府から食物の量が定められたので、それが習慣となつて、胃が收縮して餘り食へませんといつたようになります。開戦後獨逸は博士委員が集つて、人間はどれだけの物を食べれば活動が出来るかといふ事を研究し、其の量を定め食物を半減して戦を續けて居ます。これに依つて見るも如何に獨逸國民が真剣であるかゝります。かゝる事は獨逸國民ばかりではない誰でも出来る事であります。私は朝飯が食へるので二食にして居りますが、現に津和野から山口に至る十四里の間を人力車に乗り、午後一時山口へ入る時の所へ来ました。そして午後三時頃餛飩を食べて外の物は何も食べませんでした

したが、別に何ともありませんでした。私が實驗した時もさうであります。獨軍が巴里に迫つた時は六日間飯も食はずに行進を續け、遂に巴里附近まで押し寄せました。途中仆れた者もあらうが其の忍耐力の強い事は驚くばかりであります。依つて我國も國が小さいとか金がないとかいつて、心配する必要はないのであります。忍耐さへあれば、國を立派にする事が出来るのであります。思ふ存分話す事が出来ぬので殘念であります。前後に亘つて長い間御謹聽せられた事に對し厚く御禮を申します。尚體力を養成し、防長の先輩に恥つることのない様にせられん事を希望します。

松陰先生遺文座右銘講義（安藤教諭講義要旨）

三好忠良筆記

一日在世。一日有爲。人言何問。吾心自知。
雲霧雖翳。天日赫曦。姦賊得志。能保幾時。
道若得聞。死何足悲。天壽不貳。修身俟之。

今年は、吉田松陰先生が、御死去にあつてから、丁度五十八年になります。先生は、安政六年十

月二十七日に江戸でなくならましたが、この十月二十七日は大陰曆でありまして、大陽曆に換算しますと、十一月二十一日に當るのであります。それで本日その五十八年祭が行はれる譯であります。二十一回猛士と稱せられた先生の御祭が、二十一日にあるのは何か不思議な感じが致します。先生は天保元年のお生れで、三十歳の生涯長いとは云はれないが、その偉大なる御事業は、一朝一夕には言ひ盡すことは出來ません。諸君も既にその一部分は了解してゐるであらう。私が校長の御命令で、先生の遺文について何か話を話すことになつて、一番早く私の頭に浮んだのが、即ちこの座右銘であります。私が幼年のとき、この文により、初めて松陰先生と云ふ御方のあつたことを知つたのであります。さてこの座右銘と云ふのは、常に自分の誠にするために、手近に備へて置くものであります。しかし、之は先生の坐右銘ではなく、先生が安政六年五月二十一日、江戸へ行かる前四日、或人の依頼によつて之を作られたのであります。先生が江戸へ行くことを知らるゝようになつたのは、その五月十一日で、門生其他の人々が、之を聞いて、野山の獄に來て御暇乞をします。それで第一句は「一日世に在れば一日なすことあり」で、先生は曾て人生僅に五十年、何か腹の癒える事をして死なねば、成佛は出來ぬと云はれてゐますが、人は死ぬ時がわかつても、死ぬまでは勉めねばならぬといふ意。次が「人言何ぞ問はん吾心自ら知る」。この意味は、先生が曾て歌に咏じて居られます。「世の人はよし惡し事は云はゞ云へしづが心は神ぞ知るらん」。これは、先生が下田で米艦に乗ることが出来ず、幕吏に捕へられて、江戸の獄に在る時、白井小介に與へた書

に、この歌があつたのであります。次は「雲霧翳すと雖天日赫曦あり」。之は譬であつて、赫曦とは盛な日光と云ふ意味であります。次は「姦賊志を得とも能く幾時とか保たん」。之の賊と云ふのは、世が進むに従ひ、人はこの進歩を助けねばならぬのを、却つて妨害する者を賊と云ふので、反対に、世の進歩を助けて、人の道を盡すのを仁と申します。それで、この文の賊も、當時國家の進歩を妨げる者を指したのであります。具体的に申しますと、當時外國人が段々日本に来て、漸く日本も世界的になつて來ますのに、國に二つの統治者があるのは、萬國へ對する道でない御者へになつて、即幕府は朝廷の下にあるべきもので、皇室を尊奉して、幕府の權を剥がねばならぬ事に成るのありますから、毛利家の人も、尊王を志さず佐幕の志の人があれば、その人は先生の爲には賊であります。しかし、姦賊は到底長く勢を得て居る事は出來ぬと云ふ意味で、先の第四五句は、即ち雲霧を姦賊に天日を皇室に譬へたものであります。次に「道若し聞くを得ば死何ぞ悲しむに足らん」とは、人の行ふべき道を、若し先輩故人から聞く事を得たなら、死んでも決して悲しむに足らんと云ふので、この所に、先生の當時の不斷持ち居られた精神が見えます。先生は死を決して悲しまれません。唯無駄な意味のない死を悲しまれたのであります。朝に道を聞けば夕に死すぞも可なり。之は孔子の語であります。道を聞いて、人の行ふべき道を行へば、只今すぐ死んでも遺憾はない。即死何ぞ悲しむに足らんと云はれました。次は「夭壽貳せず身を修めて之を俟つ」と読みます。夭は早世、壽は長生の意味で、早死するから大事業を企てゝも無益だとか、長生するからそんなに齶齶せんでもよいとか云ふように、早世と長生とによつて、心を色々に動かすことをせず、夭壽は

思量の内に置かず、只だ人の盡すべき事をして、運命を待つと云ふ意味で、この二句は、孟子と云ふ書の中にあります。さて、この坐右銘の意は、先づ右の通りでありますが、先生はお言ひになるばかりでなく、これを實行に表されて居ます。其の例は、先生が、書生の時、病氣の爲め、片河の佐分利良哲と云ふ醫者に就て、診察を請はれたことがあります。其の時醫室に、「盡人事以俟天命」と、書いたものが掲げてありました。是は、醫者には適當な戒であると思はれ、後年には、進んで、人は何業でも、この事が必要であると云ふことを思はれたとのことであります。諸君の上級生の中には、この學校は遠からず去つて仕舞ふので永くは居らぬから生徒としての務は、よい加減にして置くで宜しいなど考へて居る人はあるまいか、成績のよくない人の内にて、いづれ今年は駄目であるから、勉強しても効なからんとて、自暴自棄する人はあるまいから、もあるなら、其等の人々には誠によい箴言であります。又、先生は下田で米船に乗ることが出來ずして、金子重輔と云ふ人と、下田の獄に投せられました。獄は僅一疊の間で、寝るにも不自由であります。處が先生はろの時にも、「一日在世、一日有爲」の御考があつたから、無爲に暮らすのは固よりつまらぬと思はれて、牢番人に依つて、赤穂義臣傳、三河風土記、眞田三代記の三書を借りて讀まれました。漢の世にも、夏侯勝、黃霸と云ふ二人が、牢につながれたことがあります。其の時、黃霸が切に夏侯勝に教授を請うたその例をひいて、先生は金子重輔氏にも勉強を促されました。此の如く先生は、自ら勵み、人をも勵まし、この五二月十五日出發して、江戸に赴かれたる後も、刑場の露と消えらるゝ十月二十七日までは學を廢せられず、色々と天下後世を思ひて、筆述を怠られなかつたのであ

ります。周防國遠ヶ崎明圓寺の月性は、勤王の志の厚い僧で、先生とは氣もよく合つて居ました。が當時、種痘が初めて此の藩に行はれた時、月性は、これを詩に作つて種痘を罵つて、人間の死生には自ら命があるから、死ぬるものは如何にしても死ぬる、必ずしも、牛臘を人身に種うるなどの心配をするに及ばぬといふ意を述べました。今から思へば頑固な考へであるが、當時は、月性のみならず、種痘を快く思はぬものは多くあつたのであります。が、先生はこれを駁し、人事を盡して天命を俟つと云ふことを引いて、論じて居られます。

當時の先生は、今日のやうに近郷から崇はれてはをらなかつたのみか、罪人として取り扱はれ、その、吉田家は知行も貰はれず、士族の籍を外されてゐた位で、或一部の人は、この浪人に就きて學ぶは穏ならずと云ひ、或は、先生を狂顛と呼びました。彼の奥平謙輔といふ人も、主義のある人でありましたが、この時は、先生を評して、「獄に行きさへすれば氣概があるやうに思つてゐる」と罵つた位で、先生に對する非難の聲は至つて高い。これらに就きて先生は人「人言何を問はん」と云はれたのであります。が、後、雲霧はれて、天日が表はれたのであります。即ち、先生の意を繼ぐ者が出て来て、維新の大業を翼賛し奉ることとなりました。元來世の中は、絶対す活動進歩して行くもので、人は、其世の中の物であれば、世の活動の弛まぬ如くに、一日でも心が弛んではすまぬ。弛めず、怠らず、倒るゝまでは勉強し、さて、それで倒れたら、後の人々が繼ぎて起て、これを大成します。故に、自身は遠からず死ぬるから、勉めぬといふは甚だ宜しくない。諸君は、一日でも學生であつたなら、學生の務を爲し、其の一ことに全力を盡すことが肝要であります。以上は、先生の

見識、行爲の一部分でありますが、しかし、此によりて推究すれば、先生の全面目は窺はれることが思ひます。諸君は、自己修養の手本として、益々、先生の言行等を研究せらるゝ事が必要であります。

この序に申します。松陰神社の神龕は、先生御使用の硯と、先生御直筆の書状とであります。この書は、同志のものと申し合せて、京都に行かれる時、父兄への御暇乞のために書かれたものであります。

又神社の大鳥居の額の文字は、三條實美公の筆で、額形の意匠は、乃木將軍の考案に成れるもので、その形狀のいかにも質朴なるのに、諸君も意を止められたい。これはもと、東京で造られたもので二個あります。一つは、東京の松陰神社に、一つは、野村子爵邸に藏めてあつたのを、明治四十一年松本のこの神社が建てらるゝに及んで、こゝに用ふることとなりました。又松下村塾は、元は八疊の間でありましたが、後に、門人と申し合せて十疊半の座敷を増築せられました。實にこの十八疊半が先生の人材を教育せられたる處であります。これで話を終へます。

乳虎穴中子。驥龍領下球。至寶難輒獲。
願望何爲乎。死中乃求活。堂堂丈夫。松陰

諸子の反省を望む

特別會員 安藤紀一

生徒諸子、諸子は、毎日遅刻あく出校する事、規定時間の業を受くる事、業暇又は放課後に運動をなす事、歸宅して復習をなす事、翌日課業の豫習を夜中まで行ふ事の六つを以て、學生の務を全くせるものと思ふが。余は、諸子の爲に、之に満足せず、今一つ大に爲すべきものあるを感じす。教師に疑義を質問することは是なり。受業の後、教師の居残りを請ひて存分に質疑する事はなり。諸子中これを行ふものあるか。有りても、試験の前日に限るには非ざるか。もし平日不斷に行ふものあらば、其人こそ眞の勉強者といふべく、將來必ず實力ある人となるべし。諸子或は曰はむ。疑あらば、其科の受業時間に問

て盡きたりとか、後修が獨習にて盡きたりとか思ふ様にては、到底無益の在學にて、凡庸碌々の徒たるを免れざらむ。偶々目下の情勢に感ずる所あり。之を書して、諸子の反省を望む。

會友諸君に寄する言

會友中子德一

見る（君は第六回卒業生にして陸軍砲兵中尉たり）
予は、亡父の佛事を兼ね、休暇を得て歸省す。母校を去て既に十年、爾來兎角疎遠に過ぐ。今回、母校に岩田校長を得たるは、邦家の爲、諸子と共に甚欣喜に堪へざる處、再び母校の親みを覺ゆ。茲に聊所感を述べ、挨拶の辞に代へんとす

忠君愛國の精神に就き

凡る生を我國に賦くるもの、誰か報國盡忠の心なからんと云ふ言を、見る毎に、聞く毎に、先年神德一黨の惡逆を思ひ、尙其奴原の殘黨わるを聞きては、怒髮冲天と云ふも愚、皇國の爲、

ふと。然れども、規定の受業時間は新に教師より智識を與へらるゝ時間にて、各生の疑を質し盡さるゝ時間に非す。十分に質問を是際に行へば、學業の進度を妨ぐべし。故に質疑は、規定受業時間の外に、教師を教室に請じて行はざるべからず。かくてこそ、復習せし事の始末も片附くものなれ。夫れ復習は、之を重ねるに隨ひて、益々疑を生ず。いはば、復習は、疑問を多く生ぜしむる爲の復習なり。疑己に起らば、之を質さずして如何にして其始末を附くべきか。全國有數の中學校を見よ。その學生實力の進歩は、諸種の選拔試験に合格せるもの多きにて證すべし。我校の如きは、其後に陞若たるに非ずや。是れ諸子の己に知りて大に警戒する所ならむが。諸子は、果して己の實力を培養すべき準備をなしつゝありや。今日は、各種の事、決して尋常一樣の努力にては済むものにあらず。表面には現れずとも、内部には非常特別なる大努力をなす事に依りて、能く競争に勝ち得るなり。諸子にして、學校に對する務が受業時間に

甚恐懼に堪へざる所なり。斯の如き大罪を犯すに至らざるも、皇室に對する尊敬の念は、日を追うて薄らぎ行くものあるにあらざるか。予は小學校に入る前、既に乃父より、皇室尊敬の念を鼓吹せらる。諸子亦然るを疑はざるなり。

我長州は、維新當時、尊王主義の先導者たるは、諸子の能く知る所、而も古城指月山は、當代の歴史を語り、菊ヶ濱の怒濤は、何を怒るか。徒に西洋文物に耽溺し、國粹を忘却するが如きは、不忠の始なるぞ、西洋史に精にして、尊き日本史に冷淡なるが如きものなきか。彼の年號を記するに、尊き日本紀元を記さずして、耶蘇紀元を記し、得々たるが如き、西洋の偉人畫像を掲げて、日本の忠臣義士を掲げざるが如き、之聽て神州を去て、碧眼國に歸化するの輩か予の中學同窓生中、戯にせよ、皇室のこと云々するに不尊の語を以てするものあり。我々軍人となりしもの、眞に嘆息之を戒むれば、却て不敬の語を發す。誠に恐懼に堪へざるなり。言苟も、皇室に及ばず、宜しく謹嚴の態度を以てす

べきなり。又徵兵忌避の破廉恥漢は、中等以上の教育を受けたるものに多しと。之を以て、忠君愛國の精神ある國民と云ふを得るか。斯の如きもの勿論少數なりと雖、以て現代學生の思潮を、疑はざるを得ざる所以にあらずや。

獨逸に在りては、一度兵役の義務を終へれば、男子の價値を認められず。徵兵合格を以て無上の光榮となす。斯の如くして、今や四境敵を受け、善戦至らざるなし。翻て皇統連縕、忠孝一致、常勝を以て誇とする我か帝國の現状を見るとき、又斯の如し。他日露獨來襲し、英米亦之に加擔するの恐れを思ふもの、誰か寒心の情禁せざるものあらんや。

現代、徒に物質的方面にのみ發達し、精神的に缺陷の多きは、社會の趨勢なりと雖、之廳て國の衰弱、否亡國を意味するを思はゞ、何ぞ趨勢として看過するを得んや。或は曰ふ、教育科目的繁多なる現代にありては、精神教育に十分の時間を許さずと、謂ふこと勿れ。特に修身の

時間を持つければ、精神教育をなし能はずとするは誤なり。念頭常に忠君愛國の精神を忘却せざれば、何れの學科と雖も、精神教育の時機を與へざるものなし。

教練武術は勿論、歴史地理國語漢文は、其最便なるものなりと信す。西洋史外國語等、西洋思想に接する學科にありては、特に戒飭を要す。彼の西洋にかぶれ、身の神州男子たるを忘却するが如きは、此種學科の罪にあらざるか。所論稍教育に亘り、潛越恐縮の至りに堪へざるも、微衷の存する所を諒せられよ。

生徒諸子、亦此精神を以て精神をせば、過なきを得んか。

軍國主義に就き

獨逸今日の成功、一朝一夕の事業にあらざることは、諸子の能く知る所にして、我か帝國の之に鑑みる處多々なるを信す。

全國の自動車は、其制式を一にも、一朝事あるとき、軍用に徵するに便にし、公團のベンチは、荷物列車に裝着して、兵員の輸送に供する

如く、計畫せらる。軍國主義の猛烈なる、諸事悉く然り。學生亦此意味に於て、教育せられ、今や學生の多くは、祖國の爲戰場に馳驅すと云ふ。

近時我國にありても、中學以上に於て、射擊馬術等に意を用ふる學校あり。邦家の爲慶賀に堪へざる所なり。我か萩中學校に於ても、情孔之を許さば、次の如き諸件を希望すること切なり。

一、射撃

イ、想定を設けて、時々野外敷練を實施し、對敵思想の養成と共に、空砲發火を行ふこと。

ロ、少くも年に一回、實彈射撃を行ふこと。
二、馬術
適當の手段を講じて、馬に接し、馬に騎乗し、馬の愛すべく、恐るべきものにあらざること、知らしむること。

三、ボート

和船元より宜し。然りと雖、生徒の趣味は寧

ポートにあるべし。殊に將來海軍に志すものゝ爲は勿論、軍國主義の意味に於ても、亦之が設備を欲す。

四、游泳術

一朝事あるの時、海を渡らざれば、歐國に入ること能はざる我國にありては、海軍と云はず、陸軍と云はず、海と密接の關係を有す。水泳を知らざるものゝ、不安甚大なりと謂ふべし。

先年青島攻略に當り、龍口上陸の際。軍馬海上に落ち、行く所を知らず。水泳を能くするもの、乃入て之を救ふ。上陸後、青島に向て前進中、歩兵の一隊急流を徒涉するや、流るゝもの三々五々、予等下流にありて之を認むるや、乃身を挺して之を救ふ。水に對し大膽なるもの、水泳の賜なるを感すること痛切なりき。海あり河ある我萩中學生にして、金槌とは何の面目ぞ。

將來の方針に就き

身體の虛弱、家庭の關係等、諸種の情況に依

て、悉く軍人になれとは云ひ難し。然りと雖、諸子は悉く兵役の義務あり。一朝事あらば、君國の爲一死之に報ゆるの覺悟あるべし。死を恐るゝが爲、軍人を希望せざるが如きもの、男子の事業能く何物か成し得べき。

我長州は、由來武を以て成るの國、學生悉く軍人となるも、何の憚る所あらんや。而かも其尊き歴史を有する巴城の城下に、薰陶せらるゝ諸子、現今の状況は如何に、軍人志願は漸次衰へて、拜金屋の増加するは何事ぞ。諸子は父祖の功業に恥ぢざるか。先輩の努力に報ゆるの氣概なきか。本年士官候補生受験者の成績を見。予は甚だ同情に堪へざると共に、亦甚だ痛恨には堪へざるものあり。奮勵努力の足らざるよりは、寧ろ本氣の沙汰にあらざるを疑ふ。彼の貸費生たるの故を以て、申譯の受験にあらざるか。

士官候補生と高等商業と受験し、共にパックスしたるもの、武士を止めて高商に入る。男子の面目を失すこと大なり。此種青年の意氣、誠

に誠に憤慨に堪へざるなり。予は切に望む。我中學校は軍人熱の學校なり。將軍を出す學校なりと云はれたきなり。大商人を出す學校と賞せらるゝを恨む。

薄志弱行に就き

全力を盡して、事成らざれば天命と諦むべし。徒に悲觀するは、只將來を誤るのみ。予は元海軍熱の開山なりき。而かも素志水泡、落膽悲觀至らざるなく、爾來腦を痛め、記憶力減退す。今より之を思ふ時は、馬鹿の骨頂なり。諸氏よ悲觀は愚の極なるぞ。

殊に陸軍には、一年志願兵、又は現役兵よりして、候補生に採用の通あり。此道により、大器晚成の例勘しあせす。薄志弱行は男子の禁物、諸子夫れ緊禪一番奮勵努力せよ。

武學貸費生に就き

昔貸費生中には、陽に武學生を裝ひ、陰に他方面に志すものあり。又内に相當の財産あるに拘はらず、貸費して菓子の料どなし、甚しきは貯金する拜金屋あり。其精神の陋劣なること言

寮生活の思出

會友 武田 弦介

(君は第十五回卒業生にして第六高等學校に在學せらる)

煙の様な疑懼と火の様な喜を抱いて、一個の行李と手提鞄を車にのせて、いかめしい校門に這入つた。

規律なき放縱の勉強法は、軍人の學校には甚不便なり。日課を嚴にし、短時間に多くを得るの法を探るべし。徹夜勉強せんとするも、消燈喇叭に電燈は消され、敢て寝ねざるを得ざるなり。

暗記物の如き、先其骨子を捕へ、次に其肉皮を附帶するの要項なるを可とす。其他記憶法の巧拙は、大に將來の成績を左右す。次に讀書力を養成し、速記に熟すべし。之が爲、教科書以外に、精神修養の資料、其他有益無害の書籍を、迅速に多讀し、而かも其大綱を捕へ得るの習慣を養成するは、他日の爲、甚有益なりと信す。

二寝室で話聲がする。行李を屢々下において思ひ

きつて寢室の戸を開ける皆んなが黙つて僕の方を見る。

威儀を正して挨拶をする。「僕は長州萩の者で」と名告りを上げる「爾後宜敷く」と簡単にやつてのける、後できけば僕の下顎の三本長い鬚が皆の目にいちはやく止つて、「こいつうろくな奴だわい」と思はれたとのこと。

三年の室長Y君はまだれでましにならない、二年の副室長W君が何かと氣をつけて呉れる。「君萩でしたらK君を御存じですか」「えゝ知つて居ます」。それから色々お國語をして居ると言つて食堂の鐘が火事場の様になる「あれでは皆晝飯に」とW君が先に立つて一同ろの後に従ふ。みんなからだが已よりうんと大きい。食堂に這入ると三列に食卓が並んで居る。北寮は手前、中寮は中南寮は向側うま相な香が鼻をつく。新入生がたゞなしく、手を膝にひいて待つて居る隣のM君が「まかない」と破鐘の様な聲をして汁を呼ぶ。新入生一同目を圓くてしM君の方を見る。汁が運ばれた。飯櫃は四人に一個。二百

三高地が新進の兵によつて徹回される。

「とい飯はこれさりか」と不安らしく、呑公が云ふ。

M君が「どうして！今もつてこさせます。まかない！飯ど！」と破鐘せころか食堂全体わんと響く。

室へ歸る。籠引で戸棚もテーブルもきまる、皆故郷へ手紙をかく。M君が松風を一袋貰つて遠慮遊ばして手を出さない。流石に弦坊卒業證書をどる時の様にろろりと手を出す。つゝいで呑公ヤン公と、遂には千手觀音の様に皆の手が袋の上に集る。吉備の山にかゝつた、血を流した様な夕紅アフターゴーを凝視して居るどろが段々褪せて、静かなツワイトがそりてくる。電燈がつく。

椅子を集めて、寮歌を教はる。M君が「さかずや友よ」と身体を斜にゆつて歌ひ出す。その後に、ほらの貝の様な呑公の聲と蚯蚓の様な弦坊の聲と、なざつて合奏する。

ぢられたぎりで後は上出來、かくして宣誓式無事終了

室で母校の校友會誌など讀んで居ると、「今晚はストームをやりますから出て下さい」と眼の圓い仁王様みたいな勃公が各室櫻を飛ばして廻る、M君がまた馬鹿をそ呟く。

電燈が消えて中寮の北隅から、「デカソシヨ々々々々々」で地響たて、ストームが押しよせてくる。

弦坊安き心もあつたものでない。びくくして居るとなに戸をたゝいただけですぎてしまふ。ストームが南寮の二階に行くとかすかに板の聲が聞える。纖月が鉛の新截面の様な秋の空にかゝつて松の木の間から窓をしに白い布團を照す。

今日は新入生歓迎會。南北中三寮の選手競走その外色々の競技が行はれる。應援の寮歌と後樂闇の鶴の聲とが相合して、平和に勇ましく秋の空に響く。

土俵には角力が始まる。南瓜山、呑栗谷と云

皆が飽いて來て電球を見つめる。消燈の鐘がなる。寢室に床をとりに行く、電燈がさえた、天井でごとくと靴の音がする。タンクスティンの幻が壁にうつる。それがきえて幾何模様が表れるそれがきて、唐草模様それが消えて妹の花子の顔が！

今日は宣誓式。校長以下諸教授連の前で宣誓簿に署名する。弦坊字が下手でふるへない様に一生懸命に練習する。田の字がかけない。まゝよ大膽やつて見様と新調の洋服中學校のより少しメートルが高いに身をかためて、爪をつみ髪をかつて屈指運動をやつてでかける。

講堂に這入る、全面それ髪のみと云ふ様な顔をして高くもない鼻を阿里山の様に髪の間から、ろびへだした生徒官の號令で一同氣をつけ！

校長を始め諸教授連參室、英文科擔任のO教授等の前に、あの禿頭の内にどうしてあの難しい英語が並んで這入つて居るやらなど、他愛もないことを考へて居る。介と云ふ字が少しね

ふ様な番附が壁にはられる。午後五時から娛樂部で會食。會食がすんで寮友誓詞の朗讀校長教頭。寮務課長の演説があつて餘興が始まる。手品尺八、バイオリン、唄、その他色々の八百屋で皆ほくほく笑ひ興する、十時散解

すべての用事は娛樂部で達せられる。ろの上一割安い。

寮の規則は餘り嚴重でない。嚴重でないと云つては語弊があるが拘束してゐない。ごく平和

に愉快に共同生活の理想を實現さして居る。ろ

の上新舊生徒間の階級がなく例の幅を利かすと云ふことがなく且先生も先生顔をしない。夜九時に點検がある。寮務課が提灯片手に點検して廻る。後れると帳面につけられる。十度重なると、國元へ達示がある。

叱られることは、こわかないけれど國元へ、知らされたるとたつた一人の母が氣遣ふからと流石、ブル君も神妙にして居る。ブル君母にはかてない。はゝゝ。

人は一心不亂になりさへすれば、何事に臨み候ても、ちつとも、

頗着なく、繩目も人屋も首の座も、平氣になれ候から、世の中に

如何に、難題苦患の候ても、それに忘轉して、不忠不孝無禮無道

等仕る氣遣はない。

松陰

文苑

卒業後を思ふ

第五學年

白井正夫

吾等、五年研鑽の功漸く積り、今や將に中學の課程を卒へて校を去らんとす。思ふに吾等が務は、固よりこれを以て終れるに非ず、前途、更に森々たる一大洋の横はれるあり。過去五年の行動は、唯この遠洋航海を企てんが爲の準備のみ。

處世の進程に於ける眞の興味と辛苦とは、應に是よりして始まるべし。しかして、吾等の前途は、光明の前途なり。又健

闘の前途なり。夫れ處世經營は、廣漠無限の大洋を航するが如し。狂瀾怒濤常に身を嘗むのみならず、時に颶風の災あり。

輿説の變あり、潮流の險あり。若し是等の險難に堪ふるの道無くんば、遂に覆没を免れず。抑々身を立つるは吾人の願なり、然れども、黃金は天より下らず、事業は自然に成る者に非す加之險難もすれば我を苦むれば、其順序を踏んで精勵刻苦せざるべからず。事を成すは己なり、之を敗るも亦己なり、天をも怨みず、人をも咎めず、只己の力に依頼して独立獨行せば、成功期すべし。古より、偉人傑士と稱せられ、功名世を蓋ふ者、多くは風雲に際會し、偶然に功名を成就せるが如しと雖も、是れ其結果より見たるのみ。能く其源に溯り、

其事蹟を観察せば、誰か、安坐して成功せる者あらん。要するに處世の道は奇術無く、妙法あらず。唯、一の忍耐不屈の心有るのみ。之を扇に譬ふれば、心は要なり。要に毫釐の弛廢有る時は、扇子其用を爲さず。今や、國運隆昌の機に際し、邦家の吾等に俟つ所益々大ならんとす。歐洲戦後の日本は、鉛と鐵との武器よりも、寧ろ、學識と人格とを以て固められたる赳々たる干城を要求せむ。吾等は責の大なるを自覺して欣然處世の新航路に進まんことを務めざるべからず。

我國民の性格

第五學年

木村清一

人、誰れが福禍の變轉に驚き、運命の變化に歎ぜざらむ。されど、幸福を得て喜び、逆境に接して悲しむは、人の凡情のみ。運命に對して、自己の位置を維持する事ななさず、徒らに、變轉極りなき境遇に翻弄せらるゝは、自己の天職と能力とを知らざる者にして、自棄の甚しき、之に過ぎたるはなかるべし。夫れ人類には、自らその當然勉むべき究極的的的あり、又此に達すべき先天的性能のあるあり。されば此の性能をその目的に向ひて、活動せしむる氣質なき者は、人に非るなり。

我日本民族は、古來感情に富むこと著し。而してその感情の激する處、往々なし難きことなし、收め難き功を収めた

る事なきに非す。我國史の花は、一に此の感情によりて成りし者なり。其歴史の傳奇的にして、又美術的情趣あるは、此が爲めなり。かく極めて感情的なる我民族は、又極めて喜怒哀樂の變に富み、怒つては百万の軍を退けたる大將軍も、笑つては温容雅見をも憤かしめたり。如何なる敵軍をも馬踏の塵とせむと誓祝したる關東の荒武者も、白面の平家の公達を殺しては、悲みの情禁じ難く、一閑地に禪寺を造りて、一生を念佛に過ごしに非すや。

然れどもこの熱血的感情に富む我民族は、又最も運命に對して轉退し易き人民たるに到れり。此を単近なる例に見るに、一死君國に盡す心に至りては、我族の他に誇るべき所なれども、一たび意の如くならざらむか、君國の爲めには、千辛萬苦に耐へ、よく再舉して其目的を達せんとせず、却つて、櫻花の夜嵐に吹き散ると同じく、花々しく死して餘響を止めざらむと勉む。故に戦一たび利あるや、士氣大に舉がり、百難をも苦とせず、敵をして再び起つ能はざらしめむとすれば、事一たび敗るゝや、直ちに死を決して、一軍悉く城を枕にして死するを名譽とす。小楠公の四條畷に萬古の恨を殘したるも、これが爲のみ、余は、一概に、小楠公の如き武士の花々しき最後を非難せむとするに非す。されど、若し小楠公をして、弟正儀の如く、萬難不撓以て事に當らしめば、吉野朝の行末は如何なりしかな思ひ、又尊氏をして弟直義の諫めに聽かずして徒らに自盡せしめば、足利氏の運命は如何にな

學生の行に於ける感

第四學年 村上莊一

りしかを想へば、感慨轉た深からざるを得ざるなり。熱情的な我國民は、往々にして、運命に翻弄せられ、泣きては笑ひ、喜びては悲しみ、受動的に感動を受けて激發されども、活動的に外來の運命と健闘し、以て此の大敵を壓倒せむ事を知らず、順境にありては、天神我を佑くと謝されども、一旦逆境に陥らむか、惡神の災厄終に逃る能はずと觀し了らむとす。悲喜順逆の轉變する間に獨立する事なく、從つて、投機的希望を抱きて、目前の福縁に眩迷する事多き故に、彼の人類終極の目的に向ひて先天的の性能を發揮するの氣象に乏し。是れ、我國民性的一大弱点ならんばあらず。方向多事なあ時に當り、此の性格の爲めに、我國家が幾何の運命を害し、幾何の強度を損するかを思へば、一日も黙止すべく。

捕虜とならざるは無論、己が學業の狀況までも報告する者は、

父兄の心を悦ばしめんが爲に、自から學業を勤むに至るは疑なからべし。元來學生の墮落の本は、父兄の事を忘るに在り。又毎日遲刻せず登校する者は、遵法的精神に富むと同時に、規定の時間に適應せる事を爲し得る力有し、何事を爲しても、約束の時間に之を爲し遂ぐるの貞節慣習を修養することな得。又人の惡短を言はざる學生は、量大にして慮深き者なり。又依頼せられたる事を忘れず、心力を盡して之を結了するは、然諾を重する心見ゆて頼もし。又、何時も指の爪を綺麗に掃除せるは、誠に心の奥ゆかしき人なり。爪は、不思議に、能く其の人格を表す。彼のチエスター・ブールド卿の「爪を長く伸したる青年は、乱雜の性質を現はせり」と云へるが如く、爪を良く掃除せる學生は、萬事につけて、整理の力に富める想像するに足る。又、毎朝冷水摩擦を行ふ者は、少なからざる勇氣と克己あるを證す。唯、目前の快樂を貪るのみにて、前途何等の希望を有せざる者は、到底かくる事を繼續する能はず。本校卒業生生駒氏が、學生時代に毎朝橋本川にて行ひしは、人のよく知る所なり。其今日の榮進を見る、眞に所以あり。實に冷水摩擦の裏面には、希望あり光明あることを思ふべし。以上述べ來りし事ごもは、總て吾々學生に必要の事と感するなり。

飛行観覽記

第四學年 櫻井義彦

時これ暑氣猶さめやらぬ九月二十五日、我林に、盛大なる飛行大會は開催せられたり。これは、此地出身の長岡陸軍中將を會長とせる國民飛行會の主催にして、機は、名を劍號と呼び、井上騎兵中尉之を操縦す。當日は、やまと雲天にして微風あり。朝とく會場なる菊ヶ濱に至れば、觀衆已に遠近より群り來れり。午前の飛行は、準備等のため遅くなりしが、程なく飛行者は現れ出でたり。觀衆の眼は、齊しくこゝに集りぬ。彼は、觀衆の大なる期待を荷ひて、悠々と機上に登り、種々試運轉の後、遂にプロペラの音高く、砂上を滑走し始めぬ。滑走一丁、曉機は終に地上を離れ、益々高度を高めて、空中に浮び出でたり。指す所は何方ぞ。少時西に向つて進むと見る間に、方向を轉じて街上を周航し始める。彼は、觀衆の大なる期待を荷ひて、人智の進歩はかくも見事に航空し得たるものか。壯覩雄偉、何物にか比べむ。かくて、しばく猛烈なるプロペラの音たてし、我等が頭上を過り、街上を周航すること三度、漸次下降を始めて地上に達し、又間は約十五分、こゝに觀衆の喝采は、しばし鳴りもやまさりき。かくして、休憩數時、午後は、三時頃より再び行はれた

り。此度は街上をめぐること一回、それより海上を飛びて、遠く越ヶ瀬大井の方へ向ひ、一刻に、遠く去りて、雲が煙か、動けるか止れるか、一時は見ぬわからず、数分の後、漸く視界に入り來り、刻々其形を現し、須臾にして、推進器の廻轉をさへ認め得るに至れり。かくして海上の飛行數次にして、

我等の頭上を經過せる後、無事に着陸せり。ここに觀衆は齊しく中尉の勢を謝し、飛行會はその終を告げたり。

熱々考ふるに、世界の大勢は、航空試験の時代、とくに過ぎ去り、今は既に實用の域に入り、殊に最強の武器として、目下歐洲の天地に、其權威を擅にせり。見よ、光榮ある孤立を以て誇りし大英國も、一度獨乙飛行船の製造するや、倫敦市中、燈火を見る能はざるに至れりといふに非すや。我帝國の位置は、英國に酷似す。一朝事あらん日の運命も、亦英國と同一なりと思はざるべからず。然るに我國の航空界を見れば、誰か肩の寒きを感ぜざるものあらむ。歐米諸國には官民舉つて此事業に熱中し、軍隊には多くの飛行中隊を有し、數千圓の預算を擁して、大活動をなし、民間には數十箇の飛行俱樂部を設立して、莫大の金を投じ、飛行者の數は千名に達せり。又飛行機製作所、練習所、飛行學校等の多數なるを見ても、實に空航思想の國民全般に普及せるを察すべし。我國にありては、未だ飛行機の何たるを解せざるものあり、隨て國防上聞くべからざるを認むるに至らず。甚だ愁ふべきことならずや。是れ我が國民飛行會の奮然起つて全國を奔走し

て當日の如き會を催し、飛行趣味、智識普及に盡力せんとする所以なり。今後國民舉つて本邦航空界に貢獻せんことをはかるば焼眉の急務といふべし。

我郷の産業

第三學年 百濟芳雄

我邦目下の急務は農業の改良にあり。我豊浦郡阿川村は、夙にこゝに見る所あり。毎歲春秋二期に講習會を開き、品評會を催して、其の改良を計れり。村民の熱心と、監督者の督勵によりて、近年頗に其効果現はるに至れり。米は名聲高き長州米を產し、秋風徐に吹く時は、萬頃の田圃黃波漲り、農民太平を謳歌して、豐年を祝す。蔬菜も、亦、綠滿るばかりに生々として成長し、殊に、近年處々に溫床の設ありて、五月雨の晴間なき頃となれば、桑つむ少女等、豊見ないたはりて、夜も眠りやらず。其勞苦は、健全なる蔭となり、將來光澤ある生糸となりて、我輸出品の首腦の一端に加はる。農家の副業として、各戸競ひてこれに從事せり。桑樹栽培の地は、頗る廣闊にして、其地に一本の雜草たに見ず。この一亩を以て、其熱心の度を推すことを得べし。林業も、頻りに杉檜の小苗を植ね付くることて、今や彼の禿禿せる山嶺を見ざるに至れり。天を相手の農業は誠といへる肥料を與へざれば

採る鱈なり。一番鰯、二番鰯、征鰯、及び、これ等三種を磨きたるもの等あり。柔魚は、篝火を燃し、石油燈を船上に掛け、又近年は、瓦斯洋燈を用ひ等して、海波を照し、而して之を捕ふるなり。體を捕獲することの壯快にも、又雄々しきは、他にあるまじ。一艘の小船に乗り組む者四五、遠く朝鮮或は支那近海に航し、鰯延網を投じて、丈餘の大網の引き掛りたるを、釣船に取り入るれば、艦は、高聲を發して、板子の上に飛び跳ね、鮮血潮と共に逆りて、漁夫の衣服を紅ならしむと思ふに、この地の遠洋漁業たるや、その名天下に冠たり。たゞ恨むらくは、其の昔、之に從事せし漁船の數は、百に垂んとせしに、今や其の半になりしな。是等の外、鮪、鰐、鰐、鰐、鰐、鰐等の漁業者も、國民が之を食すことの多きも、亦實に世界に冠たり。然るに、今や、之を業とする水産業の狀態やいかに之を農業工業等の他の産業に比し、遂に、甚色あることは、遺憾の事ならずや。海は無盡藏の資庫なり。語呼、天與の巨利を遺棄すること勿れ。漁民たるもの、奮闘する所なくして可ならんや。

或人曰く、味佳にして、價廉なる物こそ、眞に天與の惠なれと、脂は實に此の要求に適す。此の地に於ても、多量の漁獲あるを以て、食料となすは勿論、樽粕に製して肥料とし、魚油を取りて工芸の材料とす。多く、揚縄綱、巾着網等を用ふ。尙この地方に有名なるは柔魚より製する鹽なり。鹽より

忍 耐

第二學年 増野節兼

螢雪刻苦矻々として攻究し、宇宙の寶庫を開き、廣く文化の神と敬はるゝもの、臥薪嘗膽孜々として經營し、不朽の偉勳を遺し、永く廟食の榮を享くるもの、蓋し忍耐の結果に外ならざるはなし。

夫れ薄志窮行の輩が艱難を排し、困難を凌ぐべき些の忍耐もなく、徒に人目を驚かす底の事業を企て、忽ちにして榮譽を得、萬人の尊敬を一身に集めんとす。是輩の事業や一時の虚榮にして、其の結果を見れば、夢幻泡沫さながら雲烟の眼前を過ぐるが如し。決して有終の美果を收むるものにあらずなり。

自彌不息は臣子に忍耐を教へ給ふ、先帝の大遺訓にして、剛毅と云ひ、勤勉と云ひ、奮闘と云ひ、努力と云ひ、皆忍耐の異名ならざるはなし。社會の進歩發展日に月に駆々として吾人を待たず。忍耐なくして何とか爲し得ん。コロンブスの米大陸を發見したる、或はリットの蒸氣機械を發明したる、そも何の力ぞ。一つとして忍耐の力ならざるはなし。凡そ人間の世に處して、困苦艱難に遭遇すべきは人生の常にして、先天の約束、既決の運命なり。焉ぞ學海の苦澁社會の難風を免れんや。故に心中大なる苦痛を感するものは忍耐にして、又大なる慰安を與ふるものも忍耐なり。徳川家康は忍の一字を子孫の遺訓とし、三百年の泰平を作り、韓信は忍のことを期するのみ。

一字を市井に守り、千載の龜鑑を示せり。忍ぶべからざるを忍び、耐ふべからざるを耐ふ。是乃ち眞の偉人にあらずして何ぞ。

窮境何ぞ悲むに足らん。不遇何ぞ憂ふるに足らん。窮境も、不遇も、吾人の忍耐力を試むる試金石のみ。直進せよ。勇進せよ。勝利の榮光は必ず高く月桂冠をかざして、窮境不遇の地より驕進する忍耐強き健兒を待たむ。噫忍耐なるかな。忍耐なるかな。

松陰神社

第一學年 天野敏介

松陰神社は、松下村に在り。王政維新の鼓吹者たる、吉田松陰先生の靈を祀る。明治四十年、縣社に列せられ、櫻花爛漫として、そよ吹く風も長閑なる春と、落葉散敷く秋とに、大祭を行はる。或日、友人某と共に參詣し、注連張りたる鳥居の下をくぐり、清らかに數きたる砂利を踏み入れば、右方に、先生が諸生と共に、書を講じつゝ米を搗かれし米搗臺の藏められし家ありて、恰も、昔の勤勉を意味するが如し。神前に進みて拜禮すれば、心から神威の壯嚴を覺ゆ。顧るに、天保元年、萩の東郊松本村に生れ、安政六年、江戸の城外小塚ヶ原に刑せらるゝまで、三十年間の一生は、至誠を以て終始せられしを、誰か感ぜざるものあらんや。道を奥にと取れ

春の風

第四學年 潤口純

金殿に生れて痴なり春の風。

殘る寒さ新級長は友ならず

短夜や清水一條寺に入る

水田に鶴の毛散りて春の風。

五月雨や白墨臭き古教室

不動聲兼色 富山天下安

英雄大勳業 一忍酷難

松陰

A COMPARISON.

比 輿

The lapse of time and rivers is the same,
Both speed their journey with a restless stream;

The silent pace with which they steal away,

No wealth can bribe, no prayers persuade to stay;

Alike irrevocable both when past,

And a wide ocean swallows both at last.

Though each resembles each in every part,

A difference strikes at length the musing heart;

Streams never flow in vain; where streams abound

How laughs the land with various plenty crowned;

But time, that should enrich the nobler mind,
Neglected, leaves a dreary waste behind.

ON THE SHORTNESS
OF HUMAN LIFE.

如 露 如 电

あゝされど
高向き心を富まず光陰は
空過にせば
殘るはすこき霜枯れの野邊。

Suns that set, and moons that wane,

Rise and are restored again;

Stars that orient day subdues

Night at her return renewes.

Herbs and flowers, the beautiful birth

Of the genial womb of earth.

Suffer but a transient death

心なきこがらしに

From the winter's cruel breath.

Zephyr speaks; serener skies

Warm the globe, and they arise.

We, alas! earth's haughty kings,

We, that promise mighty things,

Losing soon life's happy prime,

Droop, and fade, in little time.

Spring returns, but not our bloom;

Still 'tis winter in the tomb.

OZ MUSASHIMIZU

.....Cowper.

By V. A. Motojiro Nagamine

No one likes to die, you know. We all wish to live as long as possible. The greater part of the endeavors made in all directions in the world seem to be almost for this common end, and yet, in fact, very few people, even the most long-lived, can live so much more than one hundred years. Our endeavors have all proved vain, because "Time is the destroyer of all things." It is impossible to escape the unexorable death unless time can be stopped going on. To our disappointment, no power can be found in the whole world to make time stop running. The power of wealth, title or knowledge, can do nothing when one is going to die. As for medical power, it is unable to keep a man from death eternally. How to live long is to be considered gravely, because Nature demands

that we protect our life. Eternity is the longest period, then can we not live eternally? You

may say, "No," but I will say, "Yes, we can escape death." "How?" you may ask. Now, listen! I will tell you the only way to live forever.

In olden days in China, it is said that Ch'in once sent his navigators to procure the elixir of life from Horai Isle in the Eastern Sea. But his device failed, nay should fail, because this one way can be found out only in yourselves and in your own character. As you know in history, when the loyal Masashige killed himself with his brother, Masasue, after the failure in the battle, he asked his brother what death would do for him, then to his satisfaction, Masasue answered that he would come up in the world seven times, life after life, to beat the imperial enemies. In fact, there is no proof

that he could be born even once again, still less seven times. But see, how men have been moved by his brave death, and how many loyal heroes have come up to help the Emperors generation after generation, as he expected! And even now he is regarded as if he were living somewhere, and leading us to loyalty. Now you see, although his flesh returned to dust, his life has not been and will not be destroyed before the world comes to an end. Then, I think I may say that he lives eternally. There are many great people besides him in the world who chose this way not to die and got eternal life. They are not only supposed to be dead, but respected and loved by all the people just as when they were alive.

Now, if you do not like to die and wish to live eternally, you must try to do your best in good and right things, and endeavor to make a noise in the world not only in present times,

what must be done to Germany. In consequence of it, the victorious powers will divide her territory and the German Empire will actually be ruined. As for the Kaiser, since he was the destroyer of peace, he will be exiled to an island and meet a similar fate there as that which befell Napoleon on the Island of St. Helena.

THE MOON.

IV. A. S. Kaneko.

How beautiful the moon in spring is! The clouded moon appears over the top of the cherry-tree when the night is quite silent and the cherry-blossoms send their sweet smell on the breeze. A Chinese poet of old times admired this view in his poem and said, "A half-hour of a spring evening is worth a thousand pieces of gold."

but till thousands of years afterward, then you can escape the dark death, and can live a happy life forever and forever.

62
you can escape the dark death, and can live a happy life forever and forever.

It seems that the present peace proposal cannot be accepted by the Allies. At the present moment it is difficult to predict which side of the belligerent powers will gain the final victory, but we believe that the final victory will fall in the hands of the Allies, it being only

a question of time.

When the present European war comes to an end after a crushing defeat on the part of the Germans, an international conference will be held in London or Paris, when all the distinguished statesmen of the world will assemble to discuss

icy moon rises when we drive fireflies, fan in hand. We feel so cool that we forget summer. How clear the moon in autumn is! The full moon shines as bright as the sun in the garden when the autumn insects are singing their song among the dewy bush. She is the symbol of incorruptibility which is the necessary attribute of a man.

How dreary the moon in winter is! The new moon like a golden sickle hangs above the hill when we study our lessons. She peers into our faces through the pane with the noises of the waves and wind.

V. B. Yoshiaki Kodama.

The Present War.

On the 4th of August in the 1st year of Tempō

the great man, Yoshida Shoin was born at the small village called Matsumoto near Hagi.

When he was still young, he studied faithfully while tilling the ground or weeding the garden with his father, and asked many questions of his father,

When he was only eleven years old, he lectured on military science in the presence of his Territorial Lord; but the manner of lecturing was active and clear. His Lord was very much pleased with this, and he received many prizes and commendations.

The older he grew, the more he possessed high intelligence and patriotism. In those days on one hand there arose a vigorous cry for the reverence for the Emperor and expulsion of foreigners; but on the other hand the cry for opening ports arose.

Shoin was an eager anti-foreigner; and cried out that first of all it was important to strengthen

the national defence.

And it was the only hope of his to go abroad to inspect the conditions of the powers. But he could openly do nothing about it, lest it should be known by the officer of the Tokugawa government.

In the 6th Year of Kaei four American warships came to Japan to open trade with Japan. This was a good chance for him to go abroad, but when he wanted to attain his cherished hope they had already gone away.

The next year, the 1st of Ansei seven warships of America visited our country again in hopes of opening trade with us. Then Shoin was 25 years old. This time he went secretly to the war-ships anchoring at Uraga with a servant at the dead of night. And so he asked the commander-in-chief, Admiral Perry if he would not allow him to go on board the ship. But Shoin was not allowed and he had to

The Excursion.

III. A. Y. Kōra.

Early one morning I and a few friends of mine started from Ganjima for Koshigahama to enjoy the views, and to climb Mt. Kasayana.

Admiring the fine scenery of the sea, we walked along the sea road for some miles.

After several hours we reached a small village called Koshigahama.

Almost all the people who live here are fishermen. We passed through this village, and at length reached the foot of Mt. Kasayana.

There was a pond called Ochaya-no-ike. The pond was not so large, but the view here was very beautiful. The water of this pond was clear as a mirror and the depths appeared green.

There was a small shrine on a little island in the pond.

There were many fishes swimming very

strangely. As we threw food for them, the fishes gathered at once and tried to eat each other.

Then we visited the Koshigahama Shrine at the back of the pond.

At the shrine, we took our luncheon.

After luncheon we rested a little time. Then we began to climb Mt. Kasayama.

Mt. Kasayama is an extinct volcano and stands upon a small cape jutting out into the Japan sea.

First we passed the wood at the back of the shrine and went through the bushes. The mountain grew steeper and steeper, so that we became so tired and weak that we could hardly stand. By helping each other, we climbed on several miles and at last we got to the top of the mountain. How glad and happy we were when we stood on the summit of Mt. Kasayama!

There was a crater at the top of the volcano. Almost all of the hole was filled up with mud,

so that several trees were growing in the hole.

Near the hole there were two large pine-trees.

In front, the Japan Sea was spread out to our view. The water of the sea was very green as far as the eye could reach, and it appeared to meet the blue sky in the distance. It was calm, and many ships and boats were seen in the offing. Looking at these beautiful views, we quite forgot the troublesome experience on the way thither. Never before had I been so happy. After this we went down the mountain and returned home in the evening.

From Hagi to Seoul in Chosen.

III. A. Moriyoshi Inouye.

I left my dear Hagi for Seoul in Chosen with Mr. Kora on the morning of July 21st.

Now, I will tell you a story about that. After

many hours we arrived at Shimonoseki, where we met a friend of mine. He came to the station to see us off. We went on board the Sakura-maru an hour before she sailed. This ship is a voluntary ship, and left the harbour at half past nine. At that time the stars were shining. The weather was very fine, so that the sea was calm. But it was frightfully hot, and there was no breeze at all, so that it was difficult to bear it.

Crossing the sea of Genkai, we arrived at Fusan the next morning. While we rested at that station, we bought picture post cards, on which were views of Fusan and its neighbourhood. We got on the train half an hour before it left. At length the train left that city with a whistle. The men on the platform said good-bye to the people in the train. Fusan Station had already been hid from sight by the mountains when I looked out of the window.

Now, until a few years ago, there were no mountains in chosen where trees grew. It was because the Korean people cut them for fuel. But nowadays these mountains are turning green. For in Chosen the planting of trees by the Governor-General and other people on April 3rd, the anniversary of the death of Emperor Jimmu, has been made a part of the rites and ceremonies of the year.

I parted from Mr. Kora at Taiku. Taiku is a prosperous city. Great market places are built there every spring and autumn, for the city is noted for fruit. So I saw a great many fruit trees growing in the fields and on the hills.

On and on I went. I was nearing a large city. Soon I reached that station. Many people were waiting at the station. It was just two o'clock. After five minutes away I went through the city. I saw rows and rows of houses. When the train crossed a great iron bridge, I

views of Seoul and Ryuzan.

I saw a few canoes and a boat carrying lumber on the river below me. On and on I went. I saw peasants working in the fields.

At nine I arrived at Nandaimon Station which is the entrance of Seoul.

In old times Seoul was enclosed with walls five ri long with eight great stone gates, but nowadays the best part of the castle walls in the city has been taken away. Only the ruins remain. In the southern part of Seoul, there is one of the eight gates called Nandaimon. It is the greatest of all and a much celebrated one. All strangers who come to Seoul will first be astonished at the greatness of this gate.

In the south-eastern part of this city, there is a hill called Nanzan. There is a park at the side of it. It is one of the best places of amusement for the people in Seoul, so that all the year round many men and women go there. And from there the people can look at all the

the Zoo, the Botanical gardens, and the museum there.

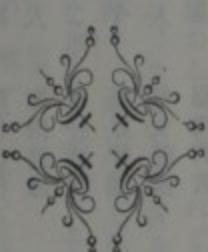
Many animals are kept in the Zoo. I saw many rare creatures in feathers and furs that had been brought from many parts of the world. Some of them are a lion and a lioness and their cubs, a large elephant, two hippopotami and two African crocodiles. Besides these I saw many uncommon animals I had never seen before.

Then I visited the Botanical gardens. There were many plants and trees cultivated there. And in the Museum, spears, palanquins, and all sorts of articles in Chosen were arranged.

Prince Li pays a visit to these places on Thursdays. I visited many other places.

The government of Chosen is at the foot of the hill, but the authorities intend to build a new building at the Keifuku Palace, and remove the office there.

Above the government building there is the only shrine in Seoul called the Shrine of Seoul dedicated to the tutelary god of the people of Seoul. They say—that its name will be changed to that of the Shrine of Chosen. There is the official residence of the governor-general of Choson, kept several splendid painted buildings. A sentry stands continually before the gate. Count Terauchi, ex-governor-general of Choson, must have special permission to go through the ferocious dogs there. Now all strangers who come to Seoul are first shown Sis Palace, but present dwelling place. I never went there but I did stroll to the Shotoku palace. There are



られ居る、山本君立つや、よく投手津森君の姿球を、利用して、猛烈なるゴロを、SSに送りSSのミックスに乗じて、終に一塁を奪ふ。次に立てる木島君流石は第三中軍のキャブテンにして、山本君を生還せしめんとして、容易にバットを振らず、ツーストライキの後RFに大体的フライを送つて山本君を、三塁に進め自らは二塁を一舉に襲ふ。津森君山本君の生還せんことを怖れて、躊躇する内に原田君の強打せるゴロよく功を奏してSSを破る。是に於て山本君、木島君續いてホームイン。第三中軍意氣衝天の概あり。津森君聊か狼狽して、原田君をして、見す、見す、一塁の人とならしむ。然れども松村君の凡死にて、原田君は一塁に倒れたり。第二中軍之に代りて攻めしかども、第三中軍必死となりて防戦せしめば、終に一点だけに得る事能はざりき。第三中軍側の意氣益々昇る。

第八回、兩軍威風堂々と、陣容を整へて奮戦せり、宛然龍虎の争ふが如し。第三中軍側は幾かに一点を得しのみにて、第二中軍之に代り。木島君稍々慢心を生す。且つ、連日の試合に、腕は疲れ意の如くならず。第二中軍、之を見て、機逸すべからずと、頻りに快打し、一舉に五点を得。第二中軍側の應援隊砂塵を蹴つて、上着をぬぎ、狂せん許りなり。木島君は逸れども、詮方なかりき。

第九回、今度の一戦にて、兩軍の勝負定る事なれば第三中軍猛撃に出づ。三輪君はもろくも斬られたれ共、山本君三塁をオーバーし、瞬間に二塁を奪ふ。子キストバッターは木島逸すべからずと、頻りに快打し、一舉に五点を得。第二中軍側の應援隊砂塵を蹴つて、上着をぬぎ、狂せん許りなり。木島君は逸れども、詮方なかりき。

第九回、今度の一戦にて、兩軍の勝負定る事なれば第三中軍猛撃に出づ。三輪君はもろくも斬られたれ共、山本君三塁をオーバーし、瞬間に二塁を奪ふ。子キストバッターは木島

君なり。投手津森君の投ぜし球を、大々的スリーベースヒットと變じて、観者をしてアツと呼ばしむ。續ける花田、松村兩君、共によく攻めて、山本君を生還せしめ、桑原君のRFに送りたる大フライの爲め木島君も亦生還せり。三中軍の野次連環を打ち狂呼騒ぎ。然れ共河村君の、凡死にて、松村君及び花田、桑原の兩君は各々一塁に、貳塁、三塁に露と消え終はん。是に於て、十一點對八點アルにて、名譽の優勝旗は第二中隊健兒の頭上に歸り、第三中隊側は無限の恨を呑んで屈しき。斯くて兩軍交互に萬歳を參唱して、終結を告げたり。當日、兩軍のゾンバー及び、成績左の如し。

(中) 森 上岡 藤 岩 井 藤 濟 好	41	0	7	4	11
P C IB IIB SS LF C F RF					
(中) 島 上 原 村 田 本 輪 本 村	37	1	2	6	8
(利)					
(K M 生) (津)					

第十七回陸上大運動會記事

十月十八日、第十七回陸上大運動會舉行せらる。此の日天氣晴朗にして、眞に絶好の運動日和なり。生徒一同運動場に會し、先づ中隊旗の授受あり。續いて、音樂隊の奏樂につれ、

一等(五年)桑原秀一 二等(五年)宮崎恒介

三等(五年)河内利作 四等(四年)西永正次

五等(四年)金子達一

體育獎勵の爲め、大阪毎日新聞社より寄贈せし、銀製のメダルは、特別障害物競争、及び、早駆二千米の最優勝者たる、左の二名の手に落ちたり。

特別障害物競争最優勝者 (五年) 桑原 秀一

早駆二千米最優勝者 (五年) 木島 清七

(重友 記)

書道部展覽會記事

我が校、書道部は、十月十八日本校開校記念日を下して書道成績品展覽會を開催し、午前九時より午後四時まで一般の縱覽を許したり。會場は本校北側の三教室を以て、これに充て、書道展覽會場の西に隣し、一年生の手になりし藤の花、三大緑門を以て飾とせり。此日、澄み渡りたる秋の空一碧瓈璃の如く、吹く風も亦暖かなりしかば、午前より來観者多く午後は益々雜沓を極めたり。是より先、本年七月月中旬左の規定により課題を發表せられたり。

一、全校生徒悉皆提出のこと。
二、第五學年、我室思無邪我堂德有鄰
三、第四學年、洒落高秋氣飛騰志士心

第七十三回特別障害物(第一着三分二十秒一分ノ一)
第七十四回特別障害物(第一着三分三十九秒六分ノ五)

第三學年。風竹有聲畫石泉無操琴

第二學年。山靜松聲遠秋清泉氣香

第一學年。夜冷星文動秋高月色涼

三、受付期日十月一日より同五日まで。

しかし、其最優秀なるものゝ書體は、氏名と共に卷頭寫眞の部に掲載せり。尙例年と異なる点は、本年は特に各學年及各中隊の成績表を會場に掲示せられたることにして、其表左の如し。

學年	一等	二等	三等	有望	入選數	得點平均
第五學年	一	五	二	一	六	一〇
第四學年	二	三	三	三	四	九
第三學年	一	七	四	五	七	八
第二學年	二	七	四	三	五	九
第一學年	一	二	五	三	四	九
計	七	四三	一〇三	一〇三	三八	一〇

此の如く、年々歲々、我が部の進歩發展するは、斯道の爲

所なり。漁村の面目は遺憾なく發揮せられたるものと云ふべし。感服々々。國重君、君は近來突飛的の進歩をなしたりと云ふべし。筆勢非凡、意氣高大にして、泰然として、満室を壓するの概あるを覺ゆ。夏の海岸を表し得て妙なり。筆勢勤もすれば、先の清瀬君のそれと、勝るるものあるは、思ふに、君が平素彼に學びし所多きに依るか。熊谷君の思想は佳なれども、筆は未だ水彩畫に熟せるものと、云ふべからず。

今少し研究的練習を積まば、優に一派をなすべし。津森君、勿れ、之れに反して仁尾君は、餘りに實物を度外視して、徒然に繪葉書式の型に入れんとして却つて、君獨特の腕を欺きたるは惜むべし、斯道の篤志家齊藤剛君の、實物に忠實にして、緻密なる筆を以て、毫も缺陷なからしめんと苦心したるは、感服の至なれども、趣向に於て變化なく、雅致に乏しきは悲むべし、今一步を進みて、大自然の美を弄び給はゞ、大いに見るべきものあらん。我部の泰斗進藤君の油繪は、流石に敬服の外なきなり。奇異に走らず、悠々として通らす、徐ろに人をして、其のセンスを想像せしむ。觀察微妙を極め、筆勢粗大にして、尙ほ不要、不足の点なきは、君の君たる所以なり。實に當日の白眉たりしなり。唯だ恨らくは、目を持てるものゝ少くして、眞の價値を認め得ざるものゝ多きを、近來、洋畫は一般に進歩したれども、日本畫に至りては、殆んど之れを研究する者なきは、或は趨勢の然らしむるもの

め、慶賀に堪へざる所、吾輩は、来るべき展覽會には、更に、諸友の努力に待つて、より以上の發展を遂げんことを望みて已まざるなり。

(仁尾重人記す)

画道部展覽會記事

我が部は、開校十七週年記念日に當りて、例により、書道、地歴兩部と共同して、成績品展覽會を催し、午前九時より、之れが會場に充て、畫の出品は、二室に亘りて、之れを掲げたり。本年は例年に比して、大差なしと雖も、内容殊に豊富にして、各自が、爲らざる美的情操の生ずる所に、筆を下して、生より巧みに抜き出したる自然の美が、湧くが如くに通り來りて、殆んど應接に暇なく、多く苦心の跡の見得可きものありたるは喜ぶべし。田中君、君は共に、水彩畫を語るに足るものなり。三好城輔君の精細なる觀察と、巧緻なる手腕とは、吾人をして後へに瞠若たらしむるものあり。山本君、櫻は萩の名物なり、而して能く之れを寫し得たるは、君あるのみ。見る者をして、口に水を催さしむるの感あり。實際を想像せしむべく、前者と、兄たり難く、弟たり難き者は、山田季介君の作品なり。殊に人物に於て其の妙を極め、彼等が漁士としての性格をも、發揮せるが如し。バツクの山と家との間隔、河水の具合などは、非凡の腕にあらざれば、得難き

地理歴史部展覽會記事

ならんも、我部の爲めに、甚だ遺憾とする所なり。洋畫に志を得ざる者は、須らく、轉じて、日本畫を研究す可し。必ずや天性之れに適するものあらん、尙ほ、第一等賞を得たる作品は、之れを、卷頭口繪に、掲げたれば、一覽を乞ふ。
(M N 生)

本年の出品物は、大體に於て昨年より進歩發達せり。中にも第四學年田中明三君の作の如きは、今回の白眉と云ふべく、その工夫努力の點に就いては、大いに賞讃すべく、且模範とすべし。諸君來年度には、今一層奮勵努力あれ。

左に本年の受賞者の等級別を示す。

學年	一等	二等	三等	入選者	生徒總數	入選者
第四學年	二	五	八	一五	三、四	百三
第三學年	一	三	七	三	三、三	百三
第二學年	二	九	一〇	三	三、二	百三
第一學年	二	五	七	三	三、四	百三
總計	七	三	五二	八	三、五	百三

(見玉義清記す)

表彰式

十月三十一日、本日の佳辰をトし、午前十時より、講堂に於て、相鳴先生の十年勤績表彰式を行ひたり。

表彰文

本校助教諭心得相島直一君明治三十九年秋以テ就任セラレ西來體操科ヲ以テ教授訓練ノ責ニ任シ一意勤績セラルコト茲二十年是ニ於テ吾校友曾ハ本日ノ佳辰ヲ以テ式ヲ舉ケテ之ヲ表彰ス夫レ忠實勤勉終始渝ラザルノ士ハ政ニ從フ者ニ於テハ貞吏ト謂フベク軍チ統アル者ニ於テハ貞將ト謂フベク人チ教育スル者ニ於テハ貞教師ト謂フベシ然ラバ君ノ如キハ即チ貞教師ニ非ザランヤ而シテ學校生徒ノ氣風ガ一ニ教師ノ指導ニ由リ特ニ永年勤績セル教師ノ德行ニ待ツ所多ク且紀律ノ維持擴張ガ體操教師ノ一舉手一投足ニ密接ノ關係アルモノナリトセハ今日校運ノ日ニ益々隆ナルニ當リテハ貞教師タル君ノ永年ノ功績ニ對シテ豈感謝セザルベケンヤ爰ニ謹ミテ青銅火燭壹箇ヲ贈呈シテ表彰ノ意ヲ致シ併セテ君ノ健康ヲ禱ル

六正五年十月三十一日

山口縣立萩中學校校友會長 岩田博藏

答辭

茲ニ本日ノ佳辰ヲ以テ不肖ノ爲ニ此ノ盛式ヲ舉ケラレ殊ニ申ヌルニ厚貳ヲ以テセラル光榮何者カ之ニ若カン回顧スレ

剣道部記事

大正五年十月三十一日 相鳴直一

木因に、本校同窓會よりも、記念品を贈呈せり。

十一月三日、立太子禮の盛儀行はせらる。我が部は、此の佳辰に當り、茲に劍道大會を開きて、大いに、尚武の氣象を發揮し、奉祝の微意を致せり。今、其の概況を左に記す
松本君元氣頗る旺盛にして、進退よく法に適ふ。小林君今少し禮儀を嚴守し仕合中決して笑ふべからず。瀧口君平素熱心なるにも拘らず今日の不振は殘念なり、益々奮勵すべし。敢て悲觀する勿れ、弘中村兩君の元氣共に愛すべし。されど余

演武者一同元氣頗る旺盛なりき、例の如く左に卿か妄評を試みん。

中野君は、體軀小なりと雖も、侮るべからざる勇士なり。益々奮へ。寺戸君は、本部に入りてより自尙凌けれども、攻守よく法に適ひ、大敵八人を斬す。松屋君と引き分けを取リしは惜しかりき。藏田君の技見るべきものあり。池田君、本日は大に振ひたり。併し之を以て足れりとせず。平素より猛製なる練習を怠ること勿れ。三好君、大外刈有望なり。今少しがらすや。廣田君、新に我が部に入り、村上、國近二君を倒す、君の體軀、よく、姿勢に留意せよ。羽仁君の巴技は、妙を得たるも、君は敵を侮る氣味あり、慢は常に數多きこと知らすや。廣田君、新に我が部に入り、村上、國近二君を倒す、君の體軀、よく、斯道に適す。怠らず勉めなば、將來恐るべき勇者たるを得ん。山本登君、技奇麗にして、發展の見込あり。二年級の最後者たるを失はず。大深君は、實に、機敏にして、技に於て特に見るべきものあり。大敵數人を倒して意氣揚々たりしも、流石の平川君の大腰を以て倒されたり。平川君は、實に、余等の期待する一人なり、益々練習して、我部の爲に盡す所あれ、平田君も將來有望の士なり。山崎君は、體に於ては、君に勝る者なし。されども、君の技には、見るべきなきを歎す。今少し研究して、斯道の爲に盡しては如何。長嶋君は、新進の勇者なり。敵の油斷に乗ずる足拂は、實に貰すべき價値あり。百濟君は、體技兼備にて、三年級

講評

十一月四日、陸上大運動會、並に、書畫道部地歴部展覽會に關する、各係各部長の、詳細なる講評ありたり。

柔道部記事

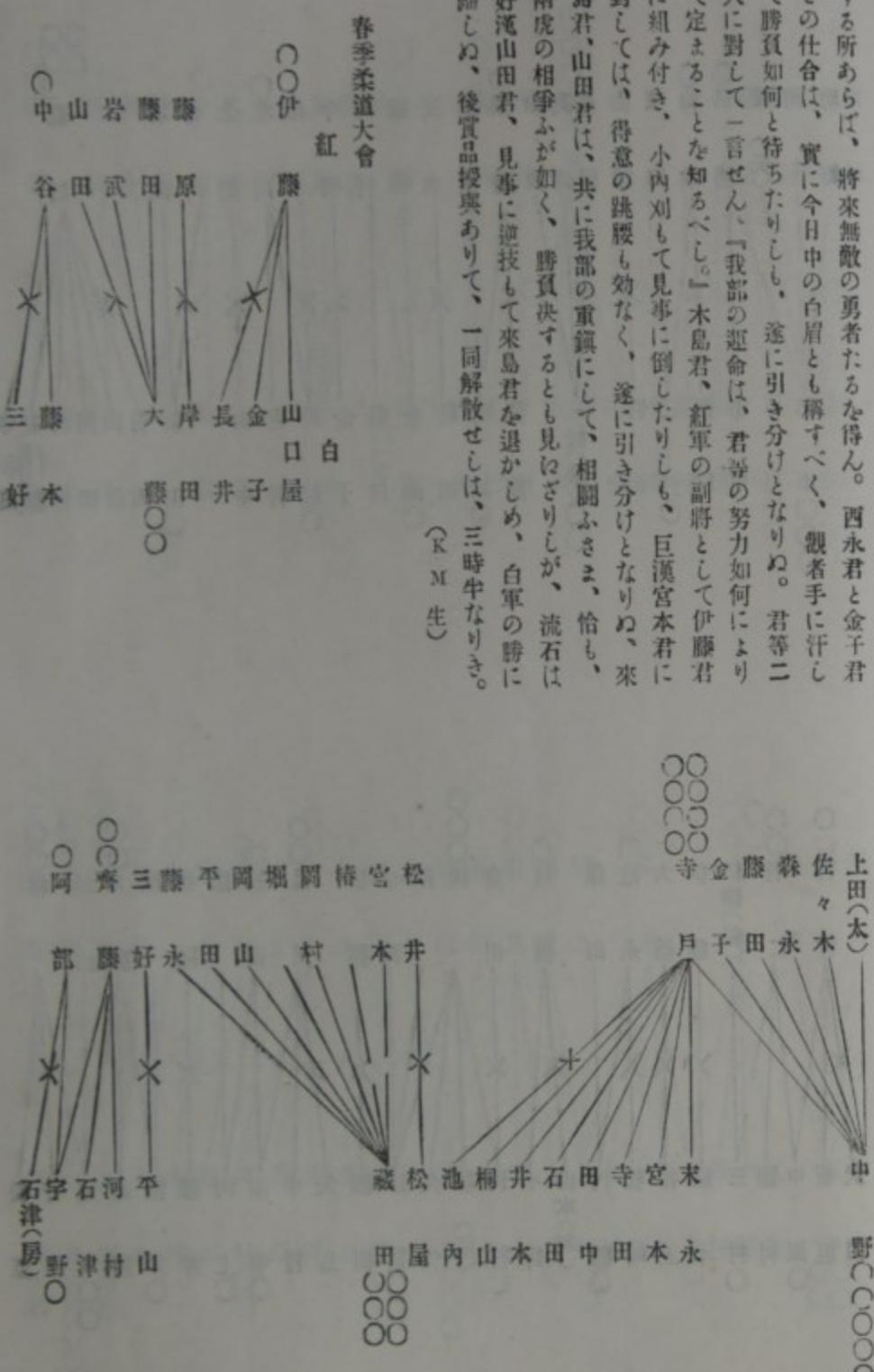
一月三十一日午前十時より、春季柔道部大會を開く、本日

の勇者なり。本日の勝に甘んぜず。平素より練習を怠ること勿れ。余等の君に期待する所最も大なればなり。鳥羽君の脊負投又真し、唯、今少し元氣あれ。熊谷君、本日は、大に振ひたり。近頃君の進歩を喜ぶ。杉山君、掛聲は無用なり。原君は、大敵宮本高原二君を倒し、觀る者をして、歎歎攘く能はざらしめしも、木島君の巴投に、後れを取りぬ。大崎大谷二君脆くも、破れしは如何。伊藤君は、満身の勇を振ひ、猛然として木島君に組み付きしも、終に引き分けとなりしは、實に惜しかりき。兩軍の大將、來島村岡二君、必勝を期して、立つや、満場俄に静りぬ。互に、千變萬化の秘術を盡して、相争ふこと茲に數分間なりしも、村岡君遂に來島君の足拂にて倒れて、月桂冠は、紅軍の占むる所となりぬ。時に三時十分なりき。

十一月三日、立太子式の佳辰を記念する爲に、我部は、奉祝式後、秋季柔道大會を開催し。本日は、大に元氣あり、又、得意の技よく發揮せられ、近來稀に見る盛會なりき。今、左に、當日の仕合に就きて、妄評を試みんとす。

末永君は、將來有望の士なり。怠らず勉めなば、君の成功や疑なし。椿君、體よく斯道に適す。又、進退法あり。大敵七人を倒して、遂に月桂冠を得たり。併し之を以て足れりとせず。益々猛烈なる練習を積みて、我が部の爲に盡す所あれ。井上君、技に於て見るべき所あり、益々奮へ。桑原君の左大腰、余は感服の外なし。余の君に待つこと少しとせず。奮へ

奮へ。玉木君、平素熱心なる効、著しく、本日顯れたり。顧くは、今少し元氣あらまほし。鈴木君は、一年級の勇者なり。君の大腰たるや、君獨特のものたり。殆ど無敵といふべし。賀川君の小内刈は、我間然する所なし。津田君の巴投は、よく法に適ひて見事なりしも、平素不熱心なるを歎す。田中君は、實に元氣旺盛にして、平素熱心なる實に我部の爲め慶賀する所なり、益々勉めなば一方の大將たるを得ん。山根君平素熱心なるに係はらず。本日振はざりしは如何。余は君に同情す。武田君奥田君は、共に有望の士なり。河村君は、よく大敵五人を倒したれども、君の技には、少し無理なる点あり、今少し研究せよ。雜賀君の技、實に敏捷なり、二年級の最勇者たるを失はず。余の君に待つこと至大なりとす。山本登君も同じ。平田大谷二君は、近頃大に歩を進めたり。平素熱心なる賜が。今田君本日不振なりしは、如何。田代君は、技よく法に適ひ、福田君は、體小なりと雖も、常に、仕合に有利あり、平素熱心なる爲なるべし。小松、中村、阿武の諸君には、益々猛烈なる練習を積みて、我部の爲に盡さんことを望む。百濟君不運にして、本日は、杉山君に負けたれども、敢へて、悲観すること勿れ。勝負は時の運とあきらむべし。高原君は、四年級の勇者にして、杉山和田二君を見事に倒しても、坂本君に破られしは、實に惜しかりき。益々奮へ。大崎大谷二君は、互に力を盡して、相争ひしも、如何せん、君等には、賞するほどの技なく遂に引き分けとなりぬ。今少し技に就いて研究

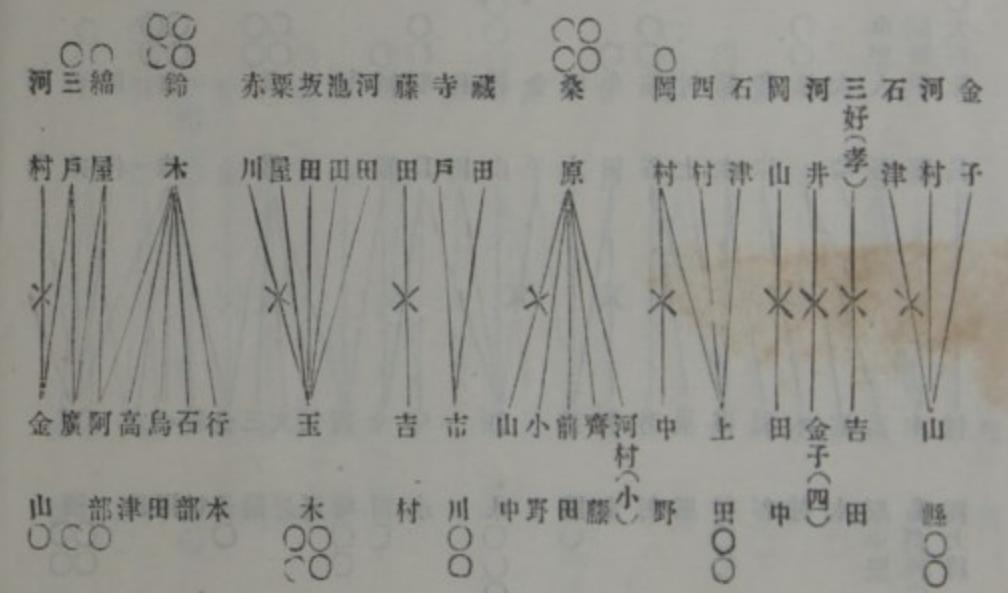
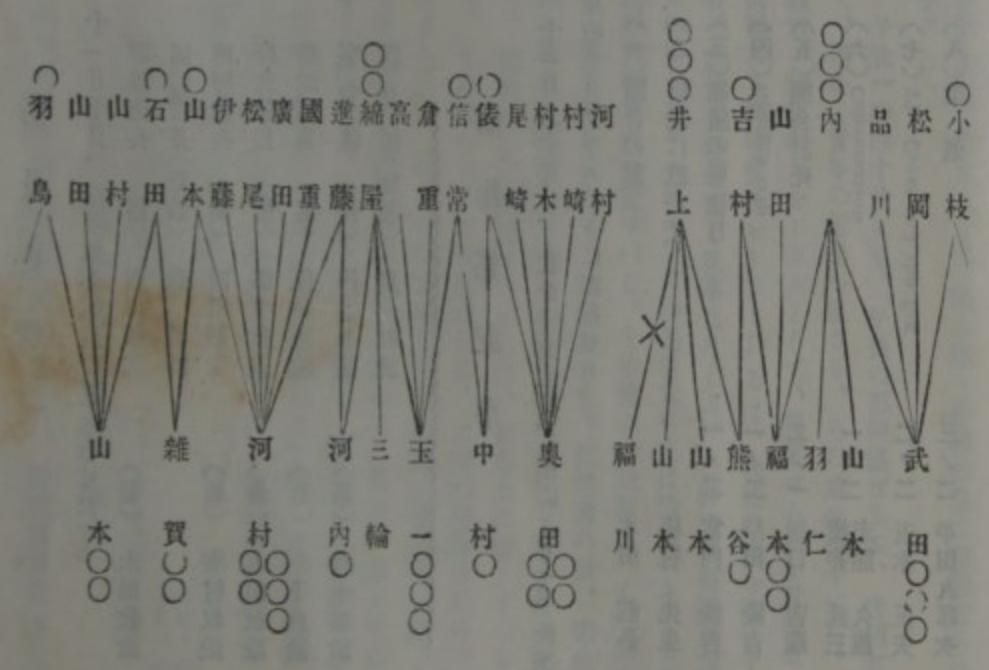
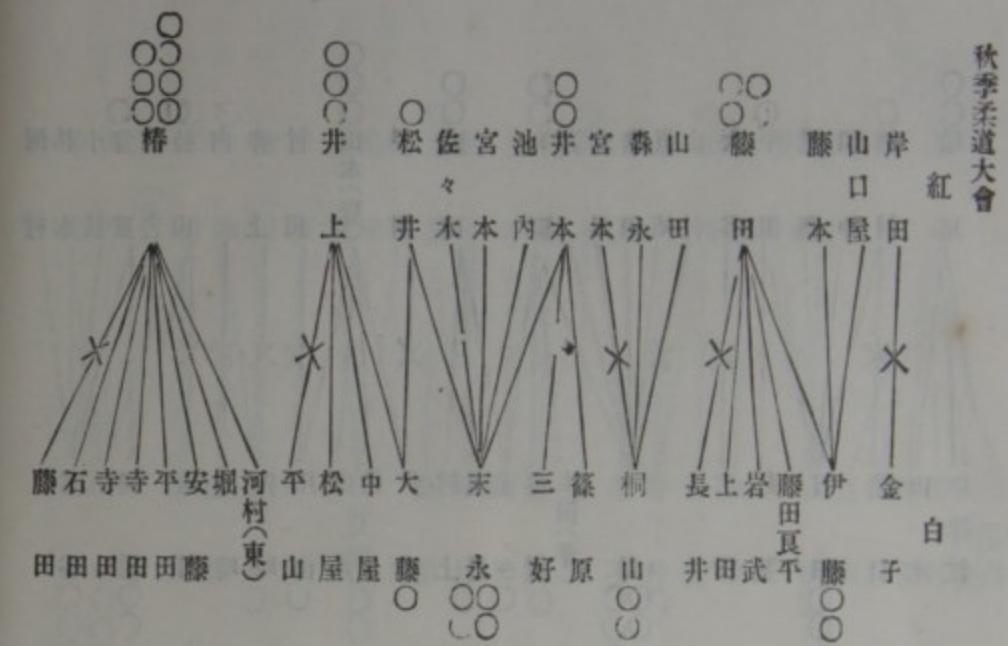
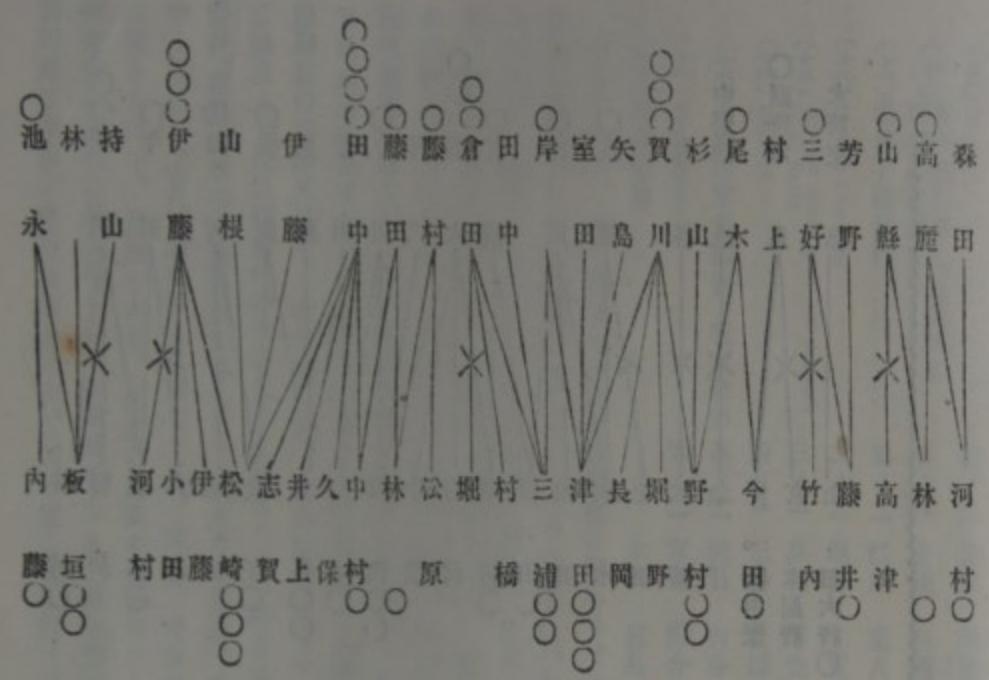


○○松 ○○藤田進平大山稻奥前高大
 ○○廣平 平山本(登)村井内持秋倉小林河
 尾 村 中 藤 田 谷 村 嵯 田 田 深 田 田 上 山 吉 重 枝 木 村
 中 山 錦 石 糸 信 平 山 雜 玉 國 村 伊 鈴 山 片 村 尾 福 綿 熊
 津 江 木 口 田 賀 常 川 田 (孝) 賀 一 近 上 藤 木 本 山 嵯 嵯 川 屋 谷
 中津 江木口 田賀常 川田(孝) 賀一近上藤木本山嵯嵯川屋谷

○○副將來伊申堅大原宮福村熊今棕金杉花羽國村長山田白河
 烏藤谷崎津本上谷田木子山田鳥重上峯崎代井内
 村木高宮木福田桑芳坂進西守今岡仁大三金谷小友百
 岡大將島副將原中堅本村谷村原村本藤永永田崎尾岩輪子村澤森濟

○○芳河堀三輪坂山長高山栗室玉藤河今林赤上竹石池
 野 井 元 浦 木 田 鶴 関 津 田 屋 木 田 村 田 川 田 内 部 田
 田 市 西 三 宮 三 好 (城) 田 原 村 田 山 田 子 村 村 中 田 田 稚 田 藤 田
 中 田 村 戸 内

○○吉 羽 伊 藤 (新) 大 池 藤 村 倉 林 岸 小 伊 品 室 廣 栗 堀 大 杉 林
 特 仁 藤 橋 永 田 橋 田 田 藤 川 田 屋 藤 山
 武 板 中 藤 三 福 井 松 內 山 小 河 堀 久 志 藤 矢 中 山 河 横 藤 高 尾 行 松
 田 垣 原 村 村 本 上 峯 藤 野 村 保 賀 田 島 村 中 上 井 井 麗 木 水 原



部長更迭

十一月十日、左の如く部長の更迭ありたり。

學論部長（舊）	西川教諭	（新）	木田教諭
同副長（新設）	森 教師		
地歴部長（舊）	西川教諭		
庭球部長（舊）	田中教諭		
雑誌部長（舊）	藤井教諭	（新）	梅村教諭
褒賞係（舊）	田邊教諭	（新）	木田教諭
器具係（新設）	足立教諭	（新）	全子教諭
		（新）	船木教諭

辯論部記事

十一月二十五日 我が舞踏部は 例によりて、秋季大會を
左のプログラムの下に舉行せり。

- (七) The Crow and the Fox
(八) 柔道

1

白眉なじで目せらる、詠ふ益々期過の爲に奮闘せられんことを
た。

て、熱心に青年の奮起を促さる、その意氣愛すべし。次は高羅君、邦語のスピーカーとして、囁きせらるゝ君にして、亦、流暢なる英語のスピーカーたるは、我部の意を強うするに足る。聽する色もなく見事なりしは、三井君の英語演説なり。されど、ジエスチニアの過多なりしは惜むべきことなり。瀧口君の意氣や愛すべし、その熱心や敬服すべし、君の論曰、常に天下國家を譲ず、好漢努めよ。仁尾君の論、徹底の要を種々面白き比喩を引きて、最も徹底的に、譲き來り譲き去りて、聽衆をして譲りせしめしは、君の大に誇とすべきことなり、その後をうけて登壇せしは、二年の堀野君なり、初陣の君としては、可なりの出来なり。最後に登壇せしは、宮崎君なり、君の英語演説は、度を重ねるに従ひ、益々その進歩の著しきをみる、落ち着きたる態度、緩急宜しきを得し語調は、それ熱心の賜か。部長閉會の辭ありて後、岩田會長の批評あり、終つて、成績の良好なる人々に、賞品を授與せられ一同解散せしは、午後三時なりき。

(九) English
(十) 青年起たすんば我國の 将來は衰滅なり
(十一) 徹底と國民性
(十二) It was the dog
(十三) Notice what you see though it is little
(十四) English
(十五) 米國の軍備擴張 我が急務
(十六) Perseverance
(十七) 閉會の辭
(十八) 木田 部長

午前十一時、先づ部長木田先生の閉會の辭あり。つぎに梅村先生登壇せられ、「辯論に就いて」と云ふ題下に、辯論練習の目的は、能辨にありとし、其の材料に就き、形式に就き、將、練習の方法に就きて、徹底的に説述せられ、聽衆に多大の感動を與へられたり、それより、宮内、岸田、瀧口の諸君、順次演壇に立ちて、熱舌を振はる。宮内君の辯舌、洒落滑脱元氣充満の態度を以て、決意のなき言語を排斥し攻撃せらる。岸田君の英語又良し、次の瀧口君、楠公討死の時の心理狀態に論及し、公は精神的勝利者なりと論ぜらる。辯舌元氣あり。櫻井、志熊兩君の英語對話又妙なり。玉木君の英語、發音よきやうなれど、言、急なりしは惜むべし。次に、平田君、柔道に就きて述べ、柔道の由來、柔道の武術中最優秀にして、精神修養に偉大の好果あることを論破せらる。辯舌熱烈なり。田村君の英語、態度及緩急の度、其の宜しきを得て、本日の

山口縣體育會記事

山口縣體育會誌專

主催の下に、山口縣體育會なるもの、毎年山口町に於て、開催せらるゝことなり。本年は、十二月二十四日に、その第二回を舉行せられたり。我が校よりも、此の舉を賛して、柔道部より、時山孝一、末山顯正、宮崎恒分の三君を、柔道部より、西永彰治、金子重喜、長嶺元二郎の三君を、又別にマラソン競走に、木嶋清七、河村茂一の兩君を、それく選手として參加せしめたり。其の成績大署左の如し。

劍道部に於ては、時山君、柔道部に於ては、西永、金子の兩君、何れも勝を制し、又柔道部の長嶺君は、引き分けとなりたり。最後に、各學校より貳名、各青年團より壹名を選抜して、優劣仕合を行ひしが、劍道部は、宮崎君、よく六本を抜きて、貳等賞を受け、柔道部は、金子君、參本を抜きて引き分けとなり、四等賞を得たり。

次に、マラソン競走は、午後二時五分、山口運動場を發し、湯田を經て、練兵場に至り、後再び運動場に歸るのコースを取りたり、此の競走に於て、木嶋清七君は、百三十三人中にして、第四十二着の成績を以て、賞品を得たり。

要するに勝負の論は姑く措き、一般に、元氣の漫濶たるものありしは、大いに喜ぶべきことなり。(M.N.生)

會友訃音

第五學年生井川和君は、鷹空扶斯に罹られ、萩町傳染病院

に入院加療せられ居りしが、藥石効なく、二月二十三日、遂に死去せられたり。

第十二回卒業生秋本一郎君は、東京美術學校在學中不幸にして、病魔に犯され、歸養せられしが、五月十六日、遂に、溘焉として死去せられたり。

大正四年度會費收支決算

一金千貳拾貳圓四拾七錢 收入高
内 譯

金七百六拾八圓九拾錢 生徒會費

金七百六拾八圓六拾五錢 職員會費

金六拾圓九拾九錢 雜收入

金千貳拾貳圓四拾七錢 支出高
内 譯

金四拾五圓參拾參錢 基本金利子繰入

金五拾五圓 天幕代基本金ヨリ借入

金七圓八拾八圓五厘 入未済額

(元金六拾圓ニ對スル戻)

金參拾圓四錢 柔道部

金七拾七圓七拾六錢五厘 庭、野球部

金四拾五圓參拾參錢 基本金利子繰入

金五拾五圓 天幕代基本金ヨリ借入

金六拾四圓四拾九錢五厘 入未済額

(元金六拾圓ニ對スル戻)

金參拾圓四錢 柔道部

金九圓四拾九錢五厘 利子

金五拾五圓 柔道部

金九圓四拾九錢五厘 利子

金六拾四圓四拾九錢五厘 支出高
内 譯

金百六拾圓四拾九錢五厘 支出高
内 譯

差引金千八百拾六圓貳拾九錢五厘 翌年度へ繰越

大正四年度短艇新造費積金決算

一金貳百貳拾八圓九拾九錢五厘 收入高
内 譯

金百六拾四圓五拾錢 前年度繰越金

金六拾四圓四拾九錢五厘 本年度實收高
内 譯

金五拾五圓 柔道部

金九圓四拾九錢五厘 利子

金百八圓參拾貳錢五厘 校友會費ヨリ蓄積ノ分
内 譯

金百八圓參拾貳錢五厘 校友會費ヨリ支出

金百八圓參拾貳錢五厘 職員出金

金百九圓七拾七錢五厘 生徒出金

金四拾五圓參拾參錢 利子

金百九圓七拾七錢五厘 石碑及沙留石諸費

金百九圓七拾七錢五厘 野面石拂下代

金百九圓七拾七錢五厘 檜垣建設費

金百八圓四錢五厘 雜費

校 試

(自大正五年一月
至同 年十二月)

長距離競走

二月十九日、長距離競走舉行せらる。從來は、出發點を校門、決勝點を大井村高倉荒神社下とし、或は、之に反して、出發點を高倉荒神社下、決勝點を校門とせることもありき。然るに、本年は、又之を變更して、出發決勝兩點とも、之を校門と定め、萩地を壹周することとせらる。此の間約二里半の距離あり、午前七時半より、各隊五分を隔ても、順次出發し、やがて、各隊整盛として、疾走しつゝ、續々決勝點に入り來りし狀は、頗る壯快なりき。今其の通過せし道筋、及び、各隊の成績を左に示す。

通過道筋

校門發點—平安湖—中渡—櫻江—雜式町—橋本町—十日市—土原—渡口—濱崎本町—同上中の丁—銀治屋町—片河町—堀内木丁—學校着點

成績表

成績順	隊	名	経過時間	平均時間	到着人員	落伍人員
第一	第四中隊第三小隊	四四、〇〇	四四、〇〇	四四、〇〇	二六	〇
第二	第二中隊	四四、四五	四四、四五	四四、四五	二七	〇

第三 第三中隊第三小隊 四六、三〇 四六、三〇 二六

第四 第一中隊第三小隊 四六、四〇 四六、四〇 二六

第五 第四中隊第二小隊 四七、吾 四七、吾 二五

第六 第三中隊第二小隊 四八、二〇 四八、二〇 三

第七 第一中隊第一小隊 四八、四五 五一、〇四 三

第八 第二中隊第一小隊 四七、〇〇 五一、二〇 三

第九 第二中隊第三小隊 五三、〇〇 五三、〇〇 三

第十 第一中隊第二小隊 五六、二〇 五三、五七 二六

第十一 第三中隊第一小隊 四七、四〇 五四、二五 二

第十二 第四中隊第一小隊 四五、一 五一、三 三

第一	第四中隊	四九分一秒
第二	第二中隊	四九分二十五秒
第三	第三中隊	四十九分四十三秒
第四	第一中隊	五十分十九秒

野外演習記事

二月二十六日、猪ノ熊峠西方高地に於て、左の想定に據り、野外演習を行はれたり。

一、敵ヲ擊滅スベキ任務ヲ有スル中村中隊ハ、萩一須佐道ヲ

東進シ、二月二十六日午前九時、其ノ尖兵ノ先頭ヲ以テ、

の、懸賞與規程に據れる賞品の授與等あり。校長の告辭朗讀終るや、谷氏の長官告辭の代讀あり、能美少將來賓總代として、祝辭を述べられ、第四學年齊藤清治君在學生を代表して祝辭を朗讀し、卒業生總代玉置一君答辭を讀み、十一時二十分を以て式全く終りたり。

長官告辭

「卒業生諸子ニ詮ケ諸子ハ今ヤ中學校ノ課程ヲ修了シ茲ニ卒業ノ榮チ荷フ是レ實ニ多年切磋琢磨ノ結果ニシテ本官ノ深ク喜ア所ナリ惟フニ諸子ハ今ヨリシテ後進ンテ高等ノ學術ヲ修メ成ハ直ニ各般ノ業務ニ從フ等其ノ嚮フ所固ヨリナラザルベシト雖均シク國家ノ中堅トシテ國運ノ發展ヲ期スベキ重大ナル責務ヲ有スル者ナリ苟クモ進取ノ氣象ト剛毅ノ精神トニ因リ修養鍛磨ノ功ヲ積ムニアラズンバ安ソノ能ク大成ヲ期スルヲ得ンヤ今ヤ世界ノ大勢ハ大ニ國運ノ發展ヲ促シ國民相率ヰテ德ヲ修メ智ヲ研キ產ヲ治メ業ヲ興シ大ニ國本ヲ培養シ國威ノ對揚ヲ期スベキノ秋ナリ諸子宜シク已修ノ教訓ヲ服膺シ身體ヲ鍛ヘ精神ヲ練リ貫クニ忠孝ノ大義ヲ以テシ各自ノ志業ヲ大成シテ以テ國家ノ進運ニ貢献セシコトヲ期スベシ之ヲ告辭トス」

大正五年三月二十四日

山口縣知事正五位勳四等 黑 金 泰 義

卒業式

三月廿四日、午前十時より、第十七回卒業證書授與式を挙行せらる。知事代理として谷理事官臨場せられ、能美陸軍少將以下三十餘氏の來賓あり、例に因り、校長勅語を奉讀し、卒業生六十九名に、卒業證書を授與せらる、次ぎて知事代理

卒業記念日講話

三月十日、陸軍記念日なるを以て、陸軍歩兵大佐國弘榮一氏來校一場の講話をせられたり。

卒業生六十九名に、卒業證書を授與せらる、次ぎて知事代理

校長告辭

卒業生諸君余ハ諸君ト共ニ深ク諸君ノ卒業ヲ喜ブ者ナリ今
ヤ春光天地ニ満チ梅花ハ既ニ枝ヲ辞シタルモ桃花櫻花ハ將
ニ雷ヲ破リテ芳妍ヲ競ハントス是レ諸君ノ前途ノ多幸多望
ナルヲ象徴スルモノニアラズシテ何ゾヤ況ンヤ歐洲ノ大戰
雲猶未收ルベクモアラズ隣邦ノ山河モ亦將ニ破碎セントシ
世界ヲ舉ゲテ全ク硝煙彈雨ノ巷ト化シ隨テ我日東帝國ノ使
命公車ナ加ヘ諸君ノ將來髮肩ニ負フ所ノ責任モ亦益大ナル
ト共ニ功業ヲ樹テ社會國家ニ貢獻スル絶好機會モ亦諸君
眼前ニ横ハルニ於テチヤ余ハ千歳一遇ノ此ノ時ニ於テ諸君
ガ新ニ高等普通ノ教育ヲ終ヘ或ハ更ニ専門ノ學術ヲ修ソ或
ハ直ニ諸種ノ實務ニ從事セントスルチ見テ諸君ノ爲ニ大ニ
喜バザラント欲スルモ得ベカラザルナリ諸君ハ本校ニ入り
テ學業ニ辛苦スルコト茲ニ五年此間余ハ一日ノ長ナ恃ミ本
校ヲ主宰シ諸君ト共ニ學ビ諸君ト共ニ修ソ且ツ常ニ諸君ノ
爲ニ謀テ忠ナランコトヲ努メ誨フベキハ之ヲ誨ヘ戒ムベキ
ハ之ヲ戒メタルハ諸君ノ諒トスル所ナルチ信ズ故ニ今更教
育的訓示ヲ試ミテ諸君ヲ送ルチ要セズト雖モ此ノ祝スヘキ
卒業式ニ際シ余カ時局ニ鑑ミ世界將來ノ優勢ヲ揣摩シテ竊
ニ懷抱スル鄙見ヲ陳ヘ以テ聊カ諸君ノ行チ壯ニセント欲ス
亦可ナランカ想フニ現下ノ戰爭ハ世界未會有ノ大事變ニシ
テ其ノ果シテ何レノ時ニ終結スヘキカハ明眼ノ識者モ猶能
ク之ヲ逆睹スル能ハザルヘシト雖モ余ハ我が國民タルモノ

ガ帝國ノ一大恥辱ナルノミナラズ實ニ一大危險ニシテ國家
千歳ノ悔ナ貽スモノナラズンバアラザルナリ北米合衆國ハ
我が國ト共ニ輓近長足ノ進歩發展ヲ爲シ特ニ現下ノ大戰亂
ノ爲ニ不時ノ利益ヲ占ムツ、アルモノナリ然レドモ其ノ領
土廣キ其ノ民衆ノ多キ其ノ富ノ大ナル我が國ニ倍蓰スルモ
ノアルチ以テ隨ツテ其ノ進歩發展モ亦決シテ我が國ノ比ニ
アラズ今十世界商業ノ中心ハ將ニ龍勃チ去ツテ紐育ニ移
ラントスル勢アリト云フ我が國ハ今後太平洋ヲ隔テ、此ノ
新進氣貌ノ一大強國ト角逐セザルベカラズ然リ而シテ將來
太平洋ノ海上權ヲ握ルモノハ即チ世界商業界ノ霸者タル
チ思ハバ我が國民タルモノ深ク且ツ大ニ覺悟スル所ナカル
ヘカラザルナリ頃者一新聞紙ハ報ジテ曰ク北米合衆國政府
ハ年々効率戦艦五隻ヲ建造スルニ足ル設備ヲ爲ス議案ヲ
新ニ議會ニ提出セントスル意アリト未ダ其ノ眞偽ヲ審ニセ
ズト雖モ同國現政府が軍備ノ擴張ニ汲々々ハ争フヘカラ
ザル事實ナリ若シ年々五隻ノ効率戦艦ヲ新造シテ以テ商
船ノ活躍ヲ掩護セバ太平洋上ノ商船ハ早晚北米合衆國ノ手
ニ落ツルコト議者ヲ誤ツテ始シテ知ラザルナリ借問ス我日
東帝國ハ北米合衆國ノ斯ル大計畫ニ對シテ能ク對抗シ得ル
自信ト準備トチ有スルナ否ナ顧ミレバ一年前戰端ノ突發ス
ルナ我が國ハ同盟ノ誼ヲ重ンシ東洋ノ平和ヲ確保スル爲ニ
獨逸ノ根據地青島ヲ攻略シテ復新ニ國威ヲ宣揚シ國權ナ伸
長セリト雖モ聽クテ更ニ之ヲ考フレバ是レ深怨サ世界ノ最

、既ニ今日ヨリ最モ戒慎留意スヘキモノ三アルチ信ズ隣邦
支那ノ開發ハ其ノ一ナリ北米合衆國トノ競争ハ其ノ二ナリ
敵國獨逸ノ怨恨ハ其ノ三ナリ抑モ今日ノ大禍乱ハ其ノ端ハ
バルカン半島ノ紛争ニ發シタリト雖モ由來バルカン半島ノ
紛争ノ結果解ケズ益紛糾シテ遂ニ大破裂ヲ見タル所以ノ
モノモ亦畢竟獨帝ノ亞細亞大陸ニ於テ勢力ヲ扶植セント欲
セル大野心ガ與リテ最モ力アリタルコトハ萬人ノ聲シク認
ムル所ニシテバクタツド鐵道敷設ノ一事猶能ク之ヲ證シテ
餘アルニアラズヤ而シテ亞細亞大陸ユフラチースチクリス
ノ流域ヒマラヤ山南ノ廣野ハ猶露兩國ノ夙ニ垂涎シテ措カ
ズト雖モ其ノ七十二萬方里ノ地下ニ埋没シテ未タ發掘セラ
ニ我が隣邦支那ナルコトヲ知ラザルヘカラズ其ノ内政ハ整
ハズ其ノ國權ハ振ハズ今ヤ正ニ四分五裂シテ拾收スヘカラ
ザル所ナリト雖モ世界列強ノ最モ注目ヲ怠ラザルモノハ實
ニ暇アラザル間ニ山東ノ要地青島ヲ奪ヒタルモ皆是レ此
百萬ノ人口トハ是レ世界ノ列強ノ窟窿ニモ忘ル、能ハザル
所ニシテ英國ガ早ク香港ヲ占領セルモ露國ガ徐ニ東清鐵道
ヲ經營セルモ獨逸ガ一宣教師ノ横死ニ藉口シテ迅雷耳ヲ掩
フニ暇アラザル間ニ山東ノ要地青島ヲ奪ヒタルモ皆是レ此
ノ老大國ニ地歩ヲ占ムント欲スル準備ニ外ナラザルナリ今
ヤ歐洲列強ハ鐵火相攻メテ極東ニ其ノ眼ヲ注ケ能ハズ其ノ
手ヲ伸バ能ハズ此際我が國民タルモノ一衣帶水ヲ隔テタ
ル隣邦ヲ啓發シ利權ヲ獲得スル能ハズンバ則チ是レ啻ニ我

大強國ニ買ヘンモノナリ余ハ敢テ獨逸ヲ目シテ世界ノ最大
強國ト云フ蓋シ英露佛ノ三大強國ヲ敵トシテ之ト戰ヒ未タ
敵兵ヲシテ一步モ其ノ領土ヲ踏マシノミナラズ曩ニ
ベルジカムヲ占ムシ近ク又セルビア及ビモンテ子クローナ
席卷シ未ダ兵力ニ於テモ財力ニ於テモ聯合國ニ劣ル所アル
ナ見ザレバナリ經ヒ今次ノ戰局ガ聯合國ノ勝利ニ歸シ獨逸
國ノ屈服ニ丁ル所トスルモ獨逸國民性ノ堅忍致爲ナル再び
國力ヲ恢復シテ卷土重來スルコト猶百年前一タビ奈翁ノ馬
蹄ニ蹂躪セラレテ寸草尺木ヲ見ザルニ至レルモ猶能ク臥薪
嘗膽シテ今日ノ獨逸國為シタル如キモノアルヤ亦疑フ
ヘカラザルナリ此ノ如キ世界ノ最大強國ニ對シテ深怨ヲ買
ヘル我が國民タルモノ豈ニ恐懼スル所ナクシテ叫ナランナ
况シテ我國ハ百科ノ學問技術ニ關シ彼ノ國ニ學ブヘキモノ
モ亦益大ナルチ感セザルチ得ザルナリ然レドモ責任ノ存ス
ル所ハ即チ亦功業ヲ樹テ社會國家ニ貢獻スル絶好機會ノ存
スル所ナルチ想ヒ諸君ガ此ノ千歳一遇ノ時ニ於テ高等普通
教育ヲ卒ヘタルチ喜バズンバアラザルナリ今ヤ諸君ハ各其
ノ志ス所ニ向ツテ去リ各其ノ志ス所ヲ達ゲヨ看ヨ桃花モ笑
ツテ諸君ヲ送り櫻花モ笑ツテ諸君ヲ送ル余モ亦諸君ヲ送ツ
テ微笑ノ禁シ得ザルモノアルナリ

山口縣立秋中學校長 村上俊江

池内久

高武夫

村田四郎

當日の受賞者左の如し。

一、銀時計 壱個 賞與規程に據る者 松浦梁作

玉置一

一、齡林 壱冊 右入學以來克校則ヲ守リ學業ニ精勤シテ一日モ懈怠セズ且ツ伍長トナリテハ其任務ヲ全ウシ卒業ノ際成績特ニ優秀ナルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、言海 壴冊

中村貞夫

林秀生

小田安一郎

白根鶴松

中山靜太

吉田操

右入學以來五箇年間一日モ懈怠セズ其精勤實ニ衆生ノ模範

トスルニ足ル因リテ頭書ノ物品ヲ賞與ス

一、半紙 武東

松村正一

中山靜太

藤原忠次

桑原仁作

白根鶴松

トナリテヨク其任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、半紙 壴束

人同

右本學年間精勤シ學力俊秀ニシテ克校則ヲ守リ且ツ伍長

トナリテヨク其任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、半紙 壴束宛

木村幸一

同岡崎文治

同蓮藤常

雄同倉重義雄

同宮崎恒介

同齋藤剛

同長嶺元治郎

同中本義助

同桑原芳樹

右本學年間精勤シ學力俊秀ニシテ克校則ヲ守リ且ツ伍長

トナリテヨク其任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、半紙 壴束

金子重志

同横山貞晴

同花田好定

同友森茂

人同中村博

同河村宜介

同原田信次

同瀧口純

同田中明三

同吉村潤一

第二學年 櫻井敏二

同小松威一

同玉一市五郎

同杉山

興次郎

同百濟芳雄

同松浦老義

同河村久三郎

同志賀

義雄同山田基

同高麗芳光

同磯松巖造

同今田正一

同石田藤一

同前田壯一

同藤原敏男

同熊谷眞夫

第三學年 金子重志

同横山貞晴

同花田好定

同友森茂

人同中村博

同河村宜介

同原田信次

同瀧口吉輔

同玉木正夫

同田中彌一

同世良和男

同中村鎮雄

右本學年間伍長トナリテヨク其任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ

物品ヲ賞與ス

一、精勤賞狀 第四學年 木村幸一 同鶴木百合彦 同高原啓

右本學年間伍長トナリテヨク其任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、精勤賞狀

同中本義助 同藤井元治 同小谷正勝 同津守鄉 同宮崎恒介 同松尾剛介 同宇野徳見 同末山正顕

第三學年 小澤重一 同和田節二 同友森茂人 同小方耕

同中村博 同有福精一 同國近圭三 同河村宜介 同信常鉢道 同平田繁一 同大崎恭次郎 同小川清 同山村

鶴男 同吉村潤一 同入江糾夫

第二學年 山田孝介 同藤田重成 同井町敏正 同上川忠

夫 同山本義夫 同梅田文武 同松岡通雄 同來見田茂平

同磯部好人 同伊藤富士雄 同川上清水 同磯松巖造 同板垣正規 同石井直太 同池永正治

第一學年 室田久雄 同長岡義雄 同松本忠一 同坂田武

夫 同吉村徹 同金子四郎 同田中丈夫 同鳥田潔晴

同神田篠明 同乾山寅 同土井義二 同林 安幸 同芳

野具 同福本稔甫 同中村周郎 同羽仁通祐 同西村正

人 同都野豊 同岸 新一 同山恒正 同金木龍一

同河村禮三 同堀元助 同師井圭一 同小田彌一 同宇

野勝二郎 同伊藤五一 同河村義雄 同村上剛明 同前田

秀二 同池出頭 同玉木正夫 同堀永徳太郎 同藤永

秀一 同金山芳雄 同長谷川徳太郎 同山中萬 同健見正一郎

右本學年間精勤セシニヨリ之ヲ賞ス

黒金本縣知事來校

四月十日、本縣知事黒金泰義氏來校せられ、學校内を視察し、生徒を講堂に會して、訓示する所ありたり。

修學旅行

四月廿五日、午前二時、修學旅行隊、京都に向つて出發し、豫定の如く各地を巡覧し、廿九日午後六時無事歸着せり。其の狀況は、左の日記に詳なり。

修學旅行日記

第五學年生徒一同は、木田、梅村、相島の諸先生引率の下に、京都方面に修學旅行を爲す。四月廿五日午前二時、金谷祠前に諸先生の見送を忝ふも、萩地を出發す。春雨蕭々として天地皆晬し。明木に出で、佐々並を過り、翌廿六日午前十一時、山口に着す。直に乗車山口を去る。東窓より内海の好風を愛づ。春の海濱々として漂々たり。紫鳴立ち忽ち僻す。眼を擧ぐれば、櫻艶數隻水天晴麗の處に浮ぶ。宮嶋に着きたるは午後五時半、遙かに巣鳴を望む。明石を過ぎしは、翌午前四時半、松の風情面白し。京都に着きたるは、午前五時、東山藍色にて打臥したるさまよび懷し。午前六時、案内の導く儀に、先づ東本願寺に詣づ。烏丸通七條上ル所にあり。眞宗大谷派の本山にして、現今の大堂宇は、明治廿八年の落成に係る。大師堂には、見眞大師自作の木像を安置し、本堂には、安阿彌の作

なる阿彌陀佛を安んず。其他鐘樓大小寢殿、白黒書院總門勅使門等あり。孰れも輪奐の美を極む。之より直に西本願寺に向ふ。眞宗本派の本山なり。現今の大影堂は、寛永十三年、本堂は寛永十年の建築なり。本堂には、春日の作、本尊阿彌陀佛を安置し、眞影堂には、見眞大師自作の座像を安んず。堂前に七不思議の大銀杏あり。四脚門は桃山城の遺物にして、禰間の影刻は、左甚五郎の作なり。其他、名工の丹精になれる古美術品極めて多し。一行の目的なる二條離宮に着きたるは、午前九時なり。早くも來りし觀覽者は、宮前の廣場に堵列して、嚴に控へたる者數町に亘る。漸くにして入れば、建物の結構宏壯、内部の裝飾絢爛目眩するばかりにして、殆んど言語に絶せり。此の大典の狀な、目の當りに見るを得る一行の至幸至福、何物か之に若かん。かくて離宮の華麗なるを見し眼に、御所の壯嚴なるを拜しては、異様の感に打たれざるものなし。我に歸りぬ。午後一時、既定の宿に着く。晝食終りて後は、自由散歩せり。明くれば廿七日、天氣晴朗なり。八時出發して桃山に向ふ。九時半漸く到着し、御陵を拜し、終りて直に大阪中卒業生諸君の出迎へを受く。直ちに天神橋の下大和屋旅館にいたり、携帶物を置き、造幣局に向ふ。萬事頗る嚴重にて、職工の出入には、必ず身體検査をなす。規模宏大なり。製了

午後六時、金谷祠前にて校長先生の慰勞演説あり、萬歳聲程に解散せり。

學友長の改選

五月一日、各學友區の學友長及び副長の改選行はれ、左の如く決定せり。

東萩學友區 区長 田中教諭

第一小區學友長	末山正顯	副長	中島武彦
第二小區學友長	原 真作	副長	藤井義彦
南萩學友區 區長	藤井教諭		
第一小區學友長	糸賀眞喜	副長	瀧口吉春
第二小區學友長	谷井 完	副長	岡崎文治
	仁尾重人		
第三小區學友長	宮川保次	副長	河上勇治
西萩學友區 區長	藤原教諭		
第一小區學友長	宮津精一	副長	津森栄一
第二小區學友長	桑原芳樹	副長	原田俊人
	大野 寛		
北萩學友區 區長			
第一小區學友長	今田 泰	副長	福川秀夫
第二小區學友長	村岡幸吉	副長	中津江延彦
	副長		
尾崎信一			

りて大阪城にいたる、城は今第四師團司令部たり。城壁の石頬る大にして、邊に一疊敷もあるべし。城頭に上りて市内を眺望す。黒煙渺々滿天爲に昏し。眞に日本一の工業地なり。それより宿に歸り、一同休憩す。午後四時より、スマス氏の夜間宙返飛行を觀覽せん爲に、鳴尾に行く、停電所は非常なる混雜を呈し、電車に乗ること頗る困難なり。賛六の一人大いにこぼして曰く、「こないなぎねらいことありやへん」と、眞に然るか。鳴尾運動場にいたれば、これも亦非常なる人出にして、而かも飛行機は昇らすとのことに、愛想をつかして歸りかくろ達、「上つた上つた」といふ人の聲に、仰ぎ見れば、成程昇つたり。一点星の如きもの徘徊す。忽ち機より一道の光發するよと見る間に、光は空中に弧圓を畫く。機は迴轉し始めたるなり。遂に機は、英字にて大阪と書きて下りぬ。余等電車にてかへりたるは、午後十時頃なりき。慌てゝ神戸の方へ乗り行きて、午前一二時頃にかへり来りし者もありき。翌廿八日朝より自由散歩。一同宿の案内者に従ひて、天王寺に行き、ルナパークを見、千日前を見て歩く。頃て臨りて午前十時半より梅田驛にいたる。神戸驛につきて直ちに河崎造船所にいたる。規模頗る宏大。面積甚の土地程あり。駕々の聲耳を壓す。當時一汽船の整備をなしつゝありき。歸りて楠公の墓を訪ぶ。五時四十五分同地を出發秋に向ふ。歸路又雨に遭ふ。「萩中の修學旅行は雨がつきものなり」と、山口高商の生徒は曰へり。行程左様かも知れず。七里の山坂越して、萩に着きたるは卅日

血液中には、此人等の血液の循環するあれば、打算的に事をなすことなく、山縣元帥の國家主義を力行せざるべからず。而して、之を力行せんと欲せば、松陰先生を模範とするに如くはなし」と論結せられたり。

江木氏主催觀月茶話會

九月十三日、午後六時より、全校生徒を明倫館に集合せしめ、江木氏主催の、觀月茶話會開かれ、生徒一同に、松陰先生の嗜好物たりきと云ふ詔諭を響應せらる。同七時半より、松陰先生と乃木大將といふ題下に就き一場の講話ありたり。

(要旨は載せて講演稿に在り)

久能中將來校

九月廿一日、國民飛行會理事久能中將來校、飛行機及び歐洲戰爭に關する講話ありたり。(要旨は載せて講演稿に在り)

長岡中將古谷少將來校

九月廿五日、長岡中將、古谷少將來校、生徒に一場の講話をせられたり。長岡中將は、「歐洲の大戰争は、如何に諸君の身心に影響を及ぼしつゝあるか。此の戰争は、實に、多大の教訓を我等に與へつゝあるにあらずや。されば我等は、此の教訓を、尋ねに附せず、よく研究して、將來に對する覺悟をせねばならぬ」との警告を與へられ、「風邪の爲め咽喉を痛め、醫師より話を止められて居る故、遺憾ながらこれにて置く。余は、余の話さんとすることを、古谷少將に話も置きたれば、後

は同少將より聞きくれよ」とて退出せられたり。それより、古谷少將は、長岡中將に代りて登壇、例の熱誠を揮はれて、「國民は、いつも元氣がなくてはならぬ、殊に、戰争には之が必要である、元氣は即ち體力であるから、元氣の旺盛を計らんと欲せば、體格の強健に注意せねばならぬ。」とて、福島大將の梅干に握飯主義を推稱し、それより、種々例を挙げて、今の中学生の惰弱なる風を指摘し、「自轉車に乗りて通學するは、身體を柔弱ならしむる原因である」と慨歎して、一同に多大の感動を與へ、最後に、陸海軍人志望者を奨励して、降壇せられたり。

花田中佐來校

十月二日、花田中佐來校、報德會の趣旨に就き、一場の講話をせられたり。氏は先づ、「人は、志を立て精神を修養して向上せしむれば、偉人となることが出来る、如何に物質上の文明が發達しても、偉人が居なければ文明の國であるといはれぬ」とて、立志の必要より説き起し、松陰先生の志訓を引きて、「先生の志といふ事は、報徳と云ふことに歸着する、我等の會も、この趣旨から報徳會と名づけた」とて、報徳會名義の由來を説明し、「明治天皇の御勅語の主旨も、つまり、報恩といふことに外ならぬ」とて、報恩謝徳の人間に缺ぐべからざることを、丁寧反復して、最も徹底的に解説し、終りに、報徳會の設立を懇懃もて局を結べり、

毛利公爵來校
十月三日、毛利公爵來校、一同を講堂に會し、川口近侍長より、左の挨拶をせられたり。

公爵閣下は、此度、御墓參の爲め、當地に御出になり、皆様に御召さる。皆様は、申すまでもなく、先輩の元氣ある事蹟に考へられ、國家の爲に、有用の人物となられんことを希望します。終に臨み、皆様の健康を祈ります云々。

立太子禮奉祝式

十一月三日午前八時半より、嚴肅なる立太子禮奉祝式を舉行せられ、校長の立太子禮に關する訓話ありて、同九時半式を終ふ。訓話は載せて卷頭に在り 同十時より、奉祝武道大會の開催ありて、健兒の元氣旺盛を極めたり。

學友區長更迭

十一月十日、藤井教諭の南萩學友區長を免じ、相島教諭其の後任を命ぜらる。

聖駕遙拜式

十一月六日、今回、肥筑の野に於ける、陸軍

大演習の御統監を終へさせられし 大元帥陛下には、御還幸の御途次、本日、本縣佐波郡防府町三田尻毛利公爵邸に、御駐輦あらせらるゝ事となりたれば、午後一時より、聖徳及び國體に關する、校長の講堂訓話あり。訓練員生徒一同、運動場に整列し、午後二時三十分、三田尻驛御着輦の時刻を計り、其の方面へ向ひて、遙拜を行ひ、以て奉迎せり。

十一月十七日、大元帥陛下、六時三十分、三田尻驛御發輦御還幸あらせらるゝにより、前日の如く運動場に於て、遙拜を行ひ、奉送せり。

松陰先生追慕會

十一月廿一日、午前十時より、例に依り、松陰先生追慕會舉行せらる。校長の訓話、及び、安藤教諭の、松陰先生の遺文座右銘の講義あり。講義は別に午後一時より松陰神社に參拜す。

古谷陸軍少將篠原海軍大佐來校

十二月四日、文部省視學委員高橋草臣氏來校、主として、博物科の教授、及び、其の標本に就きて、視察せられたり。

古谷陸軍少將篠原海軍大佐來校

十二月七日、古谷陸軍少將篠原海軍大佐來校、午前八時五

十分より、生徒一同を講堂に會し、古谷少將は、陸海軍々人志望者奨勵、學生の心得に就き、篠原大佐は、海軍々人志望者奨勵に就き、それゝ、熱誠に講話せられたり。少將講話の要旨は、過る九月廿五日、本校に於てせられしものと大同小異なり。

海軍大佐安村介一氏來校

十二月十九日、海軍大佐安村介一氏來校、午前九時二十分より、生徒一同を講堂に集め、海軍々人志望者奨勵の爲め、一場の講話をせられたり。氏は先づ、防長二州が人才を輩出せしは、既に過去の事に關して、今や二州の人才は、凋落に趣きつゝありと説き起し、二州の青年たるものには、過去の歴史に顧みて、大に努力奮勵、以て此の頑勢を、挽回せざるべからずと叱諭し、それより話題一轉して、學生が舉つて實業界に向ふ傾あるは證見にして、歐洲戰爭平和克復の曉には、今迄盛なりし實業熱の、頓に冷却を來すべきは、必至の勢なれば、今より學生が、實業界に投げんとする準備をなすは、其の時機を失したるものなりとの警告を與へ、獨り實業界のみならず、他の方面へも、平等に進めと注意し、最後に、自己の立場より、海軍に志願するこそ得策なれと奨勵し、二州の歴史に徵するも、二州の青年は、海軍に志望すべき義務ありと結びて、降壇せられたり。時に十一時五十分。

(因に、氏は、本縣三田尻の出身にして、海軍省人事局長た

はれたり。

九月十三日、校長村上俊江先生の告別式行はる。先生は、今回、病氣の故を以て、退職せられたり。其の告別の辭の大要に曰く。

敗軍の將は、兵を語らずといふ言がある。余、此の校に就任以來茲に八年、其の間、何の功績もなく、無能で經過したのは、猶ほ、敗軍の將の如きものである。今となつて、復た諸子に向つて、教育の事を語る必要はない。昔、支那の呂蒙は、士別れて三日ならば、即ち刮目して相待つべしといつたが、今や余は、諸子と相別る、諸子それ益々自重攝生勉強修養して、有用の人物となれんこと、余が切望刮目して待つ所である云々。

十月九日、校長岩田博藏先生の紹介式行はる。先生は、もと、我が校に、教諭を執られたる事あり。後、愛媛縣立西條中學校長、同縣立松山中學校長等に榮轉せられしが、今回村上校長の後任として、再び、我が校に赴ふることを得たるは、誠に生等の幸なり。其の就任挨拶の大要は左の如し。

教育の大本は、教育勅語が示す所なれば、余が今更述ぶるまでもなきことである。併し、勅語の趣意を徹底する方法は、大に研究を要する問題である。余も着任早々で、對象たる諸子を研究して居らぬ故、今後十分に研究して、之を貫徹する考である。其の昔ながらの山川に對し、我々一同は、恥ぢないやうに、御奉公をすると云ふ、重大な覺悟な

りしが、該回、シンガポールに碇泊中の、帝國軍艦新嘉坡長に榮轉、其の赴任の途次、當地の親戚を訪問せられし序を以て、本校に立ち寄り、後進者の爲に、一場の講演をせられたるなり。)

送迎彙報

一月廿二日、教諭山田兵吉先生の告別式行はる。先生は、退職後、阿武郡立實科高等女學校に教諭を執らるやに聞く。一月廿七日、教諭舟木秀一先生の紹介式行はる。先生は、山田教諭の後を承けて、數學の教授を擔任せらるべし。

三月十七日、教諭庄野貞一先生の告別式行はる。先生は、今

回、嚴父の病氣看護の爲めに、退職せられたり。

四月廿八日、久保田淺之丞先生の紹介式行はる。先生は、劍道の指南を擔當せらるべし。

九月二日、アカナン先生の告別式行はる。先生は、今回、山口中學校兼山口高等商業學校の英語科団員として榮轉せられ、其の後任として、ケレーラム先生來任、本日紹介式行

十一日附を以て許可せられたり。

四月十八日、教諭長見曙介先生、団員教師森又雄先生の紹介式行はる。長見先生は、習字科専任の傍、國語漢文の教授をも擔當せらるべく、森先生は、英語教授を擔任せらるべし。

四月廿八日、久保田淺之丞先生の紹介式行はる。先生は、劍道の指南を擔當せらるべし。

九月二日、アカナン先生の告別式行はる。先生は、今回、山口中學校兼山口高等商業學校の英語科団員として榮轉せられ、其の後任として、ケレーラム先生來任、本日紹介式行

十一月廿一日、教諭西川五郎先生の告別式行はる。先生は、今回、神奈川縣立第一横濱中學校に榮轉せられたり。

十月十八日、教諭石井登久一先生は、今回、在職の儘、一年志願兵として、第五師團歩兵第十一聯隊に入營の爲め、本日、郷里に向つて、出發せられたり。

十一月廿一日、教諭西川五郎先生の告別式行はる。先生は、今回、秋田縣立横手中學校より榮轉せらる。西川教諭の後を承けて、歴史修身英語の諸科を擔任せらるべし。

久しく病氣引籠中なりし教諭藤井百輔先生は、靜養の爲め、豫て、辭表提出中の所、十二月一日附を以て許可せられたり。

十二月七日、教諭池上鶴也先生、教諭心得猪川繁次先生の紹介式行はる。池上先生は田邊先生の後を承けて、地理歴史科を經營せらるべく、猪川先生は、藤井先生の後を承けて、國語漢文科を擔任せらるべし。

寄宿舍農園記事

寄宿舍一坪農園は、年を逐ひて良好の成績を得、大正四年度に於て、舍生五十餘名の作物を寄宿舎に購入せり其の種類

量價格左の如し

種類
大葱
白菜
高糸
白糸

根菜
菜葉

量
各
八四、六〇〇
五三、六〇〇
一二一、六〇〇
三二、五〇〇
一〇、八〇〇

價格
厘
三、六〇五
二、四五〇
八、〇九五
二、〇六五
一、五三〇

馬鈴薯
胡瓜
茄子
春子
小松菜
菊菜
合计
馬鈴薯
胡瓜
茄子
春子
小松菜
菊菜
合计

一、二〇〇
一一〇箇

〇、一二〇
一、八六〇
〇、八〇〇
〇、〇八〇
〇、一七五
一〇、七八〇

(右金額は各自勤労貯金として郵便局へ預入せり)

神と申すものは、正直なることを好み、又、清淨なる事を好み給ふ故、神を拜むには、先づ己が心を正直にし、又、己が體を清淨にして、外に何の心もなく、たゞ謹み拜むべし。是を誠の神信心とは申すなり。

松陰

附

錄

附録

山口縣立萩中學校沿革略

本校は舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に溫陽す。○後改めて公立中學校となし明治十一年五月又改めて山口中學校の分校として大に教則を改正す。○十七年山口中學校の高等中學校となり文部省の所管に歸するに及び三月十一日を以て本校は萩分校と改稱せられ高等中學校の豫備校となれり。○二十年四月一日改めて萩高等小學校別科と稱せられ重見經誠氏主幹となる同年八月重見氏轉任し綿貫誠輔氏代る。○同年十二月萩學校と改任せらる。○二十三年四月公立を改めて私立とせられ防長教育會の所管に歸せり。○二十九年九月防長教育會之を本縣に寄附し山口縣立山口中學校の分校となし校則の全部を改正す。○四月一日綿貫氏萩分校主事を命ぜらる。○三十年八月三十一日山口縣尋常中學校萩分校と改稱せらる。○三十一年三月教諭渡邊盛次郎氏代りて主事

心得となる。○同年四月渡邊盛作氏主事に任せらる。○三十二年九月一日分校より獨立して山口縣立萩中學校となり縣令を以て規則を發表し職別並に事務章程を定められ元萩分校生徒二百九十三名に加へて新に百十名の入學を許し渡邊盈作氏校長心得を命ぜらる。是より先校舎は江向村なる明倫館跡に在りしが是に至り堀内村なる新築校舎に移る。○同月十八日兩谷羔太郎氏校長に任せらる。○十月十八日開校式を行ひ此日を以て本校の紀念日と定む。○三十四年四月十五日第一回卒業式を行ふ卒業生三十七名是月始めて補習科を設く。○三十五年二月新築寄宿舎を開き舍生を收容す。○同年四月十七日第二回卒業式を行ふ卒業生四十二名。○三十六年三月二十九日第三回卒業式を行ふ卒業生五十一名。○三十七年三月三十日第四回卒業式を行ふ卒業生五十二名。○同年四月十二日兩谷校長病歿せられ教諭塙本又三郎氏校長事務取扱を命ぜらる。○同年十二月七日塙本氏校長に任せらる。○三十八年三月二十七日第五回卒業式を行ふ卒業生四十三名、是月縣令を以て共通入學試験の制を定めらる。○同年八月塙本校長第二高等學校に轉任せられ教諭岩田博藏氏校長事務取扱を命ぜらる。○九月長崎縣立

島原中學校長羽石重雄氏校長に任せらる〇三十九年三月二十七日第六回卒業式を行ふ卒業生六十一名〇四十四一年三月二十四日第八回卒業式を行ふ卒業生五十六名〇四名〇十一月三日戊申詔書奉讀式を講堂に行ふ〇四十二年三月二十三日第九回卒業式を行ふ卒業生三十八名本年より縣令を以て共通試験を廢せらる〇四月三十日羽石校長岩國中學校長に轉任せらる〇五月七日熊本縣立八代中學校長村上俊江氏校長に任せらる〇七月七日戊申詔書奉讀心得を頒つ〇四十三年三月二十四日第十一回卒業式を行ふ卒業生四十九名〇十二月一日寄宿舎の名を定めて誠之學舎といふ〇四十四年三月二十四日第十二回卒業式を行ふ卒業生四十七名〇四十五年三月二十四日第十二回卒業式を行ふ卒業生五十二名〇七月二日久原氏獎學金給與規程成る〇大正二年二月七日訓令第五號を以て山口縣立中學校共通入學試験於行規程を定めらる〇三月二十七日第十三回卒業式を舉行す卒業生五十九名〇十一月四日久原氏獎學金給與規程第五條の次に現第六條を追加し元第六條以下を順次繰下るこどゝなれり〇三年三月十九日第十四回卒業式を舉行す

職員

未

武學貸費生表	別數
	科補
一	習
	學第
三	年五
	學第
三	年四
	學第
一	年三

(大正五年十一月二月末現在)

卒業生一覧（いろは順）

第一回(明治三十四年三月)

陸軍砲兵大尉
早大法學士高文合格
在米國桑港實業

東商船卒業 同校教授
死亡
海軍大尉

渡邊和田澤
五專準泰
六三介三

卷之三

藤井達吉	増山良四郎	山本豊	梨花次郎熊輔	山田中村敏	都野正一	横田中三	柏村章造	河野厚造	岡本精一	石田藤井	上原清一郎
藤井達吉	増山良四郎	山本豊	山田藤助	山本政人	都野正一	横田中三	柏村章造	河野厚造	岡本精一	石田藤井	上原清一郎
藤井達吉	増山良四郎	山本豊	山田藤助	山本政人	都野正一	横田中三	柏村章造	河野厚造	岡本精一	石田藤井	上原清一郎
藤井達吉	増山良四郎	山本豊	山田藤助	山本政人	都野正一	横田中三	柏村章造	河野厚造	岡本精一	石田藤井	上原清一郎
藤井達吉	増山良四郎	山本豊	山田藤助	山本政人	都野正一	横田中三	柏村章造	河野厚造	岡本精一	石田藤井	上原清一郎

陸軍砲兵大尉	早大法學士高文合格	厚東太東	栗屋鐵藏	藤井良輔
在米國桑港實業	モト宮川	兒玉真一	天野正六	井
教員	死亡	阿武信二	阿武信二	
陳備海軍少尉冒險世界主筆	死亡	栗屋鐵藏	栗屋鐵藏	
東大農實科卒業	死亡	藤原朝夫	藤原朝夫	
高知縣小林區署	(日露戰役旅順 二於子戰死)	坂上五郎	坂上五郎	
陸軍工兵大尉	死亡	木川貞輔	木川貞輔	
海軍少佐	死亡	三戸基	三戸基	
北大農實科卒業	(日露戰役旅順	藤眞越	藤眞越	
北海士別御料局	二於子戰死)	浦德	浦德	
東商船卒業郵船會社	死亡	三原朝夫	三原朝夫	
陸軍步兵大尉	モト高橋	勝野	勝野	
畫家	モト高橋	平田由之	平田由之	
(以上三十七名)	平	千秋	千秋	
第二回(明治三十五年三月)	石津御作	義久	義久	
陸軍步兵大尉	モト阿川	新作	新作	
死亡	林井上義	金	金	
東大工學士三池炭坑	茶川	根良	根良	
京城遞信局吏員	早大卒業小坂鑑山	新章	新章	
岡山醫學士陸軍一等軍醫	茶川	御作	御作	

東商船卒業 同校教授	東大獸醫學士陸軍一等獸醫 海軍大尉
郵電卒業	早大師範卒業中學教諭 在東京實業
東大工學士鐵道院	陸軍輜重兵大尉
在青島	長崎醫學士開業醫
大阪高工卒業技師	陸軍步兵中尉
陸軍步兵大尉	海軍大尉
未詳	豫備陸軍砲兵中尉萩中教諭 死亡
陸軍步兵大尉	神戶稅關吏
東洋大學卒業	萩泉福寺住職
日立製作所員	モト森信
東大農學士在鄉	國學院卒業中等學校教諭

渡邊五六和田準介
河野安宅小七郎
河田澤泰専三
柿並誠一
中村喜代藏
永田民也
河野通毅
上原多一
山村正一
山根省三
山根孝一
山本松四
山本松四
山本百合
山本慈雲
前田正敏
增野榮三
江木生
安江櫻
栗屋春太郎
周祐

第三回三十六年三月

陸軍歩兵中尉	國學院卒業中	モト原川
等學校教諭	會社員	有田國介
海軍少佐	山口高商助教授	阿座上長一
死亡	東洋協會卒業在臺灣實業	阿武清
京大法學士陸軍理事	死亡	佐藤虎介
死亡	京大法學士在鄉	佐伯益
富田町鹽專賣局出張所員	死亡	佐藤三
會社員	死亡	木村
死亡	菊屋孫輔	杵築市助
在朝鮮新聞記者	品川鴻介	湯原綱
會社員	三宅彌太彥	木村
東美卒業同校助教授	稻田茂太	菊屋
早大高師英部卒業中學教諭	今井省三	佐伯
在鄉醬油醸造 味米商	波多野晋平	佐藤
東大工學士鐵道院技師	波根義三	佐藤
東高商卒業會社員	林志香	佐藤
死亡	友永儀三郎	阿座上
死亡	太田明治	阿座上
死亡	大多和作	阿座上
死亡	太田完	阿座上

兵庫縣技師	山高南卒業瀬陽地方金融組合	片山市太郎	渡邊儀賢
京大文學士東京音樂學校教授	兼常清佐	吉田光胤	
死亡	在下關商業	高木孫治	
大阪高醫卒業	田中唯一	田中唯一	
海軍大尉	田村能介	田村能介	
廣島高師卒業中等教員	玉木正行	玉木正行	
海軍機關大尉	田坂信一	田坂信一	
東高商卒業海軍大主計	曾根昌一	曾根昌一	
死亡	中嶋常介	中嶋常介	
在鄉	中野清	中野清	
早大商科卒業	中村文治郎	中村文治郎	
京城東洋拓殖會社員	内田賛	内田賛	
東大農實科卒業林業技手	宇野英一	宇野英一	
陸軍步兵大尉	上田米太郎	上田米太郎	
東慈惠卒業高繩病院醫員	口羽雅介	口羽雅介	
釜山稅關吏	山谷俊一	山谷俊一	
在鄉	山田正一	山田正一	
在大阪藤田氏邸内	厚藤井	厚藤井	
在京城實業	松本民介	松本民介	
東大農實科卒業教員	寺林市	寺林市	
死亡	寺田二郎	寺田二郎	

栗屋昌介	坂本治耶	阿部赤川	佐藤古一	在下關會社員
出澤助吾	本治耶	吉川省吾	庄助	大卒業組合スタン
熊井勝	耶	在東京實業	坂本治耶	ダードガイル會社員
片山モト	在鄉	在鄉	在鄉	海軍大尉
死亡	死亡	死亡	死亡	陸軍步兵中尉
在朝鮮	在朝鮮	在朝鮮	在朝鮮	東高工卒業神戶鐵道院
農藝技手	農藝技手	農藝技手	農藝技手	海軍書記
死亡	死亡	死亡	死亡	明大卒業
在京大工學士三池炭坑	三井物產會社員在朝鮮	慶大卒業財科卒業浪速紡績會社支配人	陸軍輜重兵大尉	陸軍輜重兵大尉
在朝鮮	在朝鮮	在朝鮮	在朝鮮	在朝鮮
第四回(明治三十七年三月)	以上五十一名	伊藤傳次	モト中島	モト中島
		末岡周介	白上貫之助	白上貫之助
		杉道助	篠原五郎	篠原五郎
		弘毅太郎	島尾平七	島尾平七
		井田正作	鳥田八重丸	鳥田八重丸
		林信義	原田正作	原田正作
		俊秀	山正作	山正作

井伊蔵兵少尉數員

東大工學士鉄道院技師	太田明治	死亡
東高商卒業會社員	大多和作太	死亡
死亡	完	死亡

東京高商卒業奉天

毛ト植木

橋本

西村

吉見一郎

秀

神戸機才會社

山本公介

死亡

死亡

大田正敏

松尾英一

死亡

死亡

正木孝介

寺西啓太郎

山下盛太郎

太田健太郎

死亡

死亡

河名識雄

岡田信太郎

堤繁治

羽崎勝五郎

筑治

在下關

死亡

死亡

長井寬治

中子徳一

死亡

死亡

中村正治

中村助順

中村義輔

河野利長

横地素之進

死亡

死亡

高橋信一

河野嘉春

死亡

</div

以上五十九名

第十五回(大正四年三月)

一年志願兵

京佛大在學

死亡

東京青山

東高工在學

大阪高工卒業

在鄉

陸軍士官候補生

下關稅務署員

山口高商在學

在東京

熊本藥卒業

士官候補生

在鄉

千葉醫卒業

在朝鮮釜山

在鄉

陸軍士官候補生

在下關

長崎醫卒業

在東京

神高商在學

大坂醫大在學

了

在東京

六高在學

早稻田大學

在東京

五高在學

下關簿記學校在學

在鄉

五高在學

大坂醫大在學

在東京

五高在學

東京鐵道院

在鄉

五高在學

早稻田大學

在鄉

五高在學

山口稅務署

在鄉

五高在學

在鄉

五高在學

在鄉

五高在學

山口高商在學

在鄉

五高在學

大坂高工在學

在鄉

五高在學

東高商在學

在鄉

五高在學

長崎醫專卒業

在鄉

五高在學

熊本高工在學

在鄉

五高在學

東高師理科在學

在鄉

五高在學

大坂高工在學

在鄉

五高在學

小學校教員

在鄉

五高在學

山口高商

在鄉

五高在學

大坂高工在學

在鄉

五高在學

長崎醫科在學

在鄉

五高在學

明大豫科

在鄉

五高在學

熊本高工在學

在鄉

五高在學

京佛大在學

死亡

東高商在學

在鄉

未詳

五高在學

大坂高工在學

在鄉

五高在學

長崎醫科在學

在鄉

五高在學

熊本高工在學

在鄉

五高在學

京佛大在學

死亡

東高商在學

在鄉

未詳

五高在學

大坂高工在學

在鄉

五高在學

長崎醫科在學

在鄉

五高在學

熊本高工在學

在鄉

五高在學

京佛大在學

死亡

東高商在學

在鄉

未詳

五高在學

大坂高工在學

在鄉

五高在學

長崎醫科在學

在鄉

五高在學

熊本高工在學

在鄉

五高在學

京佛大在學

死亡

東高商在學

在鄉

未詳

五高在學

大坂高工在學

在鄉

五高在學

長崎醫科在學

在鄉

五高在學

熊本高工在學

在鄉

五高在學

京佛大在學

死亡

東高商在學

在鄉

未詳

五高在學

大坂高工在學

在鄉

五高在學

長崎醫科在學

在鄉

五高在學

熊本高工在學

在鄉

五高在學

京佛大在學

死亡

東高商在學

在鄉

未詳

五高在學

大坂高工在學

在鄉

五高在學

長崎醫科在學

在鄉

五高在學

熊本高工在學

在鄉

五高在學

京佛大在學

死亡

東高商在學

在鄉

未詳

五高在學

大坂高工在學

在鄉

五高在學

長崎醫科在學

在鄉

五高在學

熊本高工在學

在鄉

五高在學

京佛大在學

死亡

東高商在學

在鄉

未詳

五高在學

大坂高工在學

在鄉

五高在學

長崎醫科在學

在鄉

五高在學

熊本高工在

會 告

一、本誌は會友諸君の寄稿を切望す。期限は十一月末日までとす。用紙隨意。

一、會友にして、本誌の寄送を望まるゝ諸君は、郵

稅共實費金貳拾貳錢（郵券代用妨なし）を預め送附

し置かれたし。本誌の發行は毎年三月とす。

一、卒業生一覽に載する所の會友諸君の現况中には實を失へる者鮮からざるを信す。御氣附諸君の御一報を請ふ。

印刷所 山口響海館

全

上

大正六年三月十一日印刷
大正六年三月十五日發行
（非賣品）
編輯者兼
山口縣吉敷郡山口町道場門前第九番地
三輪昂

全

上

印刷者 大津いわ

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

全

上

